アッシュ戦記

神名　心

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
アッシュ戦記

【Ｎコード】
Ｎ８０２１Ｓ

【作者名】
神名　心

【あらすじ】
私は母を殺した5人の法外の貴族と呼ばれる犯罪者たちに復讐を誓った。これはその復讐劇である。毎朝１０時更新！！ガンバリマス！！

序（前書き）

アッシュ・クロフォードは母の仇の5人ガルド・イニエーブ、グライア・シンシア、バルド・ゲール・アラン、シャルレ・ガージマス、イポニチェ・ゴルディーザに復讐をするべく立ちあがった。

序

深い感情が横たわっていた。それはまるで地中一面に張り巡らされた電線のように私の根っこに浸透していた。いつ頃から私にその真っ黒な感覚が芽生えたのかは、はっきりしている。あれは、ただ一人の肉親であった母が無残にも稀代の犯罪者たちによって命を奪われた日だ。

そして、その首謀者5人はまだ生きている。彼らは法の及ばない存在＜法外の五貴族（アシュランテ）＞と呼ばれ、政治的もしくは力的関係において、警察や軍隊も手出しできない存在だったからだ。ガルド・イニエーブ、グライア・シンシア、バルド・ゲール・アラン、シャルレ・ガージマス、イポニチェ・ゴルディーザ。私は新聞や雑誌でこの名前を見ると、一日どうしようもない殺意と冷徹さを持った人間に生まれ変わる。私は母を失ってから、親戚の家で肩身の狭い暮らしをしながらも、彼らの名前を忘れたことはなかった。正確にいうと、私と母が巻き込まれた事件＜秋の大殺戮（オータム・バルバロッサ）＞のことを聞かされたのは育ての親ともいうべき、ガルザニ叔父からであった。１５歳の誕生日の日だった。私は叔父に皆が寝静まった後に呼ばれ、テーブルについた。そこで、母のことを覚えているか?と問われた。私はもちろん覚えていた。当時１０歳だった私は記憶するには十分すぎる衝撃の光景があった。けたたましい爆発音と銃声が響く中で母に手を引かれ私たちは逃げまどっていた。一介の市民にはその時何が起こっているのかわかるはずもなかった。ただ、何故か戦いが始まり、何故か人が死んでいった。まもなく母も凶弾に倒れた。私は母の身体のぬくもりが消えていくまで、ずっと母にすがって泣いていた。そして、いつの間にか泣きつかれて、寝てしまっていた。気付いた時には戦いは終わり、母の冷たい亡骸がそこにはあるだけだった。かくして、私は秋の大殺戮（オータム・バルバロッサ）の数少ない生き残りとなった。ガルザニ叔

父は私がそのことを告げると、法外（アシュランテ）の五貴族のことを私に教えた。
私は復讐を誓った。だが、彼らの素性は謎に包まれていた。誰もが復讐を恐れて、口を閉ざしていた。ただ、犯罪を犯す時、彼らの悪業は大体的に宣伝されるのだった。私はその記事を頼りに、五貴族のことを調べまわった。そして、いつの日か彼らを法の下に引っ張り出して裁きを受けさせたいと思っていた。さらに、もし叶わなければ自らの手で復讐を決行するつもりであった。上級大学に進んだ私は法外（アシュランテ）の五貴族についての研究をしているふうを装って、ついに一人の手がかりを得た。ガルド・イニエーブだ。　これから、このイニエーブとの熾烈な戦いを語りたいと思う。かくして２６の夏、私の復讐劇は始まった。

序（後書き）

あらすじみたいな文章になってもうた＞＜；

一章ガルド・イニエーブ＜1＞

ガルド・イニエーブは法外の五貴族の中でもっとも謎に包まれている。だが、真偽はさておき、もっとも情報が人々の口からもたらされるのが彼だった。これには、わざと情報をもらし、人が口々に噂するのを喜んでいるという自己顕示欲の塊であるとか様々な説がある。謎によって彼は法外の五貴族の仲間入りをした。彼は素性が知れないという一点によって、国家警察の逮捕を免れてきたのだ。グライア・シンシアのような、絶大な権力やバルド・ゲール・アランのような知略もなく、シャルレ・ガージマスのような狂気ももっておらず、イポニチェ・ゴルディーザのように畏怖される存在でもなかった。即ち、彼には何の後ろ盾もなかった。それでも、史上稀にみる法外の五貴族の一員と呼ばれるようになったのは、変装術であるといわれている。彼はいわば、多くの人間に成りすますことで、数々の悪行を重ねてきた。中でも有名なのは。世界に並び立つ2大国、ゲルマンとアーリア帝国の首脳会談の際、ゲルマンの統領、グニア・レンズブルクに成りすましていたといわれる。ゲルマンの英雄、ニーチェリアによって企みは露見したが、あと一歩で全面戦争かというほどに両国の関係は悪化していた。そして、ニーチェリアも彼を捕らえることはできなかったのだ。本編の主人公である私、アッシュ・クロフォードは既に退役していた英雄ニーチェリアと会う機会をもつことを目指した。そしてある日それは実現した。

前日にゲルマンの首都アルベリンにあるベアトリーチェ空港に降り立った。ホテルに一泊し、理路整然と並んだ建築物に目を奪われた私は束の間の異国情緒を感じたが、すぐに本来の目的を思い出した。そう、ガルド・イニエーブの手がかりを求めて、ゲルマンの英雄ニーチェリアと会う約束をしていたのだった。もっとも、英雄とはいっても、名声などは忘れ去られるのが早い国なのか、ニーチェ

リアの家はごく普通の一軒家であった。私を迎えニーチェリアは白髪の髭を伸ばした老紳士だった。そして、目には力ともいうべき光が確かに宿っているようだ。鋭い眼光でみつめられると一介の学生である私は緊張してしまった。彼はイニエーブについて話したくてたまらないようだった。

「さっそくですが、ニーチェリアさん。ガルド・イニエーブについて聞きたいのですが」

「もちろん。いいとも。アッシュ君。しかし、君も奇妙なことに興味を持つのだね。法外の五貴族の研究なんて一文にもなりはしないだろうに」

私は少しムッときた。が、相手を怒らせないように慎重に言葉を選んだ。

「たしかに、一文にもなりません。しかし、興味があるのです。それでさっそくですが、貴国の統領になりすました事件。なんとこちらでは呼ばれているのでしたかね、それについてお聞きしたいのですが」

ニーチェリアは自分の知識をひけらかすように笑っていった。

「ああ。グニア事件でいいよ。こちらでも様々な呼びかたがある。だが、この国では誰もあまり語りたがらない。なんといっても、わが国の誰もが気付いていなかった一国の長のすりかわりだからね。いわば、恥な事件とでもいうべきであろうか。わが国民は極めてプライドの高い民族だからね。私も含めてね。君は私に感謝しなければならないよ。もちろん、君の熱意に負けたのだがね。君ときたら、一年間に３００通もの手紙をよこすのだからね」

「その節は失礼しました大佐。しかし、どうしても、ガルド・イニエーブと直接会ったことのある人と話がしたくて」

大佐と私が言ったことで、気を良くしたのか彼はますます饒舌になった。

一章ガルド・イニエーブ＜2＞

「いいだろう。グニア事件の話をしてやろう。まず私が知っているのは彼の情報収集能力の高さだな。本来なら機密にもなるだろう統領の癖にいたるまでを詳細に調べて演じていたのだからな。そして、奇怪なのは彼がいつ統領と入れ替わったのか今をもってしても謎ということだ。国の中にイニエーブの協力者が潜んでいたのだろう。ということになっているが、どうも腑に落ちないのだよ」

私はニーチェリア元大佐の長いお喋りに幾分うんざりしながら、辛抱強く有益な情報を聞き出すチャンスを待っていた。そして、話がひと段落した時、すかさず訊ねた。

「ガルド・イニエーブとわかったのは何故ですか？」

彼は話しに水を差されて不機嫌そうに眉をしかめたが、少し考えて、答えた。

「それは簡単だ。グニア様の死体が見つかったからだ。顔を潰された痛ましいものだった」

「顔を潰されたのに何故彼と？」

「我が国では警察によって全ての人間の指紋がデータバンクに入れられているのだよ。もちろん、グニア様も例外でなくね」

「なるほど、それでは、偽者が何故ガルド・イニエーブだと？」

「グニア様とまったく同じ指紋をもっていたからだ。そして、ばれるやいなや、消えて犯行声明を出したのだ。我が国では最先端技術によって、指紋の認証が公的なあらゆる場で使われている。統領府も例外でなくね」

彼は最後にそう言うのが口癖のようだった。まあそんなことはどうでもいい。つまり、ガルド・イニエーブは指紋にいたるまで、グニア氏の個人情報をいつの間にか盗んでいたのだ。そして、それほど用意周到にしておきながら、何故死体の指紋はそのまま残しておいたのか・・・・・。ここに私は違和感を覚えた。単なるイニエ

ーブのミスなのかもしれないが、とても世界の2大国を動かそうというほどの野望のわりには随分とお粗末な結果だったということだ。彼の目的はもしかして別にあったのではないか。私はそう考えた。しかし、何の確証もなかった。

「それで、イニエーブは指紋をどこで変えたのでしょうか？わかっていますか？そして、機械を欺くほどに指紋を変えることは可能でしょうか？」

私はさらに続けた。元大佐は立ち上がると、窓のほうを見ながら私に背を向けると言った。

「蛇の道は蛇に聞けということわざが我が国にはあってね。わが国ではもちろん指紋を変えるのは違法だ。しかし、別の指紋に変えることは可能なようだね。その瞬間もちろんゲルマンの国民でなくなるのだがね。すすんでそんなことするものがいないわけではないようだ。そして、さすらいの指紋師といわれる男がいるらしい。」

「その男の名前はわかりますか？」

「なんでも、アルバタール・フィンガーマークと名乗っているそうだ。わが国でも全力で探したが何しろこの国の人間ではないようでね。しかし、君が指紋を変えたいといえば向こうから寄ってくるかもしれないね。しかし、それには莫大な金がいるだろう」

「わかりました。ありがとう。大佐。感謝します」

私はこうして大佐と別れた。次はいかにして金持ちを装い、フィンガーマークと如何に接触するかであった。

一章ガルド・イニエーブ＜3＞

お金は当然もっていなかったので、故郷に戻った私はガルザニ叔父に相談することにした。ガルザニ叔父の家、つまり私の青春時代を過ごしたトールキアという町にある石造りの家の前にくると、従妹のサニチェエートが気づいて、私に駆け寄って来た。

「アッシュ兄さん。お帰りなさい。来るという手紙をもらって待っていました」

十分魅力的な若い笑顔は一時、復讐を忘れさせたが、立ち止まっている暇はなかった。サニチェエートに挨拶もそこそこに、叔父の待つ家へと入った。ガルザニ叔父はいつものような暖かい笑顔で私を迎えてくれた。

「アッシュ。まあゆっくりしていけ」

叔父の言葉はもちろんありがたかったが、私に時間はない。単刀直入に切り出した。

「叔父さん。どうしてもお金がいるんだ。どうにかして、お金を得る方法はないだろうか？」

叔父は煙草を軽くふかすと、心配そうに私を見た。

「お前が、大学で法外の五貴族について調べているのは知っている。確かに、秋の大殺戮にはやつらが関わっているのは周知の事実だ。お前もそれは知っているだろう。だが、復讐を考えるなど馬鹿げたことだ。もっと自分の幸せを考えてはくれないか」

叔父は私の内面を驚くほど理解していた。だが、私の信念の固さは理解していないようだった。必ず母の復讐を果たして初めて母は安らかに眠れるのだ。揺るぎない意志でいたが、叔父を心配させるのは本意ではなかったので、努めて明るく言った。

「叔父さん。僕は復讐なんて考えていませんよ。安心してください。たしかに、彼らが憎い。そして、彼らの研究をしていることも事実

です。しかし、自分の身や叔父さんの家族、いや僕の家族も同然の人たちを危険にさらすことはないです。投資をしようと思いましてね」

壮年の叔父は幾分安心したように、

「それならば私が保証人になって、お金を借りてあげよう。いくらほどだね」

「助かります。１００万マルセルほど」

マルセルはアーリア帝国の貨幣単位で、ゲルマンのマルクと並んで国際通貨となっていた。決して、この金額で足りるとは思わなかったが、私はこれを元手に増やすしかなかった。叔父はアルベルト銀行の友人から借りてあげようと、言って、一週間後に私の口座に振り込んでくれることになった。帰り際、サニチェエートがまた門の所で待っていた。

「お気をつけて」

私は妹のように思っている彼女を危険にさらさないと自らに誓いながら、この家には事が終わるまで2度と近づかない覚悟であった。それだけに、私は彼女の眼をじっと見て、

「ありがとう。健康に気をつけて」

と言って家をあとにした。彼女は悲しげに、そして幾分私を哀れむように見送ってくれた。

それからの一週間私は自分の下宿でお金を増やすための投資の準備をし、またガルド・イニエーブのグニア事件での犯行声明を過去の新聞から探し見つけた。

その文とはこうだった。

一章ガルド・イニエーブ＜４＞

親愛なるゲルマン国民に告ぐ。私、ガルド・イニエーブは諸君らの無知蒙昧な国家に対する信頼を明らかにすべく、今回の犯行を行った。法外の五貴族にとってみれば、一国のトップを冷たい亡骸にし、なおかつ、なりすますといったことは容易いことなのだ。諸君らは、普段から自分たち以上の国はないと思い驕っているだろうが、法外の五貴族にかかれば、国さえも思いのままということだ。これにこりて、私を捕まえようなどと馬鹿げたことは以後控えるがいい。―ガルド・イニエーブ―

これは、ある意味彼らしいともいえるが、本当に何の利害もなく、このような危険なことをするものだろうか？私はまたもや引っ掛かった。一歩間違えば、これはゲルマンという国を根底から敵に回す危険もはらんでいたのだ。現状はたしかに、ガルド・イニエーブとゲルマン国は敵対関係にあるわけではないので、彼のもくろみは成功したといえる。だが、どうしてもそれだけに思えなかった私はイニエーブが統領とすりかわったと疑われるだろう時期から可能な限り、統領グニアの出した命令を詳細に調べてみた。すると、ある新聞の一記事に、『グニア統領、行方不明者の指紋データの消去を命じる』とあった。ガルド・イニエーブの指紋の件を聞かされていた私にはこの記事が気になってしょうがなかった。表向きは近年の人口増加によるデータの膨大化によって、記憶装置の負担を減らすためとあった。しかし、行方不明者はゲルマンの人口およそ一億に対して、わずか１０万人であった。私は何かしら気になりながらも、投資の準備に次の日から忙しくなったので、それ以上調査はできなかった。投資の方法は手早く言えば詐欺の一種だった。世界中から、資金を集め、集めた資金の一部を配当し、どんどん無限に拡大させていく。私の計算によればこの方法を使えばおよそ、露見するまで

に１０年。つまり私に残された時間は１０年だった。その間に金は入り続けるのだ。当然逮捕や重罪は免れないが、私はわが身を犠牲にしても、法外の五貴族への復讐の念は強かった。

さっそく私、アッシュ・クロフォードは実体のないダミー会社を作り上げ、資金集めに奔走する有能な人材を雇った。法外の五貴族の研究を行っていたせいもあって、こういう裏稼業にはかなり詳しくなっていた。こうして準備は整った。私は新聞に広告を出した。

『私はある理由があって、指紋を変えたいのです。お金に糸目はつけません。連絡ください。０×〇－４５３５－▲△▽▼　ビルグ・オノエーブラ』

法外の五貴族に私の身元を知られないように偽名も買った。あとは指紋師アルバタール・フィンガーマークが喰いつくのを待つだけだった。もし違ってもイニエーブの指紋を変えた人間を見つければいいだけだ。他人の指紋をそっくり写しかえるなどという神業はできて、数人だろうと思っていた。もし、本当にできる人間がいるのならばだが・・・・・。

一章ガルド・イニエーブ＜5＞

一週間後、偽名であるビルグ・オノエーブラ宛ての電話は３０件来ていた。半分冷やかしのようなものもあったが、あとは有名な整形外科医などの本物の電話もあった。私は人を雇ってその内容をレポートにして書き出させた。そしてある一件に私は目がひかれた。そこには、指紋を消すだけでなく、指紋をそっくりうつしかえることができると書かれていた。そして、その電話をしてきた相手はアルバタール・フィンガーマークだった。私は確かな手ごたえと同時にあまりにもうまくいきすぎていることで不安を覚えた。だが、とりあえず、会ってみることにした。何回か手紙を往復した後、私は世界中のセレブたちの保養地になっていた神秘の国サルガッソーの高級ホテルで彼を待った。もちろん高級ブランドの服に身を包み、靴、髪形、流行までセレブのようにふるまうことが私に課せられた。自分は金を持っていると相手に思わせることが重要だった。そして、現れた男は東方の人らしく背の低い、浅黒い肌をしていた。

「ビルグさんですか?私はフィンガーマークの代理人でサムというものです。あなたが、国際語であるジャスール語がお出来になるということで、私が選ばれました」

ビルグと呼ばれた私、アッシュ・クロフォードはフィンガーマーク本人が出てこなかったのを残念に思った。そして、ジャスール語というのはアーリア帝国の言語で、私がもっとも得意とする国際公用語である。どうやら、フィンガーマークはジャスール語ができないらしかった。私は気を取り直して喋りだした。

「はい。ビルグといいます。私は様々な享楽をむさぼってきたのですがね。他人になりすますという最高のスリルは味わえていないことに気付いたのです。フィンガーマーク氏は何でも他人の指紋をうつせると聞きましたが、本当ですか?」

サムは満面の笑みを浮かべて、

「はい。私の主人にかかればそのようなことは可能です。ただし、それを行うには手が必要です。残酷な話ですがね。生死は問いません。両手がいいですね。それは御自分で用意していただかないと」
「わかります。それはごもっともです。しかし、サムさん。本当に可能だという証拠をこちらもみせてもらわなければなりません。そうでなければ死体にしろ、手を準備するということはリスクが高すぎる」
私は静かにしかし、力をこめてささやいた。サムはそのような言葉も想定内といった様子で、ささやき返した。
「あなたが指紋まで変えたいということは、相手はゲルマン国の人なのでしょう?実は、統領グニアの成りすまし事件ご存知ですか?あれはうちの主人も一枚かんでましてね」
「ということは、フィンガーマーク氏はあの、ガルド・イニエーブにあったことがあると?」
私は一層、声を潜めてサムに顔を近づけた。サムも顔を近づけて、やはり小声で言う。
「ビルグさん。その名前だけは出しちゃいけません。法外の五貴族の怖さはむしろあなた方よりも法外の人間こそ、知っているのですよ」
サムの顔には怯えの色が濃く漂っている。なるほど、と私は思った。とにかく、この男は何か知っていると確信した。そして、前もって準備しておいた超小型のゲルマン製の発信器を自分のコップの中に入れると、セレブの間で流行っていた親愛の証として口をつけたコップの飲み物を相手に半分飲ませるという行為をするふうを装って、サムに超小型発信器を飲ませた。
「では、また後日話あいましょう」
こういって私とサムはがっちりと握手をして別れた。私はサムの体内から出る発信器の電波を頼りに追跡を開始した。

一章ガルド・イニエーブ＜6＞

最初、追跡は順調だったが、発信器が体内にとどまる時間までに、相手の居所を掴まなければならないという焦りもあった。サムの信号はサルガッソーのある別荘地帯まで来ると、動かなくなった。高級別荘地は一軒が広い敷地を持っているので、サムのとどまっている別荘地の番地はすぐにわかった。その辺りを散歩をするように、歩いたが、門以外の壁の上部には有刺鉄線が張りめぐらされていた。さて、どうしたものか、と思案に暮れていると、ふいに声をかけられた。

「何をしているのだね。若いの」

人相の悪い、男がこっちを見て聞いてきた。

「いやあ、散歩をしていたら道に迷ってしまってね」

私は平然として言うと、男は低い声で脅かした。

「ここはアルバタール・ギンガジザス様のお屋敷だ。用がないならさっさと帰れ」

アルバタールという名前はフィンガーマーク氏の名前と一致する。私はまたもや、何か仕組まれたような作為を感じたが、逆にいえばこれは情報を聞き出すチャンスでもあった。

「ギンガジザス様？何をしている方だね？私は鉄鋼王デニス・オノエーブラの四男ビルグ・オノエーブラだ」

私は早速この偽名の効果を確かめる機会を得た。アーリア帝国の鉄鋼産業界の巨人オノエーブラ家を簡単にあしらうわけにはいくまい。案の定、男は慣れていない作り笑顔で、

「そうでしたか。そうとは知らずに申し訳ありません。私は実は、ここの屋敷に雇われているラビンというものでして、以後お見知りおきを」

と精一杯媚を売った。小物とはこうしたものだ、と私は思った。同時にアッシュ・クロフォードという本名でなくて良かったと思っ

た。偽名とは不思議と違った自分を生まれさせてくれるものだと感じた。私は威厳のある顔つきで、せっかくだから、この館の主人に会いたい、と告げた。ラビンは

「主人は忙しい人でして、屋敷内の案内程度でしたらできますが、御礼は弾んでもらいますよ」

と渋ったが、私が屋敷案内で良いと答え、お金を渡すと、それではどうぞとばかりに手招きのような不思議な動きをした。こうして門を開けてもらい、私は中に入ることができた。屋敷の中はがらんとしていたが、まばらに使用人らしき人間が働いていた。豪華な２階建ての邸宅はゆうに一階だけで２０室はありそうだった。

「どうです。この、絵画は？」

ラビンは美術が好きらしく、有名な絵を自慢するために私を中に入れたような有様だった。イタリーナやフラシェルなどの国々で描かれた絵画が多くあるようで、聖母の絵や天使と悪魔の有名な作品が贋作か本物かどうかは判断できなかったが、並べられていた。どうやら、これらをサルガッソーにやってくる金持ちに見せて小遣い稼ぎにしているらしい。

私は屋敷の奥に入って人影のなくなるのを確認すると、ふいに薬をしみこませたハンカチをポケットから取り出すとラビンの口元に後ろから押し当てた。ラビンは激しく抵抗した。私が口に手を当てることができたのは一瞬だったが、それで十分だった。

「な、何をする。お前、ただの金持ちではないな、何者だ・・・・・」

とそこまで言って、倒れた。私は彼の体を物置まで運ぶと、中に入れた。さて、いよいよフィンガーマークの屋敷を探ることができる。日も暮れかけていて、使用人は先ほど皆帰途につきかけていたのを確認していた。後はラビンのような警備人が心配だったが、私はラビンから奪った銃と地図をもち、服を着替えて、さらに屋敷の２階へと上った。

アルバタール・ギンガジザスという人間が、フィンガーマークと同一人物かはわからないが、可能性はかなり高いように感じた。それだけに、ガルド・イニエーブの手がかりを得られると期待して私は主人がいないはずの部屋に入った。そして予想通り、そこにいたのはサムと名乗った男だった。だが、既に息をしていなかった。死体が一体そこにはあるだけだった。これは、一体?私は動揺し、呆然と立ちつくした。

一章ガルド・イニエーブ<7>

サムのこめかみには穴が開いており、即死だったようだ。銃で至近距離から頭を一発撃たれた跡が残っている。一体何者がサムを？私は考えた。そして、フィンガーマークとはサムなのか？疑問も浮かんだ。すると、トントントンとドアをノックする音が聞こえた。私は慎重にドアの裏に回ると静かに相手が入ってくるのを待った。

「旦那様。飲み物をお持ちしました」

使用人らしき、髭を生やした小さな男が部屋に入ってきた。

「だ、旦那様。ヒィ」

私は男の背後に回ると銃を背中に突きつけた。

「静かにしろ。この男はお前の主人か？」

小柄な男はまた、ひぃと小さな声を上げたが、やがて

「はい。そうです。旦那様に間違いありません」

と答えた。男の声は動揺しているのか上ずっている。明日から仕事を失うだろう彼の境遇を思えば哀れまずにはいられなかったが、人の心配をしている場合でもない。このまま警察に通報でもしようものなら、まず疑われるのが私だからだ。とりあえず殺人が露見する間に手短に男に尋問した。

「主人の仕事はなんだ？」

「ギンガジザス様は法に触れる手術を多く行ったせいで、今はもっぱら裏の仕事をしている医者です。あなたがギンガジザス様を殺したのですか？」

間違いない。フィンガーマークはギンガジザスであり、サムだったのだ。

「違う。私ではない。恐らく、お前の主人を殺したのはガルド・イニエーブだ。奴のことについて知っていることがあれば話せ」

「あの法外の五貴族の……。たしか、５年程前に主人が確かに手術をうけおったことがあると思います。その時は多額の金額を得て、

専属の指紋師になったようです。ただ、最近は仕事がないといって旦那様も愚痴をこぼしてらっしゃいました。それで、最近、新たに客をイニエーブに隠れて探していたようです」

男の声は震えていた。それもそうだ。死体はまだ暖かい。ガルド・イニエーブか、もしくはその手下は確実にこの国にまだいるだろう。もしかすると、この屋敷にいるかもしれないのだ。私は麻痺していた恐怖が湧き上がってくるのを感じた。だが、ここで諦めるわけにはいかなかった。

「お前も仇が打ちたいだろう。ガルド・イニエーブに関する情報は何かないのか？」

良く見ると主人の部屋は荒らされていた。ガルド・イニエーブ一味は何かを探していたようだ。

「そういえば、ガルド・イニエーブの現在の指紋がわかるデータを保存していると言っていました。それさえ、あれば自分は安全だとも。あなたは一体何者ですか？」

使用人にしては知りすぎていると不信に思った。私は逆に男の名前を訊ねた。

「私はギンガジザス様の秘書デンダロと言います。もう仕えて２０年になります」

「では、デンダロ。指紋データのあるところに案内しろ。ギンガジザス氏を殺したやつも、まだそこにいるかもしれない。仇を討ちたいだろう？」

「それは、もちろんですが、私は銃の扱いには慣れておりませんで・・・・・」

「わかった。それはいい。私が撃つ。お前は案内すればいい」

「わかりました。こちらです」

怯えていた男は覚悟を決めたように部屋の外に出て歩き出した。どうやら、この屋敷は地下があるらしかった。生ぬるい風が階段の下からそよいできた。一歩一歩階段を踏みしめながら私の心は、ガルド・イニエーブに会うチャンスに恐怖よりも心躍る気もちになっ

た。何年この時を待っただろうか。

「や、ドアが開いている」

デンダロは小さな声でつぶやいた。どうやら先客がいるらしかった。私たちは静かに音をたてないように中に入った。

一章ガルド・イニエーブ＜8＞

地下室はひんやりとしていた。石造りの室内を柔らかな灯りがともしている。二人はおそるおそる奥へ歩を進めた。ふいに、私は物音を聞いた。奥の部屋から聞こえてくるようだが、音が反響してどこから響いてくるかわからないようでもあった。だが、確かに人の気配もする。デンダロの背に突きつけたままの銃を持つ手をぐっと握り締めた。デンダロも心得ているらしく、そろりそろりと足を動かした。進むにつれ、いよいよ物音が大きくなってきた。どうやら、聞こえている物音はやはり、奥からしかった。私は身振りでデンダロにそこにとどまるように指示して、奥へと一人入っていった。耳元で「逃げたら、どうなるかわかっているな」とも脅しておいた。デンダロは小心者らしく、青い顔で無抵抗に目をつぶっていた。恐らく、忠誠心のみでここまで出世した男なのだろう。

私は灯りで作られた人影が動いているのを確認し、本体がいるに違いない方向に銃を構え声を発した。

「動くな」

何かを探していた男はびくっとして、両手を上げると、抵抗する意思がないことを表した。男の顔立ちは無骨でたくましかった。日に焼けた黒い肌とその隆起は少なくとも私以上の筋肉が備わっていることを確信させた。年の頃は５０くらいだろうか。顔には皺が刻まれている。さすがにフィンガーマークを殺した人間らしく、目には冷たい感情が滲み出ている。

「なんだい。坊や。おじさんは今仕事中なんだ。邪魔しちゃいけないな」

そう両手を上げたまま一言、殺人者は言った。

「ギンガジザスを殺したのはお前か？」

私はわかりきっていたことを聞いた。

「さてね、知らないね。坊やはこの屋敷の雇われ人かい？おかしい

な。家にいるやつは銃持っている警備兵は全て始末したはずなんだがね」

この男は嘘をついていた。警備兵を殺したと言っているではないか。やはり、ギンガジザス、フィンガーマークを殺したのはこの男に違いなかった。私は相手がもし、肯定すれば即座に引き金を引くつもりで聞いた。

「質問をするのは私だ。お前はガルド・イニエーブか？」

変な沈黙が辺りを包んだ。男は両手をだらりと下げて、ポケットに手をつっこんだ。

「動くな」

私はさっきより大きな声で言ったが、さして、射撃の腕があるわけでもない。男を万が一殺すのにためらいがあった。男はポケットから煙草を取り出すと、ライターで火をつけゆっくりと吸い始めた。

「坊やも、もしかして、同じ目的で来たのかね。ガルド・イニエーブの指紋が欲しいんだろ」

ふいに背後で気配がしたと思った瞬間、銃声が響いた。私はあまりの速さにあっけにとられていた。男が撃ったのだ。抜く瞬間さえ見えなかった。倒れたのはデンダロだった。その手には銃があった。私はこの秘書を甘く見すぎていたらしい。九死に一生を得た。男は私も撃つかと思ったがそうはしないらしい。

「何故。私を助けた？」

「別に坊やを助けたわけじゃねえよ。この男がデンダロか、そういや始末し忘れていたぜ。まあ昔、死んだ家族に良く似ていたからとでも言っておくかね」

男は顔を見ただけで、デンダロとわかるほど下調べをしているらしかった。それは事実だった。だが、言葉の後半は、また適当な嘘を並べているらしかった。敵ではないようだった。男の銃の腕前は私を遥かに凌駕しているらしかったので、私も銃口を下げた。形勢は逆転したのだ。男も持っていた銃を下げた。わりに紳士的な男らしかった。

「坊やが法外の五貴族の手下っていうんなら、こんな楽なことはありゃしないわな」

そういって男はまた煙草の煙を吐き出した。

「俺は、法外の五貴族に法外な手段で戦う組織の一員だ」

男の口から出たのは驚くべきセリフだった。私は味方を得たと思っていいのだろうか？はっきりとはまだ判断がつかなかった。

一章ガルド・イニエーブ＜9＞

「法外の五貴族と戦う？組織？」

私は寝耳に水がはいったかのように、驚いた。この男は信用できなかった。だが、とりあえず私の命を奪う考えはないようだった。半信半疑ながらも話を進めることにした。

「“法外な”ということは法の枠内に入らない行動をして、法外の五貴族を倒そうと？つまり、今回のように何人もの罪のない命を奪うということか」

少し怒気をはらんだ口調で私は男に問いただした。

「坊や。だから、坊やなんだよ。罪の良し悪しは俺らが決めることではない。ただ、法外の五貴族と戦うためだけに作られた組織といったはずだ。そのためにはあらゆる手段もいとわないのだよ。ただ、それだけだ。ほらっ。ガルド・イニエーブの指紋だ。もっとも、それは過去の物らしいけどな。それで満足するんだな」

男は小型の電子記憶装置を私に渡すと、さらに続けて

「さて、やつの現在の指紋も手に入ったし、俺はそろそろお暇するぜ。俺のことは“スモーク”とでも呼んでくれ。また生きて会えたらの話だがね。この屋敷はもうじき爆破するぜ」

と言って今いる部屋から出て行こうとした。何故このスモークが、私にここまで親切なのかわからなかった。そして何故顔を見られたにも関わらず私を生かしておいているのか。

「待て。何故私を殺さない？」

スモークは蛇のような恐ろしい目でこちらを見ると

「殺して欲しいのかい？」

と聞いた。私が何も答えないのをみると、スモークは去っていった。脱出は簡単だった。使用人は既に引き上げているらしく、屋敷には人影もなかった。警備兵の姿も見えなかった。どうやら、スモークはかなりの人数を率いてきていたらしい。死体もきれいにかた

づけられているようだった。急いで屋敷を出て、歩いて最寄の駅に着くと、ギンガジザス邸から煙が上がっていた。

法外の五貴族は必ず倒すと誓っていたので、思わぬライバルの出現に、少し先を越されないか不安になった。しかし、今日の収穫はガルド・イニエーブの指紋が手に入ったことで満足しなければいけない。その夜、電子記憶装置のデータにはたしかに、何者かの指紋が入っていた。だが、ガルド・イニエーブも馬鹿ではない。ギンガジザスが死んだことに遅かれ早かれ気づくだろう。その前に過去の指紋をどう使って、イニエーブを追いつめるのか?と考えたが、一個人には不可能なものばかりだった。スモークの組織にはたしかに力がある。だが、私も法外の五貴族の知識に関しては勝りこそすれ劣ってはいないはずだ。何か、もう一つ、ガルド・イニエーブの居場所を見つける情報が必要だった。そのとき、はっと思い当たった。そうだ、グニア事件―ゲルマン統領への成りすまし事件―の時消された行方不明者の指紋のことが浮かんだ。もし、あれが、ガルド・イニエーブが自分の昔の記録を抹消するために行ったことだとしたならば・・・・・。再びゲルマンに向かう必要があった。

一章ガルド・イニエーブ＜１０＞

ゲルマンは以前きたときと季節が変わっていて、もう暑かった。今度はゲルマンでありきたりな服装をして、うまく街に溶け込んだ。行方不明者の指紋の照合を行ってくれる部署がこの国にはあって、行旅不明人捜索部というらしい。私はさっそく、過去のガルド・イニエーブの指紋を持っていった。調査には2～3週間かかるらしい。ゲルマンは大きな官僚国家であったが、腐敗もまたひどかった。最初一ヶ月といわれたとき、どうしようかと思ったが、賄賂を払うことによってだいぶ縮まったのだ。もっと急いで欲しかったが、それ以上はいくらお金を積んでも無理らしかった。

暇な時間などない。私はライバルとなるだろう、スモークの組織を調べることにした。大きな組織ならば、当然何らかの情報も出ているだろう。首都アルベリンのカルトアサラ大学の図書館で私は調べた。過去２０年の間に、法外の五貴族に挑んだ組織は４つあったが、今は全てなくなっているらしい。この４つのうちのどれかがスモークの組織の前身なのだろうか。組織の名前は『天使の輪』『革命団』『国際警察機構』『国際協同体犯罪部』前者２つが、民間の組織。後者二つが公的な国際機関である。だが、４つとも、壊滅したとある。このような巨大な組織をも退けてきた法外の五貴族の恐ろしさを改めて認識した。私のやり方は甘かったのだろうか。いや、そうではない。法の外というところは、私も同意する。本当はしたくないのだが、金集めに違法すれすれのことをやっている身としては否定などできるわけもなかった。だが、人を無造作に殺す組織もまた、法外の五貴族と同じ穴のムジナではないのか。そう思うからこそ、スモークたちの仲間になろうとは思わなかった。２週間調べてわかったことは、あまりなかった。暗い気もちでいたところに、指紋の照合結果が届いた。

そして、2週間後結果が来た。答えは該当者なし。これは予想通りだった。何故なら行方不明者のデータは偽のグニア統領によって既に抹消されているはずだからだ。しかし、同時に私は賄賂で、犯罪歴のある人間のデータについても調べてもらっていた。結果は見事にあたった。ヨーゼフ・ケックスルーという名前の前科者とぴたりと一致したのだ。犯歴は窃盗だった。住所はズデーデ県アルタラ街7－18。私はそこに向かった。いよいよ、ガルド・イニエーブの本名を掴んだのだ。これから過去を暴いてやるぞ。待っていろ、ガルド・イニエーブ。

一章ガルド・イニエーブ＜11＞

アルタラ街というのはゲルマンでは珍しい貧民街だった。住所の場所を人に聞いて回ったが、ジャスール語ができる人間はいなかった。聞かれた人々は黙って笑顔を向けてくるだけだった。仕方なく、地図を頼りにようやく、ヨーゼフ・ケックスルーの当時の家を見つけた。が、見るも無残な廃墟であった。みすぼらしい家に雑草などが生え放題になっていて人の住んでいる気配はなかった。少し考えた後、通訳をアルベリンから呼び寄せた。通訳の人は朗らかで、有能な女性だった。名前をユレニア・マクマーシといった。私たちはすぐに打ち解け、ユレニア、ビルグと呼び合うことになった。私はさっそく、近所の住人にユレニアを介して話を聞いた。最初に聞いたのは、この街の長老とも呼ばれる老人だった。

「ヨーゼフ・ケックスルーという名前を覚えていますか？」

「ああ。覚えているとも。可哀想な子だった。今はどうしているのやら」

「知っていることを何でも教えてくれませんか？お礼は弾みます」

「わしらを貧しい者と思って馬鹿にしているのか？若いの」

「いえ。そんなことは、あくまで気もちです」

「ふん。まあいいだろう。話してやろう」

「感謝します」

ヨーゼフは若くして両親を亡くし、よく隣町の子供たちにいじめられていたらしい。祖母がいたが、もう年で介護も彼がしていたらしい。子供のヨーゼフ少年にとって、このような、居場所のない境遇がどれほどつらかっただろうか。彼はやがて、成長するにつれ、人の顔色を窺うのがうまくなっていったと老人は話した。そして、抜群の物真似の才能を開花させ、詐欺を繰り返していたという。その時捕まったのが、記録にあるデータであろう。そして、刑務所を

出た後パタリと消息を絶ったらしい。最後に老人は、彼が詐欺で貯えたお金で、『死者復活の技術』の情報を収集していたことを話した。

「決して叶わぬ禁断の果実に手を出そうなど・・・・・・。変わった青年じゃった」

老人は最後にこう言って懐かしむように遠くをみやった。

なるほど、彼が何をしようとしているのかの情報がとりあえず手に入った。もちろん可能性の域を出ないが、ヨーゼフことガルド・イニエーブは死者の復活に興味があるらしい。これが、大きな鍵になりそうだ。私が何故このようなことを調べているかユレニアは興味をもったらしかった。ただ、彼が今どこにいるのか探している、とだけ答えた。聡明な彼女はさらに聞こうとはしなかった。こうして、私たちは握手をして別れた。彼女の好意は感じていたが私のような終末者が応えられるはずはなかった。そして、イニエーブは一体誰を復活させようとしているのか。そのようなことが、可能であるはずもないのだが……。彼の犯罪で貯えた金をもってすればあるいはとも思った。そして、その技術は私にとっても母の生き返りを夢想させるには十分だった。何もかも、が元通りになるなんてありえないにもかかわらず。

一章ガルド・イニエーブ＜12＞

あたり一面に金色の庭が現れた。小麦だった。新しい世界の門出に立っている気もちでガルド・イニエーブは庭の中央に立った。大いなる小麦“ドラゴニア・エターナル”から取れるエキスを抽出すれば、夢はきっと叶うに違いない。法外の五貴族として、数々の悪行を重ねてきた甲斐があろうというものだ。自然と笑みが漏れる。ようやく、ようやく今度こそ叶うに違いない。この至福の楽園には誰であろうと決して入ることはできないのだ。

「アッシュ。アッシュじゃないか」

ふいに後ろから声をかけられた。本名を知っている人物がいたのには驚いた。ここはアーリア帝国のイエニチェーリ大学だった。蘇生技術の第一人者、アルラウネ博士の研究室で、何故私の本名を知るものがいるのだろうか。恐る恐る振り返ると、ガルザニ叔父だった。なるほど確かに聞いた声だった。

「叔父さん。何故ここに？」

「出張でここの博士に会いにきてね。仕事なんだよ」

叔父は真剣にそう話した。叔父とは別にアルラウネ博士に用事があった。ガルド・イニエーブの重要な情報をもらいに。できることなら叔父は巻き込みたくなかった。何よりも従妹のサニチェエートを。

「アッシュも似たような用事らしいな」

叔父は察したように言った。

これ以上私の本名を吹聴されるのが我慢できなかったので、早々に別れようとした。しかし、叔父はお茶でもどうだ、と半ば強引に私を誘った。渋々と私も危険を承知でカフェに向かった。

「投資は順調か？」

「ええ。まあまあです」

そわそわしながら私は答えた。
「私も投資をしてみようと思ってな。ビルグ投資会社というところに投資したよ」
なんだって。これは果たして偶然なのか。ビルグ投資会社とは私が作った無限連鎖講の運用会社である。何故叔父がよりによってそんなところに投資をしたのだろうか。少し聞いてみることにした。
「それで叔父さん。どんな会社なんですか？」
「なんでも、会員を増やせば増やすほどお金が入ってくる仕組みなんだよ。今日も、さっそく知り合いの博士に世間話ついでに入らないか誘ったのだよ。何故か断られたがね」
叔父は満面の笑みで煙草の煙を吐きながら話した。叔父は勤勉な人間だが、人の好さでだまされやすいのだ。なんということだ。お金が入れば入るほど叔父は首謀者の私との関係から共犯者として扱われるに違いない。そして、お金を損しても、また地獄だった。というのも、カレラ叔母は重度の心臓病にかかり、多額の手術費がいるようになったからだった。叔父はそう私に話すと、最後に立ち上がって明るくいった。
「こっちのことは何も心配するな。仕事で作った人脈できっとカレラを助けてみせる。お金を返せなどとはいわないから心配するな」
「叔父さん。私も出しますよ。いくらですか。いってください」
だが、叔父は黙って首を振った。
「何も心配するな。アッシュ。万事うまくいく。うまくいくさ」
自らに言い聞かせるようにカルザニ叔父は優しく言うと帰っていった。私はしばらく茫然としていたが、本来の目的を思い出してアルラウネ博士に会いに、研究室に再び戻った。

一章ガルド・イニエーブ＜１３＞

博士は部屋に戻ってきていた。汚れた白衣を着ていた。薬品がかかったのだろう、変わった黄色に変色していた。体は小さかったが頭は大きかった。脳の後頭部が大きく後ろにせりだしていた。大きな脳をもっているらしかった。だが、言動はどこか奇妙だった。まばたきを頻繁に繰り返し、口元には薄笑いを常に浮かべていた。

「博士。人間の蘇生について聞かせていただきたい」

思い切って言ってみたが、答えは冷たいものだった。

「断る。わしは今、あるお方と研究をしていてな。決して他言無用というわけじゃ。わしの研究の偉大さの理解者がようやく現れたのじゃ」

「博士。お金なら出します。私も関わらせてくれませんか？」

「だめじゃ。だめじゃ。お前さんの財力がどれほどのものか知らんが、あのお方は桁外れの金持ちじゃ。素性は謎じゃがのお」

「１０００万マルセルでいかがです」

「ケッケッケ。そんなはした金いらぬわ」

間違いない。これほどの財力を持っているものはガルド・イニエーブに違いない。この博士が計算違いをしていたのは私の意志の強さだった。若い私の容貌もあなどりやすかったのかもしれない。翌日から、掃除夫の姿をして、博士の動きを探った。博士は学内の誰にも関心ないらしく、２，３度すれ違ってもまるで、ただの障害物のように私を避けていった。そうすると、博士はある日、学校の外へ出かけた。すかさず後を追ったが、どうやら、博士を追っているのは私一人ではなかった。じっと、博士をつけている男がいた。スモークだった。スモークはとっくに私に気づいているらしく、にやりと薄気味悪い笑いを浮かべた。博士が昼食に店に入った時、私とスモークも同じ店内で食事をした。スモークは近づいてきた。

「よう。坊や。驚いたな。この男にまで辿りつくとはね。過去の指

紋が役に立ったようだな」
「おかげさまで。だが、お前たちの仲間になるつもりはない」
「それでいいさ。だがな。気をつけな。組織には俺のように優しい奴らばかりじゃないんだぜ。おっと奴が動き出したぜ。いくとするか」
博士は大きなビルの最上階にエレベータで向かったらしい。それとともに、大きなプロペラ音があたりをにぎわした。
「まずいな。逃げられる」
スモークは軽く走り出すと、銃弾をヘリコプターに打ち込んだ。ヘリからは数十発の銃弾が発射されて、返ってきた。スモークはその反撃を予期していたらしく、壁に隠れてかわしている。ヘリコプターは何事もなかったかのようにどこかへ飛んでいった。
「さて、発信器つきの銃弾を打ち込んでおいた。一緒に来るかい。坊や」
私は黙って肯いた。

一章ガルド・イニエーブ＜１４＞

スモークは私を組織の仮本部のようなところに案内した。道中、スモークに彼らの組織のことを少し聞いた。

「法外の五貴族には『法外の革命結社』と呼ばれているがね、我々は自分たちのことをなんとも呼んでいない、ただ『我々』というだけだ。俺が部外者である坊やにいえるのはそのくらいさ。いや、ビルグ・オノエーブラを騙るアッシュ・クロフォード君」

「私のことを調べたのか。スモーク」

「おっと。怒りなさんな。こっちも見逃した以上は、それなりの調査はするさ。君は攻撃はいいが、防御はまだまだだな。もっとも、ガルザニ叔父さんが現れるまでは、こちらもなかなか掴みようがなかったがね」

スモークはまた軽く笑った。確かに、彼らの組織をもってすれば、私のことなど調べるのは容易だろうとは思った。知られたところで、法外の五貴族にさえ知られなければ敵ではないのだから、構わないという気もちもあった。むしろ私の素性を知って、積極的に勧誘してくるだろうことはこちらも想定済みである。

到着した仮本部は薄暗い部屋だった。高層マンションの一室にスモークの仲間も集まっていた。

「き、君は」

思わず、私は目を疑った。ユレニア・マクマーシだった。

「ようこそ。ビルグ。いえ、アッシュ。この前はどうも」

女はずいぶん化粧の仕方などを変えてはいたが、間違いなくユレニアの顔と声であった。

「ユレニア。君もこの組織の一員だったとは。当然あれも偽名なんだろう？」

私は不快気に言った。

「ええ。そうね。でも、あなたユレニアを気に入っていたようだか

ら、そのまま呼んでもよくてよ。もっとも本物は５０近いおばさんだけどね」

女は意地悪そうに笑った。彼女を罵倒することもできたが、目的の前には個人の感情など無意味だった。はやく、ガルド・イニエーブの居場所をつきとめなければならなかった。

「ふん。なんでもいい。それよりもスモークが撃ちこんだ。発信器が相手に見つからないうちに、追跡しよう」

冷静に私が言うと、もう一人部屋のすみにいた若い男が口を開いた。

「いいねえ。こいつ。気に入った。もう仲間気取りは、ちと不快だがな。よく、何をすべきか心得ている。俺はジョベルジアっていうもんだ。よろしくな」

男が差し出した手を私は黙ってみると

「追跡はどうなっている」

とだけ言った。ジョベルジアは肩をすくめてスモークを見た。

「おやっさん。どうしましょうか。仲間でもない。敵でもない」

「安心しろ。坊やは俺たちの情報をもっているわけではない。この作戦だけ協力者ということにして、その後はそれから考えよう。もう、すでに本部には了承済みだ」

スモークは部屋の中の椅子に腰掛け、テーブルの上にのっている機械をみながら言った。これが追跡装置らしかった。

「大丈夫かねえ。おい。ガゼル。お前も何かいったらどうだ」

ジョベルジアはユレニアだった女にも聞いた。仲間内ではガゼルと呼ばれているらしい。

ガゼルは髪をかき上げて

「あら。私も賛成よ。この人頼りになるわ。それに本部の了承を得ているなら、私達が口を出すことでもないでしょう」

「そりゃ。そうだけどよ。ちっ」

ジョベルジアは舌打ちして、黙った。

「この座標は、監獄島か・・・・・。またやっかいなところにい

るもんだな」

スモークは一人つぶやくように言った。

監獄島？犯罪者たちの脱獄を防ぐために作られた人工島のことか。中には凶悪な犯罪者が囚われていると聞いたことがあった。私たちは、微妙な壁をお互いに感じながら、監獄島へ向かうことになった。ガルド・イニエーブがそこにいると信じて・・・・・。

一章ガルド・イニエーブ＜15＞

当然、犯罪者たちの仲間による監獄の襲撃から島を守るために監獄島には様々な仕掛けがおかれていた。だが、看守たちは交代のために、島を出入りしていることはおよそ間違いない。正規ルートが使えない時にどれほどの困難が生じるか想像に難くない。スモークたちは真っ当な理由をつけて、入れるだけの力があるのか、いい見極めにもなる。彼らの組織に入るつもりは毛頭ないが、利用できるならば利用してやろうといったところだ。が、スモークはただ利用されるつもりはないらしかった。

「アッシュ。お前さんの持っている情報が欲しいのだよ。我々は確かに組織を組んではいるが、相手の情報を大っぴらに探るわけにはいかない立場でね。特にあの事件のことは」

過去を克服していたはずなのに、急にあの時の母を亡くした悲しみが襲ってきた。そして、同じくして記憶も脳裏によみがえってきた。スモークに無表情に顔を覗き込まれているのに気づくと、かすれた声で返答した。

「秋の大殺戮のことか。話してもしょうがないことだ。私の母は流れ弾に当たって亡くなった。それだけだ」

「それだけのために、復讐を？直接手を下した人間ではなく、首謀者を追いかけているのかね？」

「わかってもらおうなどとは思っていない。だが、法外の五貴族はかならず裁いてみせる」

ガゼルが少し苛立った様子で口を挟む。

「昔、あなたと同じようなことを目指した組織はあったわ。でも、敗北した。法外の五貴族にね。あなたは傲慢ね。何かを失わずに何かを成功を収めようなんて。ただ、だらだらと家族とも中途半端に距離を保ちながら、事が終わったら何もなかったように戻ろうとしている。ここにいる人間はね。何人もの人間をこの手で殺めてきた

のよ。それだけの覚悟があって初めてやつらと戦えるのよ」
話はまだ続きそうだったが、スモークがすっと手をあげて興奮しているガゼルを制した。
「アッシュ。ギンガジザス邸でのことを覚えているかね？俺が助けなければお前さんは死んでいたんだぜ。恩にきせようっていうんじゃない。お前さんは甘ちゃんってことだよ」
確かにその通りだった。甘かったのだろうか。再び自問自答してみた。だが、やはり、彼らの信条とは、あいいれなかった。
「私は私の道を行く。協力してくれなければ結構だ。私一人でやるまでだ」
そう言うと、ジョベルジアが腹をかかえて、笑いだした。
「クックック。とんだ喜劇だ。どうやって俺らの組織の協力なしに、監獄島に行こうっていうんだ。たいがいにしろよ。このやろう」
後半では怒声に変わっていた。私は静かに去ろうとした。が、スモークが銃を構えて私を制止する。
「卑怯だぞ。スモーク」
歯噛みする私にスモークは
「とにかく、ついてきな。監獄島へ行く準備はもうすぐ整う。お前さんの知識も必要なんでな」
とだけ言った。渋々従うしかなかった。
法外の革命結社は、アーリア帝国とも強力なコネがあるらしかった。まもなく、迎えの車が来て、ヘリポートに私たちは到着した。肩書きは監獄島の犯罪者の実態を記事にするジャーナリストだった。プロペラが回りだし、４人は監獄島へ飛んだ。

一章ガルド・イニエーブ＜16＞

海面からビル5階程の高さに監獄島は位置していた。この断崖から何人もの受刑者が自由を夢見て、散っていったことは容易に想像できる。空から見る限り、この島には海岸らしきものがまったくないようだった。沖の激しい波は、波間に漂う無数の岩に打ちつけている。島の中心部の一角にヘリの離着陸場があった。私たちはヘリを降り、出迎えの人間に監獄島の所長のところに連れていかれた。所長室はヘリポートからすぐの建物の3階にあった。

「ようこそ。ジャーナリスト諸君。近年ここを訪れようとするつわものもいなくなってしまってね。まあ、ここの恐ろしさを存分に記事にしてくれたまえ」

所長は座ったまま、黒子に生えた毛を一生懸命に手で引っこ抜こうとしている。私たちには目もくれない。スモークは何気なく、窓の外を見ながら質問した。

「どうやら、もう一機ヘリがあるようですが、先客ですかな」

ここはスモークに任せておいたほうがいいらしい。それに、ガルド・イニエーブがここにいるとすれば、すでにここは敵地であると見たほうがいいかもしれない。慎重に行動しなければならなかった。所長は作業を続けたまま、

「ああ。あれはね、囚人への面会だね。こんなところまでよくきたものだよ」

と呆れたように言った。スモークはジャーナリスト風にペンをメモに走らせ

「その囚人の名前はなんですかね？取材できますかね？」

と訊ねた。ジョベルジアとガゼルは油断なくあたりを観察している。よく教育されている。問題はどこからどこまでが敵で、どこからどこまでがアーリア帝国の官吏かということだ。手段を選ばないといっても、アーリア帝国を敵にまわすとなると、さすがにまずい

だろう。眼鏡をかけた所長は初めてこちらをみた。
「さあね。直接そこに行って聞いてみたらどうだい。おい。ゼルド」
大声で、所長が叫ぶと、一人の背の高い男が部屋にのっそりと入ってきた。
「お呼びですか?」
「ああ。呼んだ。囚人に面会に来ている、なんといったかな。アルラウネさんだったかな。その人が、いるところにこの人たちを案内してやりなさい」
所長が命令すると、ゼルドという男は少しビクッとしてから
「はい。わかりました。こちらへどうぞ」
と部屋の外に出るように私たちを促すと、先頭に立ってゆっくりと廊下を歩き始めた。４人は囚人の監獄にどうやら連れていかれるらしかった。獄舎は所長室のある建物のさらに奥にあるようだ。
「さあ。着きましたよ」
しばらく歩くとゼルドが言った。そこには、アルラウネ博士がいた。彼は私の顔を見ると
「お前は!!」
と驚愕した。
「博士。ガルド・イニエーブはどこです?」
私は思いあまって聞いた。

一章ガルド・イニエーブ＜17＞

「イニエーブ。そこにいたのか」
博士は私たちを見ながら誰かに声をかけた。
一瞬何を博士が言ったのか理解できなかった。だが、博士は私以外の誰かを指してイニエーブと呼んだのだ。看守のゼルド、中年のスモーク、若い女性のガゼル、うるさい男のジョベルジア。一体、誰がガルド・イニエーブなのか・・・・・・。可能性として最も高いのはさっき会ったばかりのゼルドだろうか。だが、他の3人も信頼できるほどに時を過ごしていたわけではなかった。ジョベルジアが口を開いた。
「おやっさん。アッシュという人間なんかもともと存在していなかったんだよ。一杯食わされたわけさ。こいつがガルド・イニエーブなのさ」
スモークは少し考えて、
「アルラウネ。お前はこの中にガルド・イニエーブがいるといっているのかね？」
「わしのいうことに間違いはない。まあ良い。誰がイニエーブでも、あそこにいけばはっきりするじゃろう。イニエーブ以外は受けつけない。例の部屋に入れる人間だけがイニエーブなのじゃ。ケッケッケ。ついてくるがいい。ゼルドお主も来い」
博士は不気味に笑った。看守もどうやらついてくるようだった。
私もとりあえずは誰がガルド・イニエーブなのかは置いておいて、秘密の部屋に行くことを決めた。真後ろにはジョベルジアが私を警戒して、ぴたりとついて歩いている。
監獄の奥深くには地下に通じる巨大な扉があった。
「さあ、それぞれ指紋をあわせてみるのじゃ。黄金の庭に通ずる道を開くためのな」
まずはガゼル、何も起こらない。

次にジョベルジア、何も起こらない。
そして、看守のゼルド、また何も起こらない。
私も手をドアに押し当ててみる。が、当然何も起こらない。
残るはスモークとアルラウネ博士だった。私はここまできて、アルラウネ博士の勘違いであろうと思い、入る方法を考え始めた。
だが、音をたてて扉が開き始めた。スモークの手によって。
「スモーク！！」
私はつぶやき絶句した。この男だけはないと思っていたのに。それとも、スモークがいつの間にかガルド・イニエーブにすりかわっていたのか？？アルラウネが愛想笑いをして中を案内しようと先頭に立つ。
「さあ、参りましょう。ガルド・イニエーブ様。相変わらず完璧な変装ですな。他の者はどうされますか？」
スモークは茫然と立ち尽くす４人を見て
「ついてこい。私の偉大な研究成果をみせてやる」
と言った。武器をもっていなかった私たちは黙ってスモークに従うしかなかった。

一章ガルド・イニエーブ＜17＞（後書き）

6月13日から再開します。

一章ガルド・イニエーブ＜18＞

「おやっさん。いったいぜんたいどういうわけだ？俺らは法外の五貴族を葬るために、やってきたんじゃないのか！それが、おやっさんがイニエーブだって？？そんな馬鹿な！」

ジョベルジアの悲痛な声。ガゼルの重苦しい沈黙。

「ジョベルジア。いいから黙ってついてくるんだ！」

スモークはいつものように、子供に言い聞かせるように辛抱強く言った。スモークの皮の靴が石段を鳴らす音がまた始まった。まるで、この世界でないどこかから響いてくるようなそんな、音だった。それにつられるように、アルラウネ、ガゼル、ジョベルジア、私、ゼルドの順に階段を降りはじめる。下へ深く延びる階段の先に強烈な灯りが見えてきた。どうやら、目的地についたらしい。そこには黄金色の穂が広い空間いっぱいに生い茂っていた。

「何故こんな地下にこれほどの小麦が？？太陽もあたらないのに・・・」

ガゼルは不思議そうにつぶやく。すると得意気にアルラウネ博士が口を出す。

「ケケケ。太陽がない。そうとも太陽がない。ふふふ。そこに蘇生の秘密を解く鍵があったのじゃ。大昔、人間は土から生まれたと神話にあるのをご存じかの？お嬢さん？」

「人間は神が創造したのじゃなくって？」

「それはお主の国の考えじゃな。世界は広くての、そういう神話もあるのじゃよ」

スモークは黙っていた。その様子を気にしながら、アルラウネは話を続ける。

「そこにおられる変装の名人であり、法外の五貴族であるイニエーブ様の莫大な金銭的助力を得て、わしの理論を実行する機会を得た。そして、できたのが、永遠の小麦とも言われるものだったのじゃ。

だが、生育方法は普通の稲とはまったく別じゃ。決して光を当ててはならぬ。決して日の光をな。南アルドニアの洞窟の奥地で、やっと見つけたのじゃ。幻の古代文書に記された。永遠の小麦をな。ふふふ。イニエーブ様。どの人間でお試しになりますか？ケケケ」

スモークは銃を懐から取り出すと、看守のゼルドに向けて撃った。ゼルドの胸からは真っ赤な鮮血が飛び散り、ゼルドは倒れた。

「良いのですか？ゼルドはあなたの忠実な部下・・・・・・」

アルラウネ博士は怪訝そうにスモークを見つめる。

スモークは銃に弾をさらにつめながら、死体を冷たく見ると、

「かまわん。どうせ生き返るのだろう？」

「もちろんですとも」

アルラウネは自らの研究の成果をイニエーブが信頼しきっているとみて、満面の笑みを浮かべた。

「使い方は簡単です。小麦を沸騰させた水で煮てやれば良いのです。その液体を傷口に塗ればよいのです」

そういって、あらかじめ作っておいたらしい、小麦の液を汚れた白衣のポケットから取り出すと、看守の死体の傷口にかけた。

一章ガルド・イニエーブ＜19＞

傷口はみるみる塞がっていったようだった。看守の制服から血が止まった。やがて、看守ゼルドの顔に血の気が戻ってきた。ただ、その目は虚ろだった。そして、ゆっくりと片膝を立て、手をついて立ち上がった。アルラウネ博士は狂喜していた。

「イニエーブ様、見ておられますか？生き返っていますぞ。そう、今、人類史に残る禁断の扉が開かれたのですじゃ」

喜ぶ、アルラウネの他の４人はゼルドの異常に気づいてた。目だけではない。全身が黒ずんできて、口から涎が出ている

「おやっさん。やばいぜ」

ジョベルジアがガゼルをかばうように位置を変えた。

スモークは憎憎しげに、今まで聞いたことのないような悲しげな声を出した。

「やはり、だめだったか。もう俺の記憶の中のあの人はいないのだろうか・・・・・」

叫び声があたり一面にこだました。生き返ったゼルドは既に正気の人間ではない。

アッシュはスモークが深く失望しているのを感じた。そして、隙をついて、次の瞬間、銃をスモークから奪い取ると、ゼルドめがけて、撃った。撃たねばこちらが危なかったのだ。常人とは思えぬ脚力で、ゼルドは5人に向かってきていたのだ。向かってきていた看守だったものの体は慣性でアルラウネ博士を吹っ飛ばした。強く壁に体を打ちつけられた博士はその場に崩れ落ちる。

「説明してもらおう。スモーク。お前はガルド・イニエーブなのか？」

アッシュは銃を握り締めて言った。主導権は私に移ったのだ。

スモークはポケットから煙草を取り出すと、ライターで火をつけた。

「もちろん。違うさ。これは、ガルド・イニエーブの指紋を手に移

植したものさ」
「おやっさん。何故俺らにまで黙ってたんだよ」
ジョベルジアは非難がましくスモークを見る。
「俺は武器を持っていたら迷わず撃っていたぜ」
「ふふふ。お前らしいな。ジョベルジア。坊や。さあ、銃を下ろしてくれ」
スモークは少し頼もしそうに青年を見てから私に声をかけた。だが、私はまだ聞きたいことはあった。
「では、本物のガルド・イニエーブはどこだ?」
スモークの口の先の方で煙草がポッと燃える。その質問はガゼルとジョベルジアも聞きたいものだったらしく、二人とも興味深そうにスモークに視線を走らせる。
「奴は必ずここにやってくる。待とうじゃないか」
その時だった。イニエーブの指紋でしか、開かないはずの扉が開く音がした。ギギギィー。鈍い音だった。スモークは人差し指を唇にあてると、皆に小麦の中に隠れるように手振りで示す。私も3人にならい、身を潜める。階段を下りてくる足音はだんだんと近く大きくなってきた。そして、洞窟の部屋の入り口で止まった。私はサッと銃を持ち飛び出した。

一章ガルド・イニエーブ＜２０＞

そこに立っていたのは、真っ黒な顔をした背の高い男だった。一目で、一般の人間ではないと私は気付いた。視線の鋭さ、シルクハットをかぶった威容。どれをとっても、この男がガルド・イニエーブだと私は確信した。黒衣のマントに日焼けしたような浅黒い肌を顔だけから窺わせながら、男は口を開いた。野太いしっかりした声だった。後ろの小麦畑には人の気配がある。まだ、スモークたちは隠れているらしかった。

「やれやれ、銃など向けて何様のつもりだね。ここは私の私室だよ。君、早々と出て行きたまえ」

私は男の放つどす黒い威圧感に緊張しながらも必死に声を絞り出した。

「確認したい。ガルド・イニエーブに間違いないか？」

黒い男は無表情に私に答えた。

「そうだ。もしかして君かね。腕のいい私の手術師を亡き者にしたのは？まったく困ったことをしてくれたね。私の正体を知っているということは目的はなんだね？金かね？それとも名声かね？女かね？」

「ふざけるな。そんな目的のためにお前に会いにきたわけではない」

怒気をはらんだ声で私は告げる。これまでの復讐の旅路を・・・・・。

眉一つ動かさずにイニエーブは畑を見回した。

「これを見たまえ。これは今は不完全だが、やがて、この研究は全世界にとってなくてはならないものになるだろう。何しろ死者が生き返るのだからね。だから、そんな人一人の命で復讐などと器の小さい言葉は慎みたまえ。君の母さんも生き返らせてあげると約束しよう」

「母が生き返ることを望んでいると？」

「そうじゃないのかね？」

イニエーブはわずかに唇を歪めた。

私はもし、母が生き返るならば、どうするだろうと考えた。今の段階では、神秘の小麦の力は不完全だ。そして、この先も、何かをまったく元通りにすることなんてできやしないだろう。私の復讐に費やした年月のように。

「イニエーブ。お前は夢を見過ぎている。人を生き返らせて何をしようというのだ！」

「よろしい。特別に、君には話してやろう。これを見たまえ」

イニエーブは自分の黒衣の中を手で探ると、中からひからびた骸骨が出てきた。

一章ガルド・イニエーブ＜２１＞

白骨化した人の頭部を取り出したイニエーブは高らかに宣言した。
「この頭部は偉大なる古代人種グラザビルグの頭部だ。かつて、無限の力をもつと言われた人種だ。彼らは我々とは大きく脳の構造を異にしていて、不思議な力“不可術”を使った。大地を揺るがし、暴風を起こし、雷をあたり、一面に鳴り響かせた力だったという。君はその力を前にして、畏敬の念を持たないかね？そして、古代のロマンあふれる時代に時間軸を戻すのだ」
「つまり、古代人種を蘇らせたいということか。そのために、それだけのために多くの人々の命を奪ってきたのか？」
「何をいっている。犯罪者と資本家の違いは自ら手を下すかそうでないかの違いだけだ。わたしは正直者だと思うね。至極まっとうな方法で金を稼いでいる。偽善者ぶった人間とは違うのだよ」
「ならば私がお前の命を奪うことも、また正直者ということだな」
「まったくそのとおり、だが、残念ながら、君の望みは絶望的に空想じみている。君は引き金を引けばいいと思っている。それで終わりだとね。だが、実際は違う。力にとりつかれた、自分でいうのもなんだが、そんな男が銃程度で死ぬ体だと思うかね？」
私はイニエーブの奇妙な自信に不思議と信じこまされていた。もしかして、やつに銃が通じないのではないかと。だが、強い私の憎しみの動機は指をとめてはくれない。銃を構え良く狙うとイニエーブの胸めがけて、撃った。
ゴオオン。
あたりを弾薬の嫌な臭いがたちこめる。
イニエーブは胸を撃たれたにも関わらず、何事もなかったかのように立っていた。
「ば、ばかな」
私は確かに、胸から滴り落ちる血液を見て、イニエーブの胸の銃

弾が命中したのを確認した。だが、動かない。
ギギギギ。金属の音がする。イニエーブの体から聞こえてくるようだった。
「サイボーグ化だな。イニエーブのうち元の体が残っているのはおそらく脳と心臓だけだろう」
スモークがいつの間にか立ち上がっていた。
「坊やの手には負えんよ。下がっていなさい」
銃が効かなかったことで手の内がない私は慙愧に耐えなかった。
スモークはポケットから特殊な銃弾を取り出した。そして、私から優しく、銃をとった。

一章ガルド・イニエーブ＜22＞

「何者だ。お前は」
今のイニエーブの声は機械じみた変な電子音だった。問われたスモークはゆっくりと銃を構えながら答えた。
「フィンガーマークの命を奪った者といえばいいのかね」
「なるほど。お前か、どおりでこの復讐に燃えた青年に手術師を倒す気概が感じられないわけだな。かなりのてだれとみえる。だが、人に私は殺せぬだろう。私はあまりにも強くなりすぎてしまった」
「人に倒せぬ人などありはせんよ。慢心したなガルド・イニエーブ」
スモークはそう言って銃をイニエーブの腹の部分に向けた。
「ほう。私の弱点を知っているわけか。どうやらゴルディーザがいっていたことは真実だったようだな。今、我ら法外の五貴族に敵対する者たちが、大きくなりつつあるということか。だがな私を倒すには腹の核の部分を寸分も違わず打ち抜く必要があるのだ。それこそ寸分もね」
「私の眼に見覚えはないか?イニエーブ」
スモークの眼は真っ赤な色に変じ始めた。
「それは・・・赤化眼!!まさか、あの男が生きていただと?」
電子音のような奇妙な声は人の驚愕とは違ったが、私は確かにその中に驚きを感じた気がした。真っ赤な眼のスモークの言葉はさらに続く。
「そう。お前を改造した『あの男』だよ。正確にいうならば、私の方が先に改造されたようだがね。機械人間一号といったところだろうか」
「ふん。ずいぶん人間らしい機械人間だな。もっとも私は無理に人間を装ってはいないだけだがな」
「変装の名人の理由はあらかた予想はつく。元の体が心臓と脳だけではあらゆる変装術を駆使できるだろうさ」

「ふん。兄弟が再開したといったところか。だが、生憎私はそんなセンチメンタルな感情などとうに捨てている」

初めて、イニエーブは自ら動いた。スモークが動くに値する相手と思ったらしい。凄まじい加速力とともに空気を切り裂き、イニエーブの体が向かってくる。

「おやっさん！！」

ジョベルジアは思わず叫んだ。

一章ガルド・イニエーブ＜２３＞終

ガキン。金属と金属のぶつかり合う音がする。私の視力では二人の動きの全ては追えなかった。ただ、うっすらと動く影が見えるだけだった。イニエーブのシルクハットがひらりと宙に舞い、地面に落ちた。小麦の近くで二人が動いたために、あたりに粉が飛び散った。その粉が二人の力を高めるように働いたのか、戦いは数十分にわたって続いた。私とジョベルジア、ガゼルはただ、次元の違う戦いを見ているしかできなかった。

ふと、一人の動きが止まった。スモークだった。ついに力尽きたかと、私たちは息をのんだ。だが、次の瞬間、大きな轟音とともに、スモークの体が吹っ飛んだ。イニエーブらしきものは燃え盛る炎に包まれた。同時に小麦も炎に包まれた。スモークは苦しそうに壁に打ちつけられた己の体を起こそうとして、起こせない。起こそうとする。起こせない。３度目でやっと、起こせた。しかし、足元がふらついている。私は燃え盛るイニエーブと小麦を見ながら言った。

「終わったのか？」

スモークの傷ついた顔は微塵の笑いもなかった。

「まだ、始まったばかりだ。だが、とりあえずは終わった。終わったよ。坊や」

ガルド・イニエーブは死んだ。そして、スモークの体も傷ついた。もはや、ジョベルジアとガゼルが肩を貸していないと立っていられない。

監獄島を脱出した私たちはイニエーブの野望の巣窟を後にした。

「そういえば、おやっさん。口走っていた、記憶の中の人って誰だい？」

「妻だ。ずいぶん昔に亡くした。それだけだ」

アッシュは痛い程わかった。スモークの悲しみが、無念が、それは自らも体験したことだからこそ。恐らく、ジョベルジア、ガゼル

も似た境遇なのかもしれない。皆、法外の貴族に恨みを持っている。
私は、不思議と彼らの上司に会ってみる気になった。法外の貴族は私の想像を遥かに超えた人間、いや、生物だった。私のやり方では復讐は叶わないかもしれないのだ。私は帰りのヘリコプターの中でゆっくりと明瞭な発音で述べた。
「スモーク。私を法外の革命結社の上役と会わせてほしい」
「その言葉を待ってたぜ。坊や」
スモークは微かに笑った気がした。
私はスモーク、ジョベルジア、ガゼルの3人に連れられて、アーリア帝国の首都サンタアルベニアへ向かった。

第二章グライア・シンシアへ　つづく

二章グライア・シンシア＜1＞

サンタアルベニアは、アーリア帝国の首都だ。皇帝ラクシャ４世のポスターや写真がいたるところに貼りつけられている。鋼鉄で作られた町の建物はひどく、通気が悪そうながらも頑丈に建っていた。首都の中央に皇帝の住むアルナブラ宮殿があり、中央官庁も密集している。そこから北に数キロのところにある、赤い外観をしたホテルの一室をスモークにあてがわれ、私は連絡を待つ身となった。部屋はアーリア人気質なのか、雑然としていた。ゴミ箱には前の人が使ったらしいティッシュや、食物の容器が入れられていた。だが、そのようなゴミも気にならないくらい、この国のゴミ箱は大きかった。そして、部屋も広かった。スモークは私に、「別に一等室を取ったわけじゃない。部屋が広いのはこの国の文化だ」と言ったことを思い出した。確かに、部屋全体の広さも私の生まれ故郷のホテルの安ホテルとは比べ物にならない。スモークが嘘をついている可能性も考えたが、ホテルの廊下を歩く人の服装は、私とたいして身分は違わないようだった。皆カジュアルな服装をしていた。私はてっきり、本部のような所につれていかれるのかと思ったが、そうではないらしかった。私はもう、丸一日ここに留め置かれていた。ガゼルも隣の部屋に泊まっている。日常の中で見ると、割合魅力的な女性のようだった。最初感じた印象のとおりだった。だが、彼女は私に好意がないことは、はっきりしている。彼女が通訳のユレニア・マクマーシになりすまして、近づいてきたのも、私から情報を得るために違いなかった。ただ、それだけのことなのだ。もちろん、私も健康な若い男だし、女性とのロマンスなども考えないでもなかったが、全ては復讐の前には、小さなことだった。むしろ、ガゼルを利用して、法外の革命結社の情報を探ろうかとも考えたが、そこまで自らを貶めることはまだ、できなかった。

ガゼルは昨日の夜、部屋をノックして、私に書類を渡していった。

「グライア・シンシアの国の情報よ。もし、仲間になるならあなたにもみせておこうと思ってね」
「それは個人的判断でそうするのか？」
ガゼルは嘲笑した。
「まさか。スモークからの命令よ」
私は少し会話を楽しみたくなった。
「命令がなければ動けないのは真の組織人とはいえないんじゃないか？」
「もちろんよ。ただ規律を守らないと組織は成り立たないのもわかるわよね？坊や」
私は少し不機嫌になった。スモークから呼ばれるときも前々から引っ掛かっていたのだが、２６にもなって、坊や扱いとは馬鹿げている。それを自分より、年下らしき女性からも呼ばれたのだ。気分の良いはずがない。そんな私の表情を見て艶然と微笑むとガゼルは部屋を去った。

思い出して少し不快になりながらも、昨日渡された書類に私は目を通した。要約すると、以下のようになる。

二章グライア・シンシア＜2＞

グライア・シンシアはアトランティスの女王である。大西洋に浮かぶ巨大な島に忠実な同志とともに乗り込み、暴政をふるっていた時の王アンゴルモアを倒し、代わりに王位についたのが、始まりである。これは一般にグライア・シンシアの好きな花ひまわりからサンフラワー革命とよばれている。

グライア・シンシアの側近で有名なのは3人、革命時からの同志である親衛隊長エドワード・ジルゴスタ、グライアの身の回りの一切を取り仕切るパロワ・アーディング、そして民衆を導く、終身占星術長であるシトルマリル・ピクレナン。

世界の情勢はゲルマンを中心としたゲルマン同盟とアーリア帝国を中心としたアーリア連合、どちらにも組しない小国連合がある。アトランティスは第三の小国連合のリーダー的な国だった。ふたつの巨大連合の間でキャスティングボードを握って、なんとか平和を保ってきた。その間グライア・シンシアは部下を使って様々な事件を起こしたが、それらはどれも、大国のパワーバランスがどちらか一方に傾くことを避ける目的で行ったともいわれている。そのせいで、世界中にグライア・シンシアは熱心な2連合パワーバランス論者の仲間を持つといわれている。もし、本当に2連合が戦争になれば、多くの人命が失われるからだ。だが、一方で、グライア・シンシアの批判者は、シンシアが目的を偽って様々な犯罪に手を貸し、私利私欲を満たしたと言っている。真実は大国や小国の様々な思惑の中で闇に沈んでいる。

アトランティスで、莫大なエネルギーを持つ宇宙石を他国に輸出し、国民に恩恵を与えているため、国民の人気は絶大である。

一通り読み終わった時、もう時間は正午を少し超えたあたりだっ

た。改めて、グライア・シンシアを倒すには、一筋縄ではいかないだろうことを知ったが、決意は揺るがない。私の意志は固かった。昼に、ガゼルがやってきて、書類を読んだことを確認すると、私を食事に誘った。

「はやる気持ちはわかるわ。でも、私たちは多くの仲間とともに動いている。その仲間を危険にさらすような真似はしてはいけないわ。あなたもそのことを肝に銘じておきなさい」

私に諭すようにガゼルはミートソーススパゲッティを食べる手を少し止めて言った。ナポリタンの美味を味わいながら、私はたしかに焦っていた。スモークはいっこうに帰ってこないのだ。たかが、一日で、こんな状態になるとは、自分でも予想外だった。

「ガゼルはなぜ、この組織に入った?」

女は不快げに眉間に皺を寄せると、言葉を濁した。

「まあ、入り口は少し違うわ。でも、彼らを裁く決意はあなたと同じよ」

入り口とは、入った動機のことをいっているのか。それともどういった経緯で入ったのかをいっているのか。よくわからなかったが、後半の言葉は私を勇気づけた。二人はしばらく沈黙して食事をたいらげた。

ふと後ろに気配がしたと思うと、ジョベルジアが立っていた。

「待たせたな。さあ、いこうぜ。あの方に会いにな」

ガゼルにしよ、ジョベルジアにせ、人に会話を聞かれるのを恐れているらしかった。慎重な言い回しをした。それもそのはず相手は法外の貴族なのだ。立ち上がり、私たちは、ホテルの外に出た。外にはタクシーが待っていた。車体は緑色の目に優しい色をしていた。私たちは乗り込むと、ジョベルジアは行き先を告げた。

「アベニュー通り、１３５番地へ向かってくれ」

二章グライア・シンシア＜3＞

タクシー内では運転手の軽い世間話に適当に相槌を打ちながら、3人はお互いに対しては沈黙を守った。数十分すると目的地に着いたようだった。ジョベルジアがお金を払うと、タクシーはすぐに去っていった。

「ここから少し歩く。ついて来い」

背の高いジョベルジアが先頭に立って歩き出す。ガゼルと私はその影を踏むように南に向かう。ジョベルジアが歩を止めたとき、目の前には古い館が建っていた。

少し緊張しながら建物に入ると、中は思いのほか明るかった。階段を上り、2階に向かう。絨毯の上を3対の足が連なって、移動する。2階の廊下を進むと奥に大きな扉があった。ジョベルジアはノックすると、「失礼します」と言って中に入り、私に中に入るように促した。まず視界に飛び込んできたのは、赤い仮面を被った男の姿だった。仮面の内から鋭い目で射抜かれた。

「君がアッシュ君か、ようこそ法外の革命結社へ。ずいぶん待たせてしまったようだね。君は不思議に思っている。こんな狭い所、みすぼらしい所が法外の革命結社の本部なのか？とね。君の予感は正しい。ここは、急場にこしらえた場所だよ。ただし盗聴器も、怪しい人間もいない。さびれた、廃墟といってもいい館だよ。そもそも本部はこの国にはないし、仲間でもない人間に教えるわけにはいかない。仲間内でさえ本部にいったことのある者は限られている。まあそれより、君はどうしたいのだね？」

「まずあなたの名前を聞こう。話はそれからだ」

かなり、革命結社の上位にいるだろう男に対して、臆するわけにはいかない。ジョベルジアが非難の視線を向けたが無視した。

仮面の男はわりと寛容な人物らしかった。穏やかに立ち上がり、

「これは失礼した。私は赤のシュナイルと呼ばれている。赤仮面と

も呼んでくれて構わないよ」

と言い、また座った。どうやら、少し足が悪いらしかった。立った時に微かに足が震えているのが見えた。だが、無表情な仮面の下からは如何なる感情も読みとれない。

「ご存知のとおり、アッシュ。アッシュ・クロフォードといいます。シュナイルさん。私はあなたたちの組織に是非とも入りたいと考えています」

落ち着いたいい声が腹から出た。組織が私を葬ろうと思えばわけもなかっただろうが、その恐怖を隠し、役に立つに足る人物を精一杯演出してみせた。大事なのは役に立つ男と相手に思わせることなのだ。

「いい度胸だね。アッシュ君。気に入ったよ。もし、君が私たちの組織に依存するような復讐者だったら、そんな人間はいらないというところだった。入社を認めよう。だが、赤のシュナイルは表面的な人間の態度というものを信じない。君の深層心理を探らせてもらう」

そういって、シュナイルは私の脇に立つ、二人に目で合図した。二人は腕を取って私を動けなくした。

「何をする。ジョベルジア。ガゼル」

私は戸惑った。二人の力は強く、シュナイルの前まで引き出された。仮面の男は私の額に手をあてた。その瞬間意識は途切れた。

二章グライア・シンシア＜4＞

目覚めたとき、館の部屋には誰もいなかった。明らかな、違和感を脳に抱えながら、起き上がった。ふらつく足取りの先には扉があった。扉？私はどこにいこうというのだろうか。扉の先には何があるというのだろうか。扉のノブに手をかけようとしたとき、赤銅色のドアが音をたてて向こうから開いた。ガゼルだった。だが、以前のガゼルではなかった。それは私の感じ方の問題だろうと思った。外見上ガゼルに変わったところは見出せなかった。ただ、なにやらガゼルの胸の中に味方である証めいたものが備わっているのを感じることができた。

「ガゼル。私の体に何をした」

ガゼルは少し気の毒そうな目でこちらを見た。

「おめでとう。あなたは名実ともに我々の仲間になったのよ。体はその証拠。私たちは、皆シュナイルによって力を与えられた存在なのよ。けれど、その代償として、魂の自由を失うのだけど……」

「魂の自由だと？何を言っている。きちんと説明しろ」

「今にわかるわ」

ガゼルはさらに語る気はないようだった。

また扉が開いた。ジョベルジアだった。やはり、この男にもガゼルと同じ、信号のようなものを感じた。脳に直接響くようだった。

ジョベルジアはガゼルのほうをみると、悲しそうに眉をひそめた。

「おやっさんは再起不能だそうだ。もう体のあちこちにガタがきてやがったんだな。もう一人では動けない体になってしまった」

「そう。スモークはこれからどうするのかしら。アルミナスの力でもダメなの？」

「おやっさんは元々、体のあちこちを改造していたからな。寂しいが一線からはリタイアだ」

スモークがもはや私達と共に戦うことはないと二人の会話からは

知れた。命を救ってもらった恩人であり、一番信頼していた男を失うのは痛かった。ジョベルジアはこっちを向くと怒った表情をした。
「アッシュ。お前は俺たち『法外の革命結社』の実働部隊となる。つまり、法外の貴族の命を奪う最前線に立つんだ。そして、俺が一番気にいらないことに、お前がおやっさんの跡を継げっていう命令がきた。もっとも俺らはこれから3人、アトランティスに乗り込むことになるんだがな」
「そうか。アトランティスにか」
私は静かな声でつぶやいた。しかし、同時に疑問が浮かんだ。
「どうやって、行くんだ?」
「声に命じるままに動くんだ」
ジョベルジアは短く答えた。
「声?」
その時、私の頭の中に声が響いた。
(アッシュ…。アッシュ…。)

二章グライア・シンシア＜5＞

（（アッシュ。私は法外の革命結社のリーダー。皆は灰色の男と呼ぶ。私との会話に声は必要ない。今の君なら、私との会話の方法を知っているはずだ。））

確かに不思議と男と会話することが苦もなくできた。脳内での会話とは何とも変わったものだ。

『いったい私の体に何をした。灰色の男！！』

（（君は少し礼儀を知る必要があるようだな））

どこからともなく、痛みが脳にやってきた。

「う……」

片膝をついて崩れ落ちた。心配そうにガゼルとジョベルジアが一歩前に踏み出した。

「アッシュ。その方に逆らうんじゃないぜ。地獄だぜ」

ジョベルジアが忠告した。

（（今の君は私の思い通りの人形に過ぎない。おっと今さら後悔しても遅いぞ。我々は裏切り者を出さない。何故なら、裏切った瞬間に死んでいるからだ））

『わかった。法外の貴族に復讐できさえすればそれでいい』

大粒の汗を出し痛みに耐えながらなんとか声を脳に向けて絞り出した。実にやっかいなことになってしまった。法外の革命結社を甘くみていたらしい。その声は愉快そうに響いた。

（（ふん。いいだろう。とりあえず、今回は指令を伝えることが重要だからな。何も君を怖がらせようというのじゃない。3日後、ポート・ド・アーリアに向かい、そこからアトランティスに入国するのだ。必要な物はそろえておく。健闘を祈る。いいか。君の代わりはいくらでもいる。そのことを忘れないことだ））

こうして、声は遠ざかっていった。

「ポート・ド・アーリアね」

「ああ。3日後だな」
ガゼルとジョベルジアが言った。
「ああ。そうだな。それまで自由行動をとらせてもらう」
時間が必要だった。そして、残った家族。特にサニチェエートがどうなったかということが心配だった。二人は黙って私を見送った。
その日の夜、叔父に電話をかけた。
「ガルザニ叔父さん。叔母さんの調子はどうだい？」
「アッシュ。わざわざ心配してかけてくれたのか。そのことは万事解決したよ。ビルグ投資会社とはアッシュの会社だそうだね。何故いってくれなかったんだ。君の友人名乗る人が来て、万事お金の問題は解決したよ。アッシュが頼んでくれたんだろう？感謝するよ」
「叔父さん。私は・・・・・」
一体何がどうなっているのだ？思わず言葉に詰まる。投資会社の人間に本名など少しも教えていないはずなのに。そうか。私はピンときた。法外の革命結社の仕業だろう。また声がした。
（（そのとおりだ。アッシュ。我々は鬼ではない。最低限のことはしてあげるつもりだ。ビルグ投資会社はもはや無用の長物だからね。こちらで処理させてもらったよ））
『どこまで人に干渉すれば気が済むんだ!!』
（（どこまでも。ふふふ））
笑い声は遠く小さくなっていった。
「アッシュ？アッシュどうした!!」
受話器の向こうから叔父の心配そうな声が聞こえる。
「ああ。叔父さん心配いらないよ。まあそういうことだよ。じゃあ元気で」
「また、いつでも帰ってこい。サニチェエートも待っている」
「ああ。じゃあ」
自分の無力さと、組織の力を知った。2日後、私はポート・ド・アーリアに向かった。

二章グライア・シンシア＜6＞

ポート・ド・アーリアはアーリア帝国の東海岸にある巨大な港湾都市だ。歩くと潮の香りが漂っていて、海を身近に体感する。声の命じるまま、歩いていくと、埠頭で見知った顔が現れる。ジョベルジアとガゼルだ。

「よう。アッシュ。ちゃんと来たな。待っていたぜ。準備は出来ている。すぐにアトランティスに向かおう。手はずは整っているぜ」

背の高い青年は手をあげてこっちだといわんばかりに、歩きだした。ガゼルも後を追う。私も後を追った。

いよいよアトランティスに乗り込むのだ。本来なら様々な雑事、ビザの取得、船の手配などを用意しなければならないのが、手間がいらなくなったのはありがたい。そして、協力者を得たことも。だが、私はここ2日意識の封じ込めを行うことを試してみた。つまり、灰色の男に気づかれずに思考するということだ。灰色の男も始終私を見張っているわけではなかっただけかもしれないが、ここ数日、私の思考を読みとった形の相手の声は聞こえなかった。意識の封じこめとは、思考を言語化するのではなく、感情的に思考することに他ならない。今私の組織に対して持っている感情は複雑だ。恩もあり、怨もある。そういえばガゼルが言っていた力を与えられた存在とはどういうことだろうか。謎はまだ多い。だが、生きるのだ。困難はこの復讐を思い立った時から、まったく変わっていないはずだ。

船は５０人程度の客が乗れる大きさだったが、他の客はいなかった。しばらくして、外海に出ると、船長と名乗る男が船酔いに苦しむ私に挨拶にきた。ジョベルジアとガゼルもそれぞれ広い船内で自分の時間を満喫している。

「アッシュさんですな。私は法外の革命結社の一員でして、船の管理を任されておりますトニー・ブラウンと申します。私の役目はあなたたちを運ぶことだけですが、良い航海をお届けできればいいと

思っております」
　鼻の下に髭を蓄えた船長は優雅に慣れた様子でお辞儀をした。私はまだぐったりして答えられなかった。
「酔い止め薬を持ってこさせましょうか？」
「くそ。なんだって船で行かなければならないんだ。飛行機で行けばいいだろうに」
　力の限り悪態をついてみる。だが、体調は変わらない。船長は哀れむように、「アトランティスは飛行機の離着陸はできません。濃い霧が常に上空を覆っているからです」と丸い錠剤を差し出した。
「すまない」
　受け取ると、口に放り込む。船長は去っていった。それとともに少しずつよくなってきた。船内アナウンスが流れた。
「あと、3時間で、アトランティスにつきます」
　船長以外は普通の船員らしかった。そう、革命結社の人間ばっかりがいるはずもないと思った。ガゼルが海を見つめる私に近づいてきた。
「上陸してからの作戦会議を始めましょう」

二章グライア・シンシア＜7＞

アトランティスについたのは夕方だった。船長から私たちは青いパスポートを身分証明書として渡された。アッシュ・クロフォードとそこには書かれてあった。これでは私の身元が特定されるのではないか?と思った。船長に尋ねると、厳しい表情で鼻を指でかきながら

「アトランティスは偽造を行うのが極めて難しい。皆本名を入れてある。大丈夫だ。入国したくらいでは、法外の貴族の敵対者とはみられないだろう。ただ、パスポートをみせるみせないは各自の判断ということだ。もっとも入国するときはみせなければならないのはやむをえないがな」

と言う。もしアッシュという男が法外の貴族を葬るために活動していて、実際、ガルド・イニエーブを倒す一助を成したと知れば、残った法外の貴族はどうでるであろうか?ただ、ガルド・イニエーブは個人的な恨みをかって殺されたと考えてくれるだろうか。まだ、一人なので、その可能性は多いにあるかもしれない。だが、二人、三人と消えていくと残った者たちはさすがに警戒するに違いない。そもそも、彼らの間に仲間意識や。連絡網があるのかさえ不明だが・・・・・・・・。

アトランティスの入国管理官は皆太っていて、丸々としていた。空港を出て、道を歩くと、やはり、気のせいか皆太めの体型をしている。ここでは太っていることが美徳なのだろうか。陽気そうにジョベルジアは話しかけてきた。

「おい。アッシュ。皆太ってやがるだろう?ここではそれが当たり前なんだとよ。なんでもグライア・シンシアが自分より美しい女や男を許さないらしい。もっともただの噂だがな」

「昔ここにきたことがあるのか?ジョベルジア?」

「ああ。ずいぶん昔の話だがな。俺は元々ここの生まれだ」

「俺の両親はアトランティスに、いやグライア・シンシアに殺されたようなもんだからな」
「そうだったのか」
私は深くうなずいた。もっと詳しく話しを聞きたかったが、やめておいた。まだ、人生の深遠について話す関係ではないからだ。私たち三人は急いでバスに飛び乗った。

バスの窓から見るアトランティスの風景は驚きだった。貝を模った建物。魚のような格好をした車。あらゆるものは海に支配されていた。
「やけに、海と関わりの深いものが多いな……」
ぽつりと私がつぶやいたのを後ろの席のガゼルが聞いていたらしい。
「ここは99パーセントの人が海神信仰だからね。熱心なお金持ちは神社に寄付したり、自らの建物を権威づけているのよ」
「グライア・シンシアが信仰されているわけではないのか」
「そうね。でも、グライアは海神の娘として万神殿に加わっているわ」
「万神殿？」
「アトランティスの神々を集めて祀った神殿よ。これから向かう首都アトティカにあるわ」
と、そこでジョベルジアがガゼルの隣から口をはさむ。
「ちょうど明日は誕生祭だな。グライア・シンシアの顔を拝みにいくとするか」
「ついたわよ」
ガゼルの高い声が響く。
私たちはアトティカのシーサーペンル停留所で降りると、協力者の待つ家の住所へ向かった。

二章グライア・シンシア＜８＞

ランフルニア番地４３－６。そこに協力者の住む家があった。ジョベルジアが呼び鈴を鳴らす。すると、中から４０代くらいの女性が出てきた。彼女の耳元でガゼルが何事かを囁いた。女性は激しく身を震わすと、「少々お待ちください」と言って、家に戻っていった。

「おい。ガゼル。合言葉はちゃんと伝えたんだろうな」

ジョベルジアは乱暴にガゼルに問いただす。ガゼルは少し眉を上げると、抗弁する。

「もちろんよ。ちょっと家に入っただけじゃないの。何を一々心配しているのよ。相変わらず器の小さい男ね」

「なんだと。ガゼル。それはいっちゃならねえセリフだぜ」

今にも掴みかからんとするジョベルジアの腕を取ると、私はしっかりと意思の通った声でジョベルジアを諫めた。

「落ち着けジョベルジア。時と場所を考えろ」

軽く舌打ちするとジョベルジアは黙った。二人は時たま、こうした衝突を起こすらしい。ジョベルジアの血気盛んな性格とガゼルの冷静沈着さは火に油を注ぐものだったのかもしれない。何か二人の間に感情的なしこりを残す出来事があったのかもしれないが、今はまだわからない。

すると、ガゼルは何事かに耳を澄ませるように目を閉じた。不思議な感覚だ。ガゼルの中にオーラとでもいうべきものを感じる。まるで、過去の偉人に出会ったときのような畏怖の気持ちだった。ジョベルジアがアッシュにそっと囁く。

「ガゼルの耳は離れた空間の音を認識できる。もちろん気をつけないと鼓膜をやられちまうがな。今、さっきの女が何を主人に話しているか聞いているんだろうぜ」

私は驚いた。この華奢な女性にそんな能力が備わっているなど半

信半疑だった。彼女は目を開くと私たちに告げた。
「大丈夫。さっきのおばさんは召使みたいね。すぐ主人である協力者ランズベルクが降りてくるわ」
「そうか。アッシュに今お前の能力を教えていたところだ」
ジョベルジアは安心したように言った。お互いの能力に関する信頼関係はあるらしい。疑り深いジョベルジアが信じているようだった。
「そう。私たちは赤仮面のシュナイルによって力を与えられた者なのよ。あなたにもその力はあるはず。まだ、どんな力かは知らないけどね」
「超能力というわけか……」
私は頭の声を思い出して、憂鬱になった。あの頭に入られる感覚と痛みを思い出したからだ。
と、そこにドアが開き、ランズベルクらしき白髪の男性が現れた。年は５０～６０だろうか。私たちをじろじろ見ると、会釈した。
「ようこそ。アトランティスへ。みなさん」

二章グライア・シンシア＜9＞

応接間に通され、ランズベルクは三人に軽いお茶をふるまった。アルトゥール産の紅茶だと匂いでわかった。紅茶の中でも高級な一品だ。情報通り、この国の民は良い暮らしをしているらしい。だが、この男はグライア・シンシアに敵対するものだという、一体何が不満なのだろうか？

「ランズベルクさん。ご協力感謝します。我々がやつを倒すまでの間、適当な隠れ家を提供してくれるそうですね」

ガゼルが丁重に口を開いた。ランズベルクは無感動な目で、ガゼルを見た。

「既に手はずは整っている。しかし、警備の厳重なグライア・シンシアを如何にして、護衛の天才と呼ばれるエドワード・ジルゴスタから遠ざけるのだね？」

ジルゴスタは確かグライア・シンシアの親衛隊長である。身の回りの一切の警護を司さどる。しかし、私たちは既に計画を練っていた。だが、それを彼に知らせる必要もなかった。

「ランズベルクさん。ご心配には及びません。計画はできている、いや整っているといったほうがいいでしょう」

私はカップを口につけ、お茶をすすりながら言った。

「私の望みはグライア・シンシアの命だけだ。他の物は壊して欲しくない」

ランズベルクに突然愛国心が湧きあがりでもしたのだろうか？グライア・シンシア程の存在がいなくなれば、この国の混乱は疑いようもないだろう。私たちは三人ともそれを知っていた。

ジョベルジアは肩をすくめるような仕草をしている。ガゼルは優しく老人の正面を向き、

「少々の混乱には目をつぶっていただかないと目的に犠牲はつき物です。私たちも命をかけてやる以上、半端な気持ちではできません。

ただ、グライア・シンシア亡き後には、ランズベルクさんの出番なのではないでしょうか」

と手を握り言い含める。

老人はさらに計画を知りたがるそぶりはさすがに見せなかったが、何か言いたそうに口を動かした。ただ、何も口から言葉は出てこなかった。

私たちは広い屋敷を召使いのおばさんに案内されて、それぞれの部屋に案内された。隣あった3室だった。

おおまかな計画はこうだ。アトランティスは多くの豊かさの恩恵を受けている。しかし、一方召使いや、肉体労働をしたいという人々はアトランティスの民には変な物好きしかいなかった。つまり、多くの外国人労働者を雇うことが豊かさの源泉だったのだ。私たちが目をつけたのは、この外国人労働者の過激派組織キラー・ユニオンだ。

三人はキラー・ユニオンに接触するためにそれぞれ別行動を取った。

しばらくずっと三人でいたので、私は解放されたような気がした。情報が書き込まれた地図を片手に外国人労働者の集まる、夕方の酒場に向かった。ここで一杯やって、一日の疲れを取るのだろう。不満を忘れるのだろう。私が向かったのは数十人が入れる大きさの酒場だったが、中には期待に反して数人しかいなかった。とりあえず話しを聞いてみることにした。

二章グライア・シンシア＜１０＞

「俺は祖国シンシネアから出稼ぎにやってきたんだ。この国は確かに稼ぎがいいからな。ただし、労働環境は最悪だ。この国の人間たちは俺たちに感謝の一つもなく、まるで、汚いものを見る目で蔑んでいるんだ。奴らにとって俺たちは豊かさに巣食う寄生虫みたいなものなんだろうさ」

「しかし、デモはやりすぎじゃないかい？この国の女王はあのグライアだぜ」

「知ったことか。俺たちはただ、当たり前の扱いが受けたいだけだ。こんな水ばっかりで薄めたような酒でなく、うまい酒が飲みたいぜ」

「確かにな。物価が高くて、こんな給料じゃあ仕送る分にはいいが、ここではとても生活していけない。それと、知っているか？なんでも、俺たちの故郷にお金を送るのに税金がかかるそうだぜ。しかも、その金はどこに消えると思う？」

「さあな。グライアの世界への貢献のための金とでも言いたいのか？」

「なんでもグライアはどうやら、第三国連合をアーリア連合、ゲルマン連合どちらかの連合に吸収させる腹らしいぜ」

「あん？その話と金の話がどうつながるんでい？」

「戦争の準備だよ。ついに２大国が戦争をおっぱじめるらしいぜ」

「なんだって！！それは大変だな。この国ともおさらばしなくちゃいけないかもしれないぜ。しかし、数十年も大きな戦争がなかったのに突然起こるとは信じられないことだ。酔いもさめちまわあ」

「まあ、噂話だがよ。法外の貴族の一人が死んだらしいぜ。それで、こんな事態になったんだと」

「どういうことだい？さっぱりわからねえ」

「まあ、噂だよ。噂」

なんだって。法外の貴族の一人がいなくなったために戦争が起こ

るだって?馬鹿馬鹿しい。私は自分の席で一人酒を飲みながら、聞いていた。男たちのいうとおり、ここの酒は粗悪品だ。まるでいい味もしない。思い切って声をかけてみる。

「すまないが。少し話しを聞かせてほしい。デモにはどうやったら参加できるんだ?」

男たちは目を見合わせると、聞かせるにはお金を払えと要求してきた。

「兄ちゃん。少しばかり、包んでくれねえとな」

「そうそう。みたところ旅行者みたいだな。大方、いい国のお坊ちゃんってとこだろう」

ポケットから財布を出すと、男たちに少しばかりの金を渡した。男たちは喜んで、愛想よくなった。

「デモは明後日の昼の12時からだぜ。参加するのはいいが、ふざけてんなら怪我するぜ。グライアもただ見ているわけはないからな」

「場所は?どこでやるんだ?」

「もちろん。サンフラワー通りだよ。革命の聖地だな。グライアのやつ怒りやがるぞ」

アトランティスの民が敬愛するグライアを、まるで恐れることもなく、口にしているのに違和感を覚えないでもなかったが、それほど、アトランティス民と外国人労働者の溝は深いのだろう。情報を得た私は他の酒場にもいってみたが、特に新しい情報はなかった。男たちの言った、“明後日の12時、サンフラワー通り”ということが裏付けられるだけだった。夜中12時をまわったころ、ランズベルクの家に戻った。

二章グライア・シンシア＜１１＞

翌朝目覚めて、階下に降りていくと、朝食にベーコンと卵とパンが用意されていた。香ばしい匂いは、無条件に食欲を刺激した。召使いの女が「こちらへどうぞ」と言い、椅子を引いてくれた。お礼を言い、座るって良くみるとナイフとフォークがない。

「すまないが。ナイフとフォークがないようだが？」

私が言うと召使いは「ああ。そうでしたか。そちらの国のお人でしたか」と驚いた。なんなのだ？と少々小首をかしげながら、持ってこられた金製のフォークとナイフで、ぎこちなく慣れない手つきで食べる。何せ、金の食器などを使うのは生まれて初めてだったのだから。この国の人間はどうやってナイフとフォークを使わずにご飯を食べているのだろう？と気になったので、尋ねてみた。

「一体この国の人たちはどのようにご飯を食べているんだい？」

「私たちはそのまま食べています。手で」

「そうだったのか。とっくの昔に廃れた風習がまだこんなところに生き残っていたとは。それと君の名前は？」

召使の女は少し恥ずかしそうに

「ランシアといいます」

と答えた。

まだこの国のことを何も知らなかったのだと気づいたので、２，３の質問を彼女にぶつけてみた。サンフラワー通りへはどこへいくのか？とか彼女の生まれはどこか？などを。彼女は明快な道順を教えてくれた。どうやら、その通りには大きな食材店があり、そこで毎日主人に出す献立を考えているそうだ。生まれは予想通りアトランティスではなかった。だが、どこかはついに言うことはなかった。言いたくなかったのだろう。ここで一生を終えるつもりかもしれない。少し故郷を思い出した。故郷と一概にいっても、私の場合は二つある。１０歳までいた廃島イエローランド。そして、ガルザニ叔

父の住むトールキアだ。もちろん今の場合はトールキアをまず思い出した。だが、イエローランドもすぐに思い出した。緑の美しい樹木に溢れた場所だった。それが、あの日を境に……。さて、世間話もこのくらいにしよう。グライア・シンシアを裁くチャンスが迫っている。部屋に戻って、でかけようとするとノックの音がした。開けると、ガゼルだった。

「ジョベルジアがキラー・ユニオンに接触できたそうよ。今から一緒に行きましょう」

「早いな。わずか一日で見つかったのか。やつらは非合法組織なんだろう？」

ガゼルは微笑すると「たぶん、灰色の男から指令があったんじゃないかしら。あなたの大嫌いな人のね」と私の手を引き、外に連れ出そうとした。

「大丈夫だ。一人で歩ける」

心を見透かされたようで気分は良くなかったが、一瞬触れたガゼルの手は温かかった。

二章グライア・シンシア＜１２＞

過激派外国人労働者権利是正労働組合。それがキラー・ユニオンの正式名称だ。道中、ガゼルに聞かされた。目的の場所に着くと、小さな倉庫を改造したような集会所でユニオンのメンバーたち数人が集まっていた。真っ黒に日焼けした肌をした、筋肉のたくましいタンクトップを着た男。赤い口紅を薄く塗った、ロングスカートの色白な女。そして、奥にはジョベルジアとなにやら話し合っている、知的な眼鏡をかけた、黒いみすぼらしい服を着た男。

私たちが入ってきたのに気づくと、タンクトップの男が寄ってくる。威圧感のある風貌をしている。

「何か用か？ここには何もないぜ」

すかさずガゼルが前に出る。

「あそこにいる男の連れよ」

とジョベルジアを指さす。

「ほう。あの男の……。なんでもリーダーと話がしたいらしいな。グライア・シンシアを倒すとか言っているとか。根性だけは、かってやるが三人に何ができる」

色黒の男は吐き捨てるように口をきいた。ガゼルが私を肘でつついた。打ち合わせ通りにやれということらしい。そこで、私は男に言った。

「そこで、あなたたちのお力をお借りしたいわけです」

「俺たちにとってもちゃんとうまみのある話なのだろうな」

「もちろんです。リーダーに話をさせてください」

「好きにしな」

と、そこに椅子に座っていた色白な女が口をはさむ。

「まちな。ローグ。この男たちは本当に信用できるのかしらね？覚悟の程を試してみたいわ」

ローグと男はいうらしい。ローグは女をティルミラージュと呼ん

だ。ぶつくさいっていたが、最終的にはローグは女に任せることにしたらしかった。

「今から、ローグと本気で戦ってみせてくれるかい？もちろん、兄ちゃんだけでいいさ」

馬鹿げている。私は思った。何故にこれから味方になろうというもの同士が争わねばならないのか、まったく理解できない。

「なんだって、そんなことを」

言いかけたところで、ガゼルが後を引き継いだ。

「もちろん。いいわよ。この人、みてくれは華奢だけど、強いわよ」

この女、なんということをいうのだ。私に取っ組みいをやれというのか。

「へえ。ローグはうちの組織一の力自慢だよ。いいね。ローグ」

ローグは困ったように、頭をかいた。

「本当にいいのか？そりゃ、俺はこんな時のためにいるわけだし、いつでも戦うがよ」

ガゼルが私に耳打ちをする。

「あなたの力を私もみたいわ。まだ覚醒していないみたいだし、ピンチになれば、でてくるはずよ。本能と私たちの力は関係しているのだから」

「まったく。もし、力がでなかったら、私は死ぬんじゃないだろうな」

「いざというときは助けるわよ。それにどっちみち力がでないときは、はっきりいって、法外の貴族と戦っても、無駄に命を落とすだけよ」

もっともだと思った私は「話は終わったかい？」と聞いてきたローグと向き合い、睨みあった。

二章グライア・シンシア＜１３＞

ローグは喧嘩慣れしていた。しこたま顔を殴られ、腫れ上がった。攻撃はほとんどかわされた。あたっても彼はまったく意に介するそぶりもない。これが、私の実力なのだ。息巻いて、法外の貴族を倒すといいながら、一人では何もできない駄目人間。それが私だった。あげくの果てには、怪しげな組織により、精神の自由を失い、代わりに力を得たかに思えたが、それも幻想に過ぎなかったらしい。何も変わった現象が起こっている様子はない。もう立ち上がるのはよそう。もう無理だ。何度そう思ったことだろう。だが、私は立ち上がった。ローグに必死で向かっていった。何のために?復讐のために?いったい何度殴られただろう。顔はとっくの昔に腫れ上がっているはずだった。ジンジンと顔も腹も足も打たれたところあらゆるところが痛かった。だが、相手は殴るのをやめない。さらに、相手の表情は何故か恐怖に包まれている。

「お前……。不死身か」

ローグは呟いた。キラー・ユニオンのティルミラージュも唖然としている。たしかに、私の痛みは一定の痛みを持っていたし、殴られるたびに痛かったが、不思議と痛みはある程度を超えることは決してなかった。さらに、長く倒れていて、次に殴られるまでに時間があると痛みが合間に引いていくような錯覚に陥ることもあった。だんだん、ローグも殴り疲れて息が切れてきた。私はさらに立ち上がり向かっていった。ついに、ローグが折れた。拳を使いすぎて握れなくなったのだ。手は真っ赤に腫れ上がっている。

「もう。勘弁してくれ」

ガゼルもふらふらと立ち上がる私の肩に手をあてて、

「もういいわ。あなたの力もわかったわ。もうやめて」

時間とともに、体中の痛みはなくなっていった。ティルミラージュが奥に案内するように手招きした。

奥に座って、ジョベルジアと話していた眼鏡の男を彼女は紹介した。

「キラー・ユニオンのリーダー。バラトよ。バラト。お客さんよ」

バラトと呼ばれた男は立ち上がった。

「良く来たね。ジョベルジア君から話はある程度聞いているよ」

私たちはがっちり握手をした。

「君たちには悪いが協力はできない」

バラトははっきりと強く確かにそう言った。ジョベルジアめ。今まで何をしていたのだ。私は非難の眼をジョベルジアに向けたが、彼は手をあげてお手上げとするだけだった。

「今はデモだ。とりあえずデモを成功させなければならない。話しはそれからだ」

バラトは頭を抱えている。

「だからよ。そのデモの規模をもっとでかくして、宮殿に突っこもうぜって話なんだがな」

「ジョベルジア君。我々のデモの現在の参加人数はどれくらいだと思うね？」

「千人くらいか？」ジョベルジアの問いにバラトは首を振る。「五百人くらい？」また首を振る。「まさか百人？」またまた首を振る。そしてバラトは残酷な数字を告げる。「５０人だ」

目の前が真っ暗になった。殴られたよりも効いた。この人数ではどうしようもない。親衛隊のエドワード・ジルゴスタは出てこないだろう。宮殿にでも突入しない限り。だが、５０人ではどのみち無茶だった。すると、ガゼルが提案した。

「今から、新聞社にデモの呼びかけを載せてもらえないかしら？」

二章グライア・シンシア＜１３＞（後書き）

余裕もできたので、近々連載を再開したいと思います。またよろしくお願いします。

二章グライア・シンシア＜１４＞

バラトは悲しそうにガゼルの思いつきを否定した。
「何度も頼んださ。でも、だめだった。それもそのはずさ。大手の新聞社になればなるほど、トップにはアトランティス国民の大好きなグライア・シンシアの賛同者がつくんだからね。実際そのほうが部数も売れている」
部屋には沈黙が流れる。誰もが現状を打開するアイディアを持たなかった。バラトは嘆くように重苦しい沈黙を破って話し続ける。
「この国の人間はグライア・シンシアに毒されている。自分たちの頭で考える人間なんてごくわずかさ。全て、グライアの作る甘い汁を吸っているにすぎない。そんな中で外国の労働者が宇宙石を掘らされているっていうのにだよ。そして何より問題なのは外国人労働者の行方不明事件だ。警察は認めていないがたしかに存在する。逃げ出してきたある労働者は死の間際に俺の腕の中で言った。やつらは悪魔だと」
バラトの顔は怒りと悲しみで奇妙な表情を形づくった。悪魔という発音は鋭く私の鼓膜を鳴らした。ガゼルが何かを思いついたらしく手をあげた。
「私良い事思いついたわ。私たちもデモに参加してわざと暴徒のフリをするのよ。そして、捕まる」
「何いってんだ。ガゼル。捕まっちゃ意味がないぜ」
ジョベルジアがまた口をはさむ。ガゼルは手で彼を制し目を輝かせながら自らの考えを話し続ける。
「もちろん。捕まるのは一人よ。そしてグライアの悪事を暴くのよ」
ガゼルの意見はかなり危険に思えた。万が一、その一人が命を落とせば大きな損失だ。私はガゼルの目を見て首を振った。
「危険すぎる」

隠れ家のランフルニアの家まで戻ると、とりあえず明日のデモにどう参加すべきかをめぐって深夜まで議論したが、結論は出なかった。そしてデモの日がやってきた。

二章グライア・シンシア＜15＞

その日は朝早く目覚めた。よく眠れなかったのだ。屋敷を出ると人通りは皆無だった。ふいに後ろから声をかけられる。

「アッシュ。よお。早いじゃないか」

同じように起きていたらしい、ジョベルジアはいつになく爽快な顔で挨拶してきた。自分の眠れなかったのを悟られるのが気に食わなかったので、適当に挨拶を返す。

「ジョベルジアか。ずいぶん早起きだな」

ジョベルジアは意外そうな顔をして、高い場所にすわった頭からこちらを見下ろした。

「それはこっちのセリフさ。毎朝、俺は早く起きてるんだぜ。まあ、故郷に帰ってきてからというもの、ここでつけられた傷がうずいてしょうがないのさ」

「傷？」

私は何のことだとばかりに聞き返した。彼は遠く昔を懐かしむように遠くに目線をやり答えた。

「お前には見せたことがなかったか。背中の傷さ。まあ、昔の話だ。ずいぶんと昔のな」

「一つ聞こう。お前の憎しみはグライア・シンシアに向けられたものか？それとも法外の5貴族に向けられたものか？」

ジョベルジアは人通りのない道を指し示すと、一緒についてくるように促した。私たちは並んで歩いた。何かを見せたいらしい。朝の冷気はあたりを包み、身体を冷やした。

「アッシュ。あれを見ろ。リンゴナシの木だ。当時貧しかった俺はグライア・シンシアの側近のエドワード・ジルゴスタの家にリンゴナシの実を盗みに入った。リンゴナシは、これでもかとばかりに果実をまるまると太らせていたのを思い出す。塀の向こうの仲間にリ

ンゴナシをたらふく手渡して、降りようとした時だ。エドワード・ジルゴスタに見つかった。奴は俺を縛り付けると俺がどこの誰か白状するまで喜びながら鞭で叩いた。そして親の責任が問われ、母が捕まった。そして、数日後。収容所で母が病死したと伝えられた。俺はなアッシュ。俺のせいで母が死んだってことを、自分を責めるかわりにやつらを憎んできた。やがて荒んだ生活をしていた無法者の俺はアトランティスを追放された。その時のことを忘れないためのコードネームなんだぜ。ここの言葉で『鞭で打たれるもの』、つまりジョベルジアさ」

ジョベルジアは怒りをこらえながら静かに言った。ジャンプして、リンゴナシの実をもぎ取ると、獰猛にかぶりつく。

この話を聞いている限り、完全にジョベルジアの逆恨みのような気もした。この男の怒りの方向はどこか間違えている。一体この男は“まともな”考えを持っていないような気もした。だが、私は理解しているふりをして彼をなだめた。

「必ずグライア一味を破滅させよう。君のお母さんのために」

帰るとガゼルが待っていた。私たちに笑いかける。

「朝食の用意はできているわよ。友情ごっこもほどほどにしなさいよ」

本当にくだらない朝の散歩だった。

二章グライア・シンシア＜１６＞

正午になった。キラー・ユニオンのメンバーが通りの一角に集まっていた。大男のローグ、色白のティルミラージュ、リーダーのバラトがいた。その他に、血気盛んな労働者たち。やはり集まっているのは５０人ほどらしい。

あたりを通る人々は何事だろうと思って立ち止まって見るものもいるが、大半が何事もなかったように通り過ぎていく。ここでは警官も機能を果たしていないようだ。あたりには制服を着た人間はみてとれない。グライア・シンシアと側近の数人は自分たち以外の人間が力をもつことを極度に恐れたらしい。

そしていよいよグライア・シンシアの宮殿に向けてのデモが始まった。当初の計画が破綻していた私たちは新たな方策も持たぬまま、ただ後ろから親鳥について回る子鳥のようなものだった。バラトは私たちに気づいたが、何も言わなかった。サンフラワー通りを出発した一行は大声で叫びながら宮殿に向かっていった。順調だった。遮るものもなにもない。天気はいつもどおり上空には霧が立ち込めていたが、太陽がぼんやりと見えた。この霧がアトランティスを天然の要塞に仕立てあげているのだなと思いだした。空には鳥が数羽見えるだけだ。これでは本当に散歩ではないか。

しかし、突如宮殿に着くまであと数十メートルの時、銃声があたりに響きわたった。一人の労働者が地面に崩れ落ちた。どこからともなく撃たれた銃弾に、デモの群衆は散り散りになって、逃げ出そうとした。だが、一人また一人と倒れていく。バラトは必死に叫ぶが、皆混乱している。宮殿から一気に衛兵が飛び出してきた。

そこから少し遅れて、一人の白髪の男が出てきた。ジョベルジアはアッシュとガゼルに小声で

「あれが、エドワード・ジルゴスタだ」

男の目は離れているせいで、よく見えなかったが、衣服の胸には

たくさんの勲章がついている。男は大声で何やら叫んでいる。ガゼルがすかさず能力を使って私たちに教える。

「生け捕りにしろといってるみたいよ」

その頃には銃声は止んで、バラトたちキラー・ユニオンの幹部たちは手錠をかけられていた。見物人は皆無だった。ただ私たちがいた。衛兵の一人がこっちによってきて、あっちに行けと仕草をした。私たちはそっとその場を離れた。

その夜、私たちはランズベルク氏も交えて、これからどうするか話あった。

「やはり、暗殺が一番いいのではないか？」

ランズベルクは低い声で、顔の前で腕組みをした姿勢で言った。

「武器はここ数年でやっと銃１０丁と２００発の銃弾を手に入れられただけだ」

「すいません。ランズベルクさん。我々が甘かったのです。しかし、暗殺はあまりに危険です」

私は素直に謝罪し、なんとかこの味方の出せるだけのものを出させようとした。しかし、ランズベルクは我々を脅迫してきた。

「君らの代わりはいくらでもいる。今日の夜、宮殿に忍び込み、グライアを暗殺してくるんだ。そうしなければ、親衛隊に身柄を引き渡す」

我々に選択の余地はなかった。銃口はこちらに向いていた。応接間には４人のランズベルクの私兵らしき男が銃を取り出し構えていた。ランズベルグは厳しい顔で本性を露わして机を叩いた。

「地下に穴を掘ってある、２ヶ月前に開通した。だが、通じた穴は宮殿の中心部までは遠い。いけ！！」

私とジョベルジア、ガゼルは夜になり、宮殿に侵入した。

二章グライア・シンシア＜17＞

「ちっ。こんなことになるなんてよ。どうなってやがるんだ。こんなに苦労するなんて聞いてないぜ。こりゃ、いくつ命があってもたりねえな」

舌打ちをしながら、不満を言うジョベルジア。私たちは宮殿のいずれかの場所にいるらしい。あたりはけばけばしい建築物が所狭しと並んでいる。どうやら中庭らしい。隠れるには格好のものだが、何故こんなところに得体の知れない美術品のようなものが並んでいるのか。人の巨大な頭をした女の石像はこちらを断末魔の叫び声でもあげている表情でじっと見ている。頭と胴体がライオン尻尾が蛇、そしてその胴体の部分からひどく個性的な人間の顔が何人分か生えている。私たちはここが敵の本拠地であることも忘れてしばし、美術品の放つ強力な魅力にぼうぜんと眺めているだけだった。不思議なことに警備兵はいない。どうしたのだろうか？

「気に入っていただけたかな？我が美術品を？」

ふいに声がした。一人の年老いた老人がそこには立っていた。いや、立っているという表現はおかしい。植わっている。そう彼は足の先が土に植えられていた。

私たちは皆、ランズベルグから渡された銃を構えた。しかし、相手は武器を持っていないようだった。この奇妙な人のような物は何だろう。私は静かに銃をおろし尋ねた。

「何者だ。何故そこから出ない」

老人はシワだらけの顔を緩やかに傾けると答えた。

「わしはシトルマリル・ピクレナン。かつてのグライアの占星術師だ。未来を予知する力を持っていたが、グライアの破滅を予言して、不興を買い殺されるとこだった。しかし、植物として生かされることになり、今に至るわけじゃ。まさか、お主らがグライアを破滅させるものたちか？いや、まさかな、今のグライアは誰にも止められ

ん。生涯にして唯一の予言失敗だろう。私を解放してくれるものを待ってもう10年になる。今では誰も気味悪がって近づかないのじゃ」

資料で読んだグライアの側近であるシトルマリル・ピクレナンがまさかこのような状況に陥っているとは考えもしなかった。ガゼルは銃口を構えたままだ。ピクレナンに狙いをさだめる。私はそれを手で制した。

「待て。ガゼル。何かいい情報が聞けるかもしれない」

「私はこの人が憎いから、撃とうというのじゃないわ。解放とは死よ。せめてもの情けでしょう?」

彼女は強い口調で私に向かって言った。たしかに、そうかもしれない。それでも、今の私たちの『敵の懐に侵入しているにもかかわらず、危機に立たされている状況』を好転させる必要があった。そのための鍵はこの老人だった。

「我々はグライアを倒したい。何かいい考えはないか?」

ピクレナンはフェフェフェと不気味に笑うと、

「いいじゃろう。とっておきの秘策があるのじゃ」

植物と化した老人は話しだした。

二章グライア・シンシア＜１８＞

「グライアの弱みは神の子として生んだ子供じゃて。知って追ったか？グライアに子供がいることを」

ピクレナンは立って胡散臭そうに見つめる３人を相手に問いかけた。私たちは首を振った。我々を導き、束縛する存在である灰色の男も知らなかったのだろうか？それともあえて、話さなかったのか。どうも、段取りの悪さやランズベルグの裏切りなど、灰色の男の力が薄れているらしい。私たちは自分の力を頼るほかなかった。何があっても、これはグライア・シンシアを倒す絶好の機会なのだ。植えられた老人は話を続ける。

「子供が誰の子供かはわしも知らぬ。ただ、グライアはその子供を目に入れても痛くないほどにかわいがっておる。人質に取れれば……。あとはわかるな？」

ジョベルジアは激昂した。

「この爺。俺たちにそんな卑怯なことをしろというのか」

大声で叫ぶ。私はこの男のＴＰＯをわきまえない物言いに腹が立った。だが、冷静に押しとどめる。

「ジョベルジア。君の気持ちはわかる。もちろん殺すことはない。こどもには罪はないんだからな。だが、グライアを倒す大きな鍵になるのも事実だ。どうかわかってくれないか」

「アッシュ。お前まで、ガゼルお前はどう思うんだよ」

ガゼルは目をつぶって一瞬考えると、

「アッシュと同意見ね。それ以外にしょうがないわ」

と静かな声で、あたりを見回しながら言った。なおも動揺を隠し切れないジョベルジアを私は説得に乗り出した。

「ジョベルジア。君のエドワード・ジルゴスタに対する憎しみを思い出して欲しい。そして、この組織は手段を選ばない組織ではなかったか？もちろん私も子供を傷つけないと約束する」

エドワード・ジルゴスタという名前を聞いた途端彼の目の色が変わった。ぶつぶつ何やら、小声で口ばしる。

「そうだ。俺は奴を殺すためにきた。復讐のためだ。止まれない。止まらない」

ここに来てから彼は精神的に不安定なようだ。このジョベルジアははっきりいってもう足手まといだったが、捨ておくにもどうにもためらいがあった。ジョベルジアを放っておいて私はピクレナンに向き直る。

「それで、子供はどこにいるかわかるか?」

「それはわからぬ。だが、グライアはよく。北の庭でこの子を遊ばせていた。ここと反対の宮殿の端にある庭だ」

私の腹は決まった。子供を捕らえるために待ちぶせするのがいいだろう。機会をじっと待つしかない。だが、不安もあった。護衛の達人エドワード・ジルゴスタがどれほどの人数を子供にさいているかだ。なんとか少人数であってほしい、私はそう願った。

「行こう、夜のうちに移動しよう。ジョベルジア大丈夫か?」

ジョベルジアは焦点のあっていない目をようやく私にあわせると虚ろな返事をした。とりあえずついてくる意志はあるようだった。

二章グライア・シンシア＜19＞

ガゼルは頑なにピクレナンの尊厳死を求めたが、本人が同意しない以上騒ぎになるのは目にみえていたので、許さなかった。ガゼルは不満そうに唇をとがらしたが、渋々承知した。

深夜に紛れて、私たちは静かに移動した。ピクレナンに教えられた道を通った。昼のデモ隊の騒動の時に見たような、いかめしい姿をした警備兵はいなかった。代わりにきっちりとタキシードを着た執事のような人間があたりを忙しそうにいったりきたりしていた。どうやら、銃の類は宮殿の中心部では禁止されているらしかった。ピクレナンの情報は確かそうだった。私たちにとって、これは好都合だった。しかし、闇雲に持っている銃を使って警戒されて計画を駄目にすることはもっとまずいことだった。慎重にも慎重を重ねて、移動した。だが、これ以上警備の目が厳しくて進めなかった。もう明け方で、夜が明けようとしていた。私は焦っていた。気持ちは人に伝染する。ジョベルジアはみるみる落ち着きをなくし、今にも銃をもって突撃しようかといわんばかりの態度であった。

そして、とうとう私たちは一人の執事に見つかった。正確にはジョベルジアが見つかったのだ。

「何者だ!!侵入者だな!!」

執事の男は懐から何かを取り出そうとする。ダン!!乾いた音がした。ジョベルジアが撃ったのだ。さらにジョベルジアは先に進む。なんということだ。これで計画は台無しだ。

唇をきつく噛んで私は彼の後を追った。警報が鳴り響く。ジョベルジアの足は早く、追いつけない。どっちにいっただろうかと考えていると、半開きになっているドアがあったので、中を覗いてみると、エドワード・ジルゴスタとジョベルジアが睨み合っていた。だが、何か様子がおかしい。

「コーネリアス。生きていたのか。こんなところで何をしている。

銃を下ろしてくれ。父の顔を忘れたか」
「俺はお前に恨みこそあっても、親と呼ぶいわれはこれっぽちもないぜ。う…うう……」
しかし、ジョベルジアは銃を持っていないもう一方の手で頭を押さえて苦しそうにする。
一体どういうことだ。二人が親子だと??私は混乱した。ふと、ガゼルをみると恐ろしげな顔をしている、まるで、この世の地獄を見たかのように蒼白だ。
なおも二人の話は続く。ジョベルジアも引き金を引くのを迷っているようだ。だが、警報が鳴っている以上時間はあまりない。すぐにここに指示をもらいに部下たちがやってくるかもしれないのだ。ジルゴスタは芝居をしているようには見えない。私たちも中にはいってドアを閉めた。
「お前たちは??コーネリアスと一緒に侵入したのか?何が目的だ?」
ジルゴスタは不思議そうな顔をした。
「私の名はアッシュ。もっともこれから死ぬべきお前に名乗る必要などないが」
「私の命を狙いにきたのか?しかし、何故息子も??」
二人の顔を良く見比べれば確かに似ていなくもない。ここで私はガゼルの顔からひらめいた。灰色の男の計略を知ったのだ。奴は実の息子に親を殺させる気なのだ。なんという残酷なことをおもいつくのだ。こうしてみると私たちの見ていたジョベルジアとはいったい何者であったのか……。ふと、ノックの音がする。
「ジルゴスタ様。入ってもよろしいですか?」
「今はならん。屋敷中を2級武装員で捜索せよ」
「ハッ。了解しました」
足音は去っていった。
「まあ座ってくれ。アッシュくん。コーネリアスお前もだ。我々も君たちの組織については少し情報がある。どちらが正義か、少し話

しあってみようではないか」
部屋にはテーブルと椅子が並べてあった。私たちはだが、座る必要はなかった。ジョベルジアはブツブツと銃を持ったまま一人言をつぶやいている。持っていた銃を構えると私は撃った。白髪のたくましい男は床に倒れた。ジョベルジアは呆然としている。
「行こう。屋敷に火を放つぞ」

二章グライア・シンシア＜２０＞

立ち尽くすジョベルジアを放っておいて、私とガゼルは近くに落ちていたライター（おそらくジルゴスタの物）を拾いあげると燃えそうな紙をありったけ燃やして火を強くした。

宮殿は容易に燃えないだろうが、時間稼ぎにはなる。そして、ジョベルジアをどう扱うべきか。私は彼にとって憎い仇になるのだろうか。復讐の連鎖という言葉が頭に浮かぶ。ならば、いっそ、ここで決着をつけるべきか。

「アッシュ。何をする気なの！！」

ガゼルの声が響く。心はもはやここにはないジョベルジアの背中から私は撃とうとしていた。彼女は私よりもずっとジョベルジアとの付き合いも長いわけだし、情をわくといったところだろう。

「止めるな。ガゼル」

「何考えてるの？彼は、ジョベルジアは私たちの仲間なのよ。たしかにあの男に親子といわれて動揺しているみたいだけど、それはあの男が錯乱していただけの話よ。まさか、あの男の話を真に受けているんじゃないでしょうね。ジョベルジアも、ジョベルジアよ。しっかりしなさい」

確かにそうかもしれなかった。私はここに来てからというもの疑心暗鬼になりすぎていたのかもしれない。だが、確かにあの時閃いた考えが、頭を支配してしまってとまらなくなったのだ。ジョベルジアとあの男、エドワード・ジルゴスタは何の関係もない。心の中でこの文言を３度唱える。少し冷静になれたような気がした。

「すまなかった。ジョベルジア。許してくれ」

ジョベルジアは虚ろな目でこちらを向いた。

「アッシュ。俺は誰なんだ。何故ここにいる」

「私たちは法外の五貴族を倒すためにここにやってきたんだ。さあ、もう一歩だ。立ち止まっている暇はないぞ。いこう」

「法外の貴族？そうだったな。忘れていた。俺が何をすべきかを」
ジョベルジアは少し立ち直りをみせた。少しずつ回復してきたようだ。しかし、部屋の半分は燃え盛っている。のんびりしている時間はもとよりなかった。
部屋を出ると、軍隊のような縞模様のグリーンと黒の服を着た兵士たちが銃を持って立っていた。
「銃を捨てろ。侵入者め」
万事窮すだった。ジルゴスタめ、やはり我々を逃がす気はなかったな。用意の周到さに舌を巻いた。どうやら、ドアごしのセリフはあらかじめ決められていたメッセージのようなものだったらしい。もっとも、当の本人はこの世にいないわけだが。
私たちは捕らえられた。念入りに身体検査をされ、何も持っていないことがわかると手錠をかけられた。
「ジルゴスタ隊長！！」
中に入った兵士が骸を見つけたらしい。兵士全員の目が怒りに燃えた。銃身で顔を2，3度殴られた。口の中が切れて、血が滴り落ちる。しかし、暴行は長く続かなかった。
「待て！！そのものたちには聞きたいことがある」
兵士たちは我にかえって声の主を最敬礼で迎える。
「グライア様。ただいま、此奴等が放った火を消しております。危険です」
「とりあえず、その者たちには聞きたいことがある。これ以上痛めつけるな。後で直々に尋問を行う」
兵士の中で一番偉いものが、「了解しました」と返事をすると指示が与えられたらしく、床に倒れた私たち三人は意識朦朧としたまま、どこかに運ばれた。

二章グライア・シンシア＜２１＞

「起きろ。おい！！」

耳元で大きな声が響く。ここは一体どこだ?脳はまだ十分目覚めていなかった。辺りをぼんやり見回すと、灰色の壁に囲まれているようだった。

「出ろ！！アッシュ」

何故私の名前を知っているんだ?服を探ると、持っていたものが全てなくなっている。なるほどパスポートを取られたらしい。身体の調子はどうだろう?私は腕をついて体を起こそうとした。やはり、傷は完治しているようだ。どこも痛まない。赤仮面のシュナイルによって与えられた能力がここでも役に立った。グライアたちは私の能力に気づいているのだろうか……。

私は傷ついたふりをして、ゆっくりと独房から出た。逃げ出すことも考えたが、私にそんな戦闘力はないのはわかりきっていた。また、ここがどこかさえわからないのに逃げ出すのは愚かなことに思えた。

「歩け！！」

命令する役目をおった人間が私に手錠をはめて叫んだ。のそのそと歩くと、「もっと早く」とか「シャキシャキ歩け！！」などと後ろから声をかけてくる。しかし、傷を負ったふりをして、周りを観察しながら歩いた。残念なことにジョベルジアとガゼルの姿はどこにも見えなかった。

私は大きな車の後部座席にのせられた。周りを3人の警護人が囲んでいる。3人とも銃を持っている。どうやら、ここはアトランティスの街中にある刑務所のようなところらしかった。私はおそらくこれから宮殿に再び連行されるのだろう。車の窓には外が見えないように黒い幕が貼られてあった。前部の運転席との仕切りにもやはり、黒い板がはめ込まれていた。後部にはわずかな電球が天井につ

いているのみである。
「どこに連れていくんだ?」
と私は尋ねたが3人の男女は機械のように前を向いたまま、まったく反応を示さなかった。車が止まる動きを車内で感じた。体が少し前に慣性で動く。機械じかけの警護人も同様だ。ドアが開き、今度は別の如何にもしょぼくれた軍服姿の兵士が現れた。
「ご苦労様です」
私の周りにいた3人は立ち上がって敬礼をした。どうやら、この男かなりの階級らしい。
「さっさとこの男を出せ!!グライア様がお待ちだ」
「ハッ!!」
3人の元気の良い返事が聞こえる。グライアの名を聞いたとたん、目は輝かしい任務につけた喜びにふるえているように見えた。3人の長銃を持った警護人に連れられて、建物の中に入れられると、車のエンジン音が聞こえた。走り去ったらしい。ある一室に入ると、一人の女性が私を待っていた。まさか…この女が?
「よくきたな。アッシュというらしいな。ふふふ。ピクレナンに聞いたぞ。私の命を狙いにきたそうだな。もっともあの男はもうこの世にいないがな。私はグライア・シンシア。お前たちの組織と敵対するものだ」
サンフラワー革命が起こったのはおよそ20年前。今見ているグライアはどうみても二十歳少し過ぎたくらいの若い女性だった。いったいどういうことなのだ。

二章グライア・シンシア＜２２＞

「私を見て驚いているようだな。私の若さに驚いているのか？年老いたおばさんかと思ったか？」

グライアはひざまずく私を見下ろして立った姿勢のまま言った。服装は世界一高価といわれている光る夜叉布を使った見たこともないような斬新なデザインをしたものを身につけている。服が輝いているために、やや眩しいのだが、太陽のような光ではなくちゃんと相手の姿も目に映る不思議な光だった。

黙って手錠の感触を確認すると、周りを見回す。

警護人と軍服姿の兵士、そしてグライアと私がいるのみだった。

「パロワ以外は皆下がれ」

３人の警護人はグライアの姿に見とれていたのを命令に我に帰って、あくせくと回れ右をして部屋から出ていった。パロワ？どうやら、この軍服姿の兵士がパロワ・アーティングらしかった。グライアの側近の一人だ。私は厳しい顔をして、じっと相手の言葉を待った。

「さて、アッシュ。お前を呼んだのは他でもない。表向きはもちろんお前たちの組織のことを聞き出すためだ。しかし、私は慈悲深い。最後のチャンスをやろうと思ってな。ここにいるパロワもかつては私の命を狙った一人だったのだよ。人間の心は変わるものだ。真実を知ればな」

グライアは背を向けて語りだした。パロワは私を油断なく見張っている。

「真実だと？」

私はまったく聞く耳を持っていなかった。ただ、ただ相手を殺すチャンスを狙っていた。それだけだった。しかし、グライアは熱心に語りかけてくる。

「そう。お前の知らないだろう真実だ。おそらくお前は個人的恨み

か、もしくは組織の命令によって動いているのだろう。だが、そこに正義はあるのか考えてみたことはあるか？」

「人の正義などどうでもいいことだ。私は私の正義がある。お前にわかってもらおうなどと思わない」

吐き捨てるように言うと、グライアはこちらを向いて艶然と微笑んだ。

「アッシュ。もっと世界を知れ。そうすればお前の考えも変わる」

「知っているさ。お前たちの悪事も、みんなな」

鋭い目で睨みつけると、グライアは今度は真剣な表情をして、パロワに合図するとパロワが刃の長いナイフをハンカチに包んで取り出した。グライアは受け取ると、低い、うなるような声できつくいった。

「ならば死んでやろう。アッシュ。パロワ！ランムルヒをここに呼べ」

訳がわからず必死に相手が何をいっているのか理解しようとした。グライアが自ら死ぬ？どういうことだ？？パロワが一旦部屋を出て、再び戻ってくると一緒に少女が入ってきた。グライアは子供の肩に手をかけると優しく言った。

「その代わり、この子を連れていってほしい。ランムルヒという」

「一体、何をいっているんだ。グライア！」

私の声はひどく動揺していた。

「それで私の命が奪えるのだ。安いものだろう？後の処理はパロワがやる」

グライアはナイフをパロワに握らせて言った。

「さあ、パロワ私を刺すがいい」

パロワはわずかなためらいもなく、グライアの喉を切った。鮮血があたりを包む。ランムルヒは身じろぎもしない。まるで、魂の抜けた器のようだ。

二章グライア・シンシア＜２３＞終

パロワは私の手錠を外すと、グライア・シンシアの亡骸と向きあう私を哀れそうに見つめた。まただ、また自分の手で決着をつけることができなかった。しかし、何故グライアは自ら死を選んだのだ。その疑問に答えるようにパロワは話しだした。

「グライア様は不治の病にかかっていらっしゃった。その苦しみは想像を絶するにあまりあるものだった。夜中に苦痛でのたうちまわる叫び声がよく聞こえてきたものだ。グライア様はお前に命を奪わせる気だったらしい。だが、私がその任を受けることになった。もし、お前がグライア様の息の根を止めていたならば、きっと脱出するさい信者たちが大きな妨げになると思ったのであろう。そしてアッシュ。この子を連れていってはくれないか？私からも頼む」

はっきりいって子供など私の復讐の旅に無関係だった。そして足手まといだった。子供の頭をなでるパロワに告げた。

「断る。私のなそうとしていることは危険だ。子供を連れて行くことはできない」

「もし、この子が法外の五貴族同士の間に生まれた子でもか？」

「なに！！？？」

パロワのいっていることが本当だとすると、これからの戦いの大事な戦術兵器となるだろうことははっきりしていた。慎重に私は誰の子か聞いた。パロワは恐ろしげな口調で重々しく答えた。

「バルト・ゲール・アランです」

「なるほど。使えるかもしれない。連れていってやろう」

私は極めて実務的に判断した。バルド・ゲール・アランにとっては重要な人質になるからだ。子供に向きなおると、声をかけてみる。

「君。名前は？」

私が声をかけると目の前で育ての親は死んだというのに、眉一つ動かさなかった子供がわずかな微笑を浮かべた。

「ランムルヒといいます」
「私はアッシュという。これから君とともにアトランティスを離れる。覚悟はあるか？」
「全てお母様の言いつけ通りにいたします。ついていきます。アッシュ」
「よし。行こう！！パロワ。案内してくれるんだろうな？」
パロワは嬉しそうに手を上下させると言った。
「はい。あなたの仲間とともにアトランティスを出る準備はできております。こちらへ」
何故グライアは死んだのか、パロワの言うことを信じるべきか。だが、とにかくグライアは死んだ。待っていろ、残りの法外の五貴族。必ず裁いてやる。私の正義の名のもとに。

三章バルド・ゲール・アラン＜1＞

パロワに見送られながらアトランティスを去る3人の心持ちは暗い。

「おい。アッシュ。その馬鹿げた話を信じろというのか？」

すっかり調子を取り戻したらしいジョベルジアはいつもの喧嘩腰の口調だ。

「信じるかどうかはお前に任せる。ただ、さっき話したことが私の見た全てだ」

ガゼルが軽いため息をついて立ち上がる。何かいいたそうだ。

「何だ？ガゼル言ってみろ」

すかさず発言を促す。痛めつけられた影響だろうか？ガゼルまで少し苛々しているらしく、持っている新聞を叩きつけた。

「あなたは敵の三文芝居を見せられてのこのこ帰ってくるなんてね。信用した私が馬鹿だったわ。あなたにグライアは死んだと言われた時、簡単に信じた私が馬鹿だったわ。こんなことならアトランティスに残っているべきだった。明日のアーリア新聞が楽しみね。もし、グライア死亡の記事が載っていても、私は信じないわよ」

ガゼルとジョベルジアの言うことも、もっともだ。私は何故あの女がグライア本人だと思ったのだろうか。だが、帰りの船には乗ってしまった。とりあえず態勢を立て直す必要がある。それに、よく生きて帰れたものだ。3人とも死んでもおかしくなかった。私の判断に間違いはなかったはずだ。だが、なおもガゼルは噛み付く。

「それにその子供は何よ！！法外の五貴族同士の子供ですって？？いったい、その子をどうするつもりよ。今に仇をうたれるわよ。私たちが法外の五貴族にしているようにね」

私は自分の考えを全て話すつもりはなかった。

「ランムルヒには悪いが、この子がいればバルト・ゲール・アランの方からコンタクトをとってくるはずだ」

ガゼルはため息をついて、もう話す気はないといったようすで手を振った。ジョベルジアも、もう何もいわなかった。ランムルヒを膝にのせて海を眺めていた。子供にはこんな話を聞かせたくないという配慮だろうか。ジョベルジアは子供好きらしかった。

数時間後、アーリア帝国の最大の港ポート・ド・アーリアに着いた。陸に一歩足を踏み入れた時、あの忌まわしい声が戻ってきた。

（（アッシュ……。アッシュ……））

灰色の男だ。私は立ち止まって、返事をした。

『グライアは死んだのか？』

（（先ほど、グライアは死んだとの情報が入った。よくやってくれた。すべて君の思考は追っていたよ。ジョベルジアのことが気になるのか？お前も人の子というわけか。くくく。そう、ジョベルジアはエドワード・ジルゴスタの子供だよ。そう吹聴する浮浪者の若者がいると聞いてな。どうやら本当らしかったのでな。少しネジをかけかえて、利用させてもらった。安心しろ、これからもジョベルジアは忠実な仲間だよ。さすがに故郷のアトランティスでは少し記憶も揺らいだようだがな））

『何故そんな手のこんだことをする！！』

（（なあにちょっとした余興さ。それこそ、君の目的つまりは復讐にはもってこいの状況ではないかね？君が引き金を引いたのはせめてもの情けかね？ふふふ））

私はこの男の人間味のない受け答えに心底体中がぞっとした。

（（次はバルド・ゲール・アランだ。今度は君たちは如何にして相手をおびき出すかにかかっている。今回は赤のシュナイルの指揮のもと動いてもらう。君にはちと荷が重い相手なのでな。サンタアルベニアへ行け。敵ももう動き出しているかもしれん。子供は絶対に逃すな））

三章バルド・ゲール・アラン＜2＞

私たちはサンタアルベニアに向かった。夜が迫っていた。ようやく、星空のわずかながら煌めく地に戻ってきたのだ。夢使い座が東の空に見える。そうか、もうこんな季節か。北半球は秋にさしかかっていた。封印したはずの、私と母を残していった父の言葉が脳裏によみがえる。「アッシュ。星はいいぞ。地上の全てを超える夢がある。一つ星座を教えてやろう。あれが夢使い座だ。主星のカミナムシンは月の次に明るい綺麗な星だよ。ほら、一番上に一際輝いているのがそうだよ。お前も大きくなったら夢を追う男になれ」父は夢追い人だった。そして、夢のために家族を捨てた。今では顔も覚えていない。私が小さい頃に家を出た。母は何もいわなかった。それが一層私には悲しかった。

列車の旅はいつも過去を思い出させる。たいてい、それはいい過去ではない。悪い過去だ。忌まわしい過去。大人になった今、父がどのような事情で家を出たのかはガルザニ叔父に聞いてみたが、言葉を濁すのみだった。名前はたしか、クリム・ダーデンスルト。今となっては記憶していることすら汚らわしい。私を捨てた父に、いや男になど二度と会うつもりなどなかった。

私の座席のとなりにはランムルヒが座っている。窓際を占領して、うつろいゆく夜の闇と光にみとれているようだった。言いつけは素直に守るし、いわゆる“良い”子であった。もっとも彼女の出自を見れば、とてもそうは言えはしなかったのだが……。

「ねえ。アッシュ」

ランムルヒが外を見ながら私に話しかけてきた。父を思い出して機嫌の悪かった私は面倒そうに「なんだ」と返した。

「お母様はとても思いやり深い人だったわ。アッシュはお母様の命を狙っていたんでしょう？何故なの？」

私は子供に言い聞かせるように、そして残酷に言い放った。

「君のお母さんは死ぬに値する人だった。君にとって思いやりがあっても、他の人からはそうとは限らないのだよ」

私は小声でランムルヒにかろうじて聞こえる声でいった。ジョベルジアは後ろの席にいたので、聞かれるとまた「子供にそんなことを言うな」とか言いそうだったからだ。ランムルヒは大人の悪意もしくは敵意を感じて、怖くなったに違いない。しくしくと静かに泣き始めた。私は黙ってランムルヒの後ろ姿を見ていた。

残酷かもしれないが、しょうがない。私を憎むことで生きる道を見出すがいい。それがせめてもの私の思いやりだ

ガゼルが列車に乗る前に言ったことをふと思い出す。

「この子はあなたに任せるわ。ただし、グライアがあなたに託した意味を考えなさい。そして、どうするか決めなさい」

彼女の目は轟々と燃えたぎる釜のごとき、怒りに燃えていた。私に預けるというのは灰色の男からの命令か？何故彼女が怒るのか理解できなかった。自分が任されなかったのが悔しかったのだろうか。どちらにせよ、私にも異論はなかった。この子は責任を持って育てる。ランムルヒにとっても、稀代の犯罪者の親を持つよりずっといいことだと思った。

景色は徐々に明るさを増していく、秋の夜風がしんみりと窓の隙間から冷気を運んでくる。もうすぐサンタアルベニアだ。そこで赤のシュナイルと合流する。バルド・ゲール・アランはもう動き出しているのだろうか。列車は広大なアーリア帝国の陸地を少しずつ走ってゆく。ランムルヒに声をかける。

「もうすぐ着くぞ」

返事がない。耳を澄ましてみると寝息が聞こえる。到着まで寝かせてやろう。長旅で疲れているのはこの子も一緒なのだ。

三章バルド・ゲール・アラン＜3＞

サンタアルベニアに着くと、雨だった。滅多に雨の降らない気候と聞いていただけに不吉な感じがした。暗い雲に覆われた街ではいつもどおり人々が思い思いに行き交っている。

「ゲルマンとの戦争が近いって本当か？」

「さあ、まさかな。２大国が戦争すれば世界戦争になるはずだぞ、皇帝陛下もわかってらっしゃるはずだ」

「しかし、ゲルマンが他国侵略の動きを見せているというぞ。アーリアの平和も終わる日は近いかもしれないな。嫌な時代に生まれたものだ」

タクシーを待つ間、中年の会社勤めの仕事人らしき二人の会話を何気なく耳に入れる。

「戦争か……」

思わず呟く。グライア亡き後の小国連合はアーリア連合、ゲルマン同盟いずれかに吸収されるだろう。私たちは以前訪れた古い館に泊まった。どうやらここは組織が借り上げている建物らしかった。部屋は大人たちは一人一部屋だったが、ランムルヒは私と寝るように既に部屋の片隅に小さなベッドが用意してあった。ランムルヒは夕食を食べると、すぐに眠りについた。私は寝室でバルド・ゲール・アランのことを考えていた。

バルド・ゲール・アランは稀代の大盗賊と云われている。キングダイヤ事件、皇位継承の宝物盗難事件、アラン・ビルナウルの絵画事件。全てバルド・ゲール・アランが絡んでいるといわれている。そんな彼からしてみれば、子供一人我々から盗み出すのは簡単かもしれない。だが、一ついつもと違うところがある。それは今度はバルド・ゲール・アランにとって血を分けた子供が対象ということだ。

いつの間にか眠りに落ちていたらしい。夜が明け、いつもの快晴がサンタアルベニアを包んでいた。ランムルヒはまだ寝ているだろ

うか。寝床を見る。いない！！
私は跳ね起きると一階に走った。階下の大広間でランムルヒとガゼルは食事をしていた。
「ここにいたのか」
血相を変えた私の姿をガゼルは笑った。
「もうちょっと用心したほうがいいわよ。昨日はあなたも疲れていたようだけど……」
「ジョベルジアはどうした？」
不愉快げに顔を歪めると一人見えない男の姿を探した。
「赤のシュナイルを迎えにいってるわ。作戦はシュナイルから知らされるでしょう」
ランムルヒは屈託なく「おかわり」とか「もっとないの」とか拗ねた態度をみせた。ガゼルもそれに優しく応対している。手懐けていたほうが何かと便利ではあろう。私も黙ってテーブルにつくと朝食を食べ始めた。ガゼルが新聞を差し出す。無言で受け取ると一面に『グライア・シンシア死す！！』と書いてあった。側近のパロワ・アーティングに裏切られたとなっていた。ランズベルクの名前はどこにもない。これからアトランティスは内戦状態に陥るだろうと締めくくってあった。哀れな老人の野望も成就しないだろう。
と、そこにジョベルジアがドアを開け入ってきた。
「もうすぐ赤のシュナイルが来る。ここでまずは作戦の説明をするらしい」
赤のシュナイル。私にチカラを与えた男。同時に、灰色の男との忌まわしい絆も。脳の奥で男が笑った気がした。心を空にして、シュナイルを待った。

三章バルド・ゲール・アラン＜4＞

男は仮面を被ったまま、颯爽と大広間に入ってきた。ランムルヒが脅えている。仮面の奥から男は少女をみつめると、目で笑った。
「やあやあ。よく来たね。お嬢さん。遠いところからようこそ。サンタアルベニアは気に入ってもらえたかね？」
少女は悪魔でも見るような顔つきでアッシュの背中に隠れた。
「おやおや。嫌われてしまったようだ。アッシュくん。彼女の護衛を頼むよ」
そういうとシュナイルは静かに椅子に腰かけた。
「さあ！！作戦会議だ。私がとっておきの作戦を用意してあげたよ。まさに法外の貴族にふさわしい最後をバルド・ゲール・アランも迎えられるだろう」
男の高笑いが響く。ランムルヒはまだ脅えている。ジョベルジアとガゼルは慣れた顔つきでシュナイルの話を聞いている。笑い終えると、さらに言葉の洪水を続けるシュナイル。
「要点を説明しよう。バルド・ゲール・アランは既にアーリア帝国に入ったとの情報もある。やがて、ここを突き止める日も近くあるまい。あの男なら一週間とかからずね。かつて、古代世界でこんな話がある。弓矢の腕前で並ぶもののないといわれたウィリアム・テルという男の話だ。自分の息子だか、娘だかよく覚えていないが、その頭にリンゴをのせて矢を放ったそうだ。矢は見事リンゴにあたった。バルド・ゲール・アランも相当な知略家らしいからな。彼が知略で自らの娘を救えるかどうかの大一番だ。彼の作戦が失敗すれば娘は死ぬ、そんな状況を我々は作ってやらねばならない。わかるね？アッシュくん。異論は後で聞くよ。つまり、タイムリミットだ。2週間をその期限にしたい。バルド・ゲール・アランには伝えてある。今朝の新聞をみたまえ。メッセージ欄にはなんと書いてあるね？」

ジョベルジアが新聞を手にとって紙面を急いで探す。メッセージ欄を読み上げる。

「これか？『法外の貴族に法外の革命結社が告ぐ。娘は預かった。2週間後に娘は処刑する。それまでに来られたし』」

シュナイルはまたぞっとするような高笑いをした。

「それだよ。ジョベルジアくん。さあ、奴の息の根を止めるのが先か、我々が娘を奪い返されるのが先か。楽しみだ」

私はこの幼いランムルヒの命を奪うのは反対だった。親には憎しみこそあれども、まだ子供だ。

「シュナイル。この子はまだ子供だ。本当に命を奪う気はないだろうな？」

シュナイルは今度は低い声でアッシュの肩に手を置いた。

「アッシュくん。そうならないように君たちが頑張ってバルド・ゲール・アランの命を奪うんだろう？愚問だよ。それ以外の未来は考えなくてよろしい。だが、時に非情さも必要だということはわかっていたものと思ったがね」

「十分わかっているさ」

私は語気を荒らげてシュナイルの手を振り払った。シュナイルは低い声でまた笑って去り際に、こう言い残して去った。

「本当にそうかな？ふふふ。まあ、がんばりたまえ。もしバルド・ゲール・アランに娘を取り返された場合は君たちには責任をとってもらうからね。組織の人間は君たちだけではないと教えておこう。健闘を祈る」

三章バルド・ゲール・アラン＜5＞

それから一週間は無事に何事もなく過ぎた。だが、変化は突然にやってきた。ランムルヒを散歩に連れて行くのが日課になっていた私はいつものように昼頃に二人で出かけた。いつもは何事もなく、近くの公園で遊ぶランムルヒを見つめているはずだったが、この日はランムルヒに近づく少年がいた。

たしかに、ランムルヒは年頃の地元の少年にとってはいかにも異国情緒あふれた美形の顔だちをしていたが、今まで前例がなかっただけに私は警戒心を強めた。数十分、二人は話しをしていたが、少年は残念そうに去っていった。帰り道、ランムルヒに尋ねた。

「さっきの少年はなんだったんだ?」

「なんでもないわ。ただ、私に用もなく話しかけてきただけよ。何が目的かしら」

「ランムルヒと仲良くなりたかったんだろうさ。だが、気をつけろ。お嬢様育ちはまだまだ世間を知らないからな」

ランムルヒは少し反抗的な目で私を見ると

「知ってるわよ。少しぐらい」

と言った。そしてアッシュの手を握りながらこちらを向いた。

「ねえ。アッシュ。お父さんのこと覚えている?」

「父?君のか?」

「違うわ。あなたの父よ」

「いや。覚えていない。ずいぶん昔にいなくなった」

歩きながら小さな子供に嘘をつく人間になったかと自分を責めながらも、ほとんど記憶のない今ではあながち間違いとも思われなかった。彼女は自分の父親のことを考えているのだろうか。私のように自分を捨てていった父を恨んでいるのだろうか。私は彼女にさりげなく聞いてみた。

「君の父親のことは知っているね?」

「お母さんには何も聞いてなかったけど、法外の五貴族の一人なんでしょう?アッシュの仇だってことも知っているわ」
「そうだ。そして私たちは君のお父さんを殺そうとしているんだよ?何故そんなに冷静でいられるんだ?」
私は彼女にとって辛い現実を語った。彼女の手を握る力が強くなった気がした。
「冷静?私が冷静でいるですって?アッシュ。あなたは優しい人だと思うわ。でも、どこか抜けているのよね。冷静でいられるはずがないじゃない。どんな父か想像は何回もしたわ。でも、今の生活より良いって保証はないし、夢はもってないわ。それに、私が父と行ってしまえばアッシュたちも困るってことは知ってるわ」
賢い子だと感心したが、同時にどうすれば皆が丸く収まるか考えている姿にいじらしさとともに、悲しさを感じた。
(こんな子供にしたグライアは親として失格だ)
アッシュはそう思い屋敷に戻った。しかし、屋敷には誰もいなかった。代わりに一通の手紙が残されていた。

三章バルド・ゲール・アラン＜6＞

「君たちの仲間は預かった。返して欲しければ、少女を連れてサンタアルベニアのスカイネイビーホテルまで来い」

書かれている内容はすぐには信じがたいものだった。家を離れたのはわずか一時間ばかり、そのわずかな間にジョベルジアとガゼルが捕まっただと??そして、この場所の指定は明らかに罠だった。動揺した私に男が語りかけてきた。脳の隙間をいつも奴はついてくる。

（（アッシュ。アッシュ……））

『灰色の男か。ガゼルたちがさらわれた。救いにいかなければ』

（（君はまだそんなことを言っているのかね。彼らはドジを踏んだ。結果どうなろうと我々の知ったことではないではないか））

『自分の部下をなんだと思っている』

（（ふふふ。君だけはわかっていると思っていたがね。お互い利用し利用される存在。それが君たちと組織の関係だ。君の考えはとっくにお見通しだよ。君は私に干渉される代わりに能力を得た。望む望まないに関わらずね。それが代償と報酬だよ））

この男の言い様は確かに私の考えていたことと同じだった。しかし、共に苦難を共にしてきたジョベルジアとガゼルとの間に仲間意識が芽生えるのは情というものだった。

『すると、何か?私はここにいて組織の人間がガゼルたちを助けだすのを手をこまねいていろと?バルド・ゲール・アランがいる可能性があるにもかかわらずか!』

（（アッシュ。君の出番はまだ後に用意してある。しかも、壮絶な、出番が待っているよ。何でも自分でできると考えることは間違いだよ））

ランムルヒが立ったまま怖い顔をして虚空を見つめている私を心配そうにして声をかけてきた。

「どうしたの？アッシュ？ジョベルジアとガゼルは？」
「心配するな。少し出かけているだけだ」
そうであったらいいのにとどれほど思ったことだろう。私はランムルヒと自分の部屋に戻ると、これからどうするべきか考えた。ここは相手に知られている以上危険だった。
と、そこに一階に人の気配がした。奴らか？私は８発式のゲルマン製の銃を懐から取り出すと静かに手に持つとランムルヒにここにとどまるように言って、音をたてないように階段を降りた。
一階からは声がする。
「一体……アッシュのやつは…」
「どうすべきかしらね。灰色の男の……」
聞き覚えのある声に私は驚いた。一階に急いで降りた。
「誰だ！！」ジョベルジアは銃口をこちらに向けた。私だとわかると狐につままれたようにキョトンとしていた。
「何故お前が？？連れ去られたんじゃなかったのか？」
なるほど、先程の手紙は彼らに向けて送られてきたものらしかった。
「それはこっちのセリフだ。この手紙はいつきた」
「お前たちが散歩に出かけてすぐだ」
我々に対する宣戦布告ということか。バルド・ゲール・アランめ。やってくれる。

三章バルド・ゲール・アラン<7>

私たちの居場所はすでに探りあてられていた。後は如何に隙をみせないかの持久戦になる。だが、もし万が一の場合私は本当にランムルヒに銃を向けられるだろうか?もし、バルド・ゲール・アランが私が少女を殺せないと看破したら?弱気になるなアッシュ。お前はやれるはずだ。少し一緒に過ごしたせいで情がうつったというのか!

手紙が来た日から散歩は中止になった。聞いたところによるとスカイネイビーホテルには誰もそれらしき人物はいなかったそうだ。一体、私の所属するこの組織は一体、何人の構成員がいて、何人がシュナイルによって能力者とされたのかも不明だった。ランムルヒは家の中で退屈し始めていた。ジョベルジアとガゼルにランムルヒの護衛を任せて、私は久しぶりに外に出た。ランムルヒの読む本を買うだめだった。

少し都会の大きな書店に子供向けの本がたくさん並んでいた。私はその一つを手にとると中身をめくり、内容を確かめる。題名は『蝶とカマキリ』といった。食べられる者と食べる者の垣根を超えて仲のよかった二匹は決して相手を裏切らない誓いをたてるが、腹をすかしたカマキリは本能のままに泣きながら蝶を食べてしまう。そんなお話だ。最近の本はずいぶん暗い内容の本があるものだと考えて、そっと棚に戻すと古代神話の物語の一冊を手に取った。これを買おう。これなら内容も知っている。当たり障りのないものに見えた。

ふいに後ろに人の気配がする。首を曲げて振り返ると、一人のメガネをかけたビジネスマン風の男が立っている。背の高さはアッシュと同じくらいで平均くらい。時計は高価そうな金色の時計を腕につけている。アッシュが見つめると、男は満面の笑みをみせた。アッシュは何者かと疑問に思ったが、すぐに見当はついた。小声で男

はアッシュの耳元に顔を近づけると
「はじめまして。アッシュ・クロフォードさん。バルドといいます」
と言い放った。この男が法外の貴族の一人なのか？懐に手を伸ばし銃を確認する。いつでも抜ける。しかし、ここで騒ぎをおこすのはためらわれた。
「賢明です。アッシュさん。あなたが銃を撃っていたら、あなたの大切なご家族は今頃あの世行きだったでしょう」
男は澄んだ目でアッシュを近くの喫茶店に促した。私は従わざるえなかった。やはり、私たちに関することは調べつくされているようだ。そして、第二の家族のことが心配だった。強制的な力なしに初めて法外の貴族を前に撃つことをためらった。灰色の男は何も語りかけて来なかった。
「アッシュさん。あなたたちが組織のボスにいいように使われていることも知っています。それは魔術でもなんでもない。あなたの脳に電波を受信するチップが埋め込まれているんです。今私はその電波が届かないようにする装置を持っています。だから、安心して話しをしてください。もちろん、あなたがイエローランドの件の生き残りであることも承知しています。どうしてもお知らせしたいことがあって、あなたの家族を人質にとらせてもらいました。無粋な真似をして申し訳ありません」
なるほど、脳に直接語りかけてくる声はそんな仕組みだったのか。私は久々に開放感を味わった。だが、バルド・ゲール・アランは私の家族を人質にとっているらしいのだ。またハッタリかもしれなかったが、どうにも難しい状況だった。ぼんやりとした憎しみが心に渦巻いていた。だが、私は初めてこの男の話を聞いてみようと思った。

三章バルド・ゲール・アラン＜8＞

席に着いた私にバルド・ゲール・アランはゆっくりと話し始めた。
「今世界は有史始まって以来の危機にあります。というのも世界を2分する戦争が起きようとしているからです。どういうことかわかりますか？」
「アーリア連合、ゲルマン同盟のことか？」
「そうです。アッシュさん。二つの勢力は常に均衡を守ってきました。しかし、両国の兵器産業界は長らく同盟間に守られてきた平和が気に入らない。そのために様々な方策を巡らせてきました。戦争を起こそうとして。そして、まもなくそれは成就しつつあります。パワーバランスが崩れかけているからです。政府の要人になりすまして、兵器産業界が送り込んだ政治家、役人と戦うガルド・イニエーブ。アトランティスを率いて第三国連合を作っていたグライア・シンシア。二人の仲間が倒れました。君たちの組織によってね。我々の力は大きく削がれた。それとともに、我々を排除しようという動きは両国で高まりをみせています。いつの間にか悪者にされ、いつの間にか時代とともに我々は犯罪にも手を染めたせいもあって悪評もたった。メディアも皆向こうの味方だったのです。イエローランドは我々がやったとされていますが、本当にそれが真実であるか考えてみたことはありますか？」
「イエローランドは法外の貴族が住民を虐殺した事件として有名だ。誰もが知っている」
「あなたは復讐者です。それもとても意志の強い。ただ、あなたは我々を盲目的に憎むことで生きてきた。真実を何一つ知ろうとせずに」
真実だと？？誰もが知っている？この男は何を言っているんだ。
私は混乱していた。背中からぞわぞわとナメクジがはってきて、手の届かない所にいるような感覚だった。だが、私にとっての真実は

相変わらず変わらないものだった。バルド・ゲール・アランはさらに続けた。

「何故我々があなたの命を奪わないのか？そこに疑問はありませんでしたか？実はあなたのお父さんは我々の味方です。そして、あなたに手紙を渡すように頼まれました。どうぞ」

そう言って彼は私に小さな封筒を渡した。ふるえる手で封筒を開けると、そこには『クリム・ダーデンスルトよりアッシュ・クロフォードへ』とある。バルド・ゲール・アランが調べたのか定かではないが、確かに父の名前だ。記憶には朧げに名前が刻まれている。私は読んでみることにした。

三章バルド・ゲール・アラン＜9＞

『アッシュ。お前が成人して復讐を企てることになるなど私は予想していなかった。あの時、どうしてもお前の前から姿を消す必要があったのだ。それはお前と母さんのためでもあった。私は世界を戦争に巻き込もうとする組織と常に戦ってきた。法外の貴族とともに……。敵の反撃は強烈だった。彼らは国というものを、権力というものを持っていた。一方我々は何ももっていなかった。ただ、あるのは優れた科学技術のみだった。そう。法外の貴族とは一つの組織の象徴的存在なのだ。ガルド・イニエーブは無敵の体を、グライア・シンシアは永遠の若さをお前も知ってのとおり与えられていた。最新の科学技術によってだ。我々はその科学力によって、戦争へと世界を誘う存在に対して優位を保ってきた。しかし、我々の力は尽きようとしている。協力者だった科学者は敵に抑えられ技術的優位は揺らいできた。そして極めつけが、非戦論者だった皇帝の死だ。皇太子は主戦論者であり、まもなくその皇太子が帝位につく。もしそうなればゲルマン同盟とアーリア連合の戦争は不可避だろう。

そして何よりもイエローランドの事件は法外の貴族が起こしたものではない。歴史は常に闇を持つ。我々は歴史の闇の首謀者に仕立て上げられたのだ。その首謀者は、おそらく敵の組織の誰かということしかわからないが、必ず真実はある。お前の所属する組織は我々の敵と何らかの繋がりがある可能性も否定できない。バルド・ゲール・アランはお前にガルザニやカレラ、サニチェエートを人質にとったというだろうが、お前に話を聞かせるためだ。私たちはそんなことをしない。護衛の名目で彼らにつけられている人間たちこそ問題なのだ。だが、安心しろ我々も動いている。お前はバルドの娘を救出してくれるだけでいいのだ。頼んだぞ。アッシュ。』

父より

私は手紙を読み終えて、まだ狐に騙されたような気分から抜けだせなかった。真実はいったいどこにあるんだ。寄せては返す波の如く心は揺れ動いた。どうすべきか私に判断はつかなかった。ただ一つの解決方法はイエローランド事件の真相をもう一度丹念に調べ上げることだった。それまではどちらに協力するわけにもいかなかった。

「バルド。私はもう一度自分で真実とは何かを調べてみたい。時間が欲しいんだ」

バルドは深く頷きながら、少し考えると、黄金色の機械をポケットから取り出した。

「私はあなたのお父さんに大きな恩がある。あなたがそう考えてくれただけでも、来てよかった。今シャルレ・ガージマスがあなたたちの家族を助けだそうとしています。安心してください。彼ならきっとうまくいく。これを持って行ってください。脳内の埋めこまれたチップの送受信を妨害する装置です。彼らはあなたの思考がとまったことで、きっと我々に誘拐されたと思うでしょう。あなたが真実を見出し、我々の味方になってくれることを願います」

バルド・ゲール・アランは私に装置を渡して去っていった。私は一人、ふらふらと立ち上がるとイエローランドに再び行く決心を固めた。過去と向き合うことで、真実もみえてくるに違いない。

三章バルド・ゲール・アラン＜１０＞

廃島イエローランドはアーリア帝国のあるアリアナ大陸から北に行ったところにある。電車に揺られて数時間、私はイエローランドに一番近い港オテロッサに着いた。ここからさらに高速船に揺られて3時間の場所にイエローランドはある。しかし、今は近づけない。アーリア帝国によって、立ち入りが禁止されているためだ。違法な密航は一歩間違えば命さえ脅かしかねないことだった。しかし、私は行かなければならなかった。

港を眺めるとモーターのついた小型船、大きな漁船、ヨットなどが混雑気味に狭い港に並んでいる。人影はまばらだ。組織から預けられたお金が懐にはまだかなり残っていた。大型船は無理かもしれないが、小型船を買うぐらいのお金は持っていた。さっそく私は船を売りたがっている人間はいないか探して回った。しかし、余程の馬鹿者でもない限り生活に使う船を売る人間などいなかった。私は新しく船を買うことにした。

帰ってきた漁船に乗っていた暇そうな乗組員を見つけて聞いてみると、ちょうど明日オテロッサでボートショーがあるらしい。その場で望めば購入も可能というではないか。私は運が良かった。

とりあえず今日泊まるところだ。駅前のサンビーチホテルを選んだ。値段も手頃で清潔感が漂っている、相変わらず部屋は広いのは同じだが……。ホテルのボーイにイエローランドのことをさり気なく聞いてみる。

「イエローランドを観光したいんだが」

ボーイは物好きな客もいるものだと少し悩んだあげく、

「あの島は立ち入り禁止なのご存知ないんですか？もっとも今ものこる島民に週に一回定期便で食料やら雑誌やらが運ばれているらしいですがね」

と答えた。私は大いに興味をそそられたが、立ち入り禁止の島に

立ち入ることを許されるのはごく一部の人間にすぎないのであきらめかけた。しかし、偶然とは重なるものだ。ボーイはこんなことを言った。

「実は立ち入りを許された船の船長が一人で今まで荷物を運んでいたんですが、高齢になるとかで、荷物運びを探しているらしいですよ」

これに私は飛びつかないわけがなかった。宿泊の準備を済ませると、近くのショッピング施設で日用品などを買い揃えると、清潔な身なりにして船長に会いに行った。

家は港から少し外れた小高い丘にあった。人を寄せつけない寂しさが辺りに充満している。こんな丘を一週間に一度とはいえ、高齢で登るのは大変だろうと、私は船長に同情した。ノックをすると、みすぼらしいドアの隙間から片目に眼帯をした老人が顔をのぞかせた。

「何の用じゃ?」

私は手短かに用件を告げると、船長は私を家の中に招き入れた。家の中はわずかにスペースが来客用の椅子と老人用の椅子のまわりにできていた。それ以外は様々な物で乱雑に散らかっている。老人は初めて私に名乗った。『バルト・ミュラーニア』。それが彼の名前だった。

三章バルド・ゲール・アラン＜11＞

船長は私に2，3の質問をした。体は健康か？とかどこからきた？とかそんなことだった。私は自分の健康をアピールし、サンタアルベニアから来たと言って、船長を安心させた。船長はくたびれた顔で「明日、イエローランドに行かなければならないので、朝8時にこの家に来るように」と言った。私は深く素性を探られなかったのに安心した。

翌朝サンビーチホテルを出ると、太陽が身体を照らした。いよいよ、イエローランドに戻る時が来たのだ。否応なく胸が高鳴り、興奮してきた。生き残った住民に何か聞ければいいが…。なるべくなら目立つ行動は起こしたくないというのが今の偽りのない気持ちだった。丘の家に向かうと船長は昨日よりは幾分身なりをきちんとしていて、きれいに髭も剃っていた。家を出て、港に向かう私達は道中無言だった。船長は仕事さえしてくれれば後はどうでもいいという考えの持ち主かもしれなかった。

港に着くと、そこは相変わらず船が混雑していた。船長は港の外れのところにぽつんとつないである船へと私を連れていった。船は外壁は新しく塗られたものらしく、外見はきれいに見えた。しかし、船内をのぞくと錆ついた操縦室があった。どうやらかなり古い船を改装したものらしかった。私が船に乗って、珍しそうに見ていると船長が声をかける。

「おい。何してる。若造。積む荷物をあそこから取ってこい」

といって指差す方向には立派な青色の建物だ。青色はアーリア帝国では軍隊を意味する色だ。もしやと思い中に入ってみると、そこには軍服を着た、だらけきった男たちがいた。こんな辺境に飛ばされてやる気を失っているのは明らかだ。だが、私を見ると少し目つきを変えてじっと見つめた。

「何者だ。ここは軍の詰所だぞ。用のない者は入るな」

一番入り口近くにいた男が大声をあげる。私はバルト船長に頼まれたことを伝えると

「そうか。そうか。今日の配給品はこれだけだ」

といって、顎で示す方向をみると紙袋で包まれた荷物が数箱分置いてあった。私は数往復して、荷物を船に運び入れると詰所に戻り、「終わりました」と言うと軍人に怪しまれないように、そそくさと船に戻った。

バルト船長はすでに船のエンジンを動かしていて、私が飛び乗ると同時に

「よっしゃ。終わったか？」

とエンジン音に負けないくらいのがなり声で聞いてきた。私も目一杯の声を出して、終わったことを告げると、船は出港した。航海中も船長は無言だった。

数時間の後、イエローランドの島がみえてきた。私は船酔いで苦しかったが、もしかすると過去の記憶が苦しさを一層高めたのかもしれなかった。とにかく私はイエローランドの地に降り立った。

三章バルド・ゲール・アラン＜１２＞

イエローランドの大地は記憶にあるとおり短い草木に覆われていた。おいてあった荷台車に荷物を積み、船長とともに奥地へ入っていく。しばらく行くと曲がりくねっていた道の先に開けた土地、いや町が姿を現した。私は自分の住んでいた場所を記憶から必死に掘り起こそうとしたが、無駄だった。緑色の蔦に覆われた一軒の家に船長は入っていった。私は外で待たされた。町に人の姿は見えない。私は意を決して、荷台を置いて一軒の家に入ってみた。中には老女がいて、毛糸でセーターを編んでいるところだった。

「おばあさん。ちょっといいですか」

声をかけてみたが、返事がない。どうやら耳が遠いようだ。私は大声で話すことにした。

「おばあさん！！」

ようやく彼女は私に気づき、「ヒャ」と驚きの声をあげると、近くから眼鏡を取って、かけると私の顔をまじまじと見た。

「何者じゃ？お前さん」

「バルト船長の配給の助手だよ。ちょっと、この島に興味があってね。なんで、ここは立ち入り禁止にされているのか知りたいんだ」

彼女は口をもぐもぐさせると困ったように言った。

「それを話すことは禁じられておる。もう１０数年前の話じゃ。聞いても何も面白いことではない」

どうしても聞き出さなければならなかった。何かいい手はないかと考えていたが、ここは正直に話すほうがいいと思った。

「おばあさん！！私は秋の大殺戮の生き残りなんだ」

途端に老婆は怯えるように身を固めると、「ひぃ」と言った。そして、「帰ってくれ」と冷たく言い放った。私は仕方なく家を出た。外では船長が私を待っていた。声は外に筒抜けだったらしい。

「お前、秋の大殺戮の生き残りだったのか……」

しばしの沈黙の後に私が頷くと、船長はため息をついて、話し始めた。
「そうか。ならばお前は聞く権利があるかもしれんな。あの事件の真実を」
船長はどうやら秋の大殺戮について知っているようだった。
「アッシュとか言ったか。父母の名前は覚えておるか？」
「クリム・ダーデンスルトとファティアです。母は亡くなりました。秋の大殺戮で」
船長は驚きで目を見開き、またため息をついた。
「君の母親の墓地に行こう。そこで、話してやろう。あの事件の真相をな」
私たちは町外れの墓石のあるところまでやってきた。石には『戦いで命を落としたものたち』と書かれていた。ここが母の墓らしかった。

三章バルド・ゲール・アラン＜１３＞

「ここが、母の墓地ですか？」
私はバルト船長に問いただした。
「そうだ。アッシュ。ここにはあの大殺戮で命を失った人間たちが埋葬されている」
船長は重苦しく、言葉を選ぶようにゆっくりと答えた。手は小刻みに震え今にも倒れそうだ。大きく息を吐くと船長は話し始めた。
「この前亡くなったアーリア皇帝の兄にあたる人物に話はさかのぼる。当時、アーリア皇帝はその兄にあたる人物だった。世界に対する野心を隠そうともせず、様々な戦いに介入していった。そして、ようやく世界統一の兆しが見えた時、進んだ科学技術、いわゆる戦争技術だな、その基礎を担っていた科学者たちが戦争に協力することを拒んだ。彼らはゲルマンに技術を売り、そのお金で武器を買い皇帝に反旗を翻した。そして内戦は始まった。いくら進んだ科学技術を持っていたとはいえ、所詮科学者だった。戦争は下手くそきわまりなかった。ここまで言えばわかるね。科学者の拠点はイエローランドの都市プロメテウだったのだ。多くの島民が犠牲になって死んだ。そして、住民と科学者たちの間に不信感も生まれた。科学者は住民を次々に戦争をするための兵士に作り変えていったからだ。科学者自らが、人体改造されたとも聞いた。とにかく戦争は負け、イエローランドは呪われた地となった。私はただの住民だった。妻も娘も失った。そして今、島にのこることを許された人々に食料を届ける仕事をしている。せめて家族の霊が慰められるようにな。科学者たちはここを離れいずこかへ姿を消した。それから彼らは法外の貴族と呼ばれるようになった。君の父も科学者の一員だったのだよ。アッシュ。しかし、彼らは時の皇帝の命を奪うことには成功した。暗殺といわれている。そして、非戦論者の皇帝が帝位についた。しかし、最近亡くなった。そして、今！！再び野望を抱く皇帝が立

った。それが事の顛末だ」

そういうことだったのか。科学者たちはゲルマンにうまく進んだ科学技術を与えながら、また様々な方策で戦争を避けようと動いてきたのだ。ということは、母は死ぬべくして死んだのか？科学者の父を持ったから？私は誰を憎めばいいんだ。戦争を止めようと戦争を始めた科学者か？それとも戦争を起こそうとするアーリア皇帝か？何もかもが闇の淵に沈んでいく。私はふらふらと船長に促されて、イエローランドを離れた。

時間はまだある。私にできることは家族を救いだすことだ。ガルザニ叔父、カレラ叔母さん、サニチェエートまっていてくれ。せめて大事な人間だけでも守ってみせる。

三章バルド・ゲール・アラン＜１４＞

アーリア帝国は３００年の歴史をもつ大国だ。広大な領地は北から南まで数千キロに及ぶ。北部の先端の港町オテロッサから南部のトールキアまでは交通の便も悪く、２日かかった。私はその間、自分に蓄えられた知識を間近で聞いた現実と照らしあわせていた。なるほど、アーリア帝国の中では決して真実の歴史など出てくるはずもなかったか。私は今までなんと無駄な時間を過ごしてきたんだ。しかし、まだ遅くはない。叔父たちを説得して、戦争のない小さな土地に移り住もう。

叔父の家は相変わらず、いつもの場所にあった。ただ、叔父たちはいなかった。戸には銃弾のあとがみえる。何かあったに違いない。ここにいつまでもいるのはまずい。そう思った瞬間、背中に棒のようなものの感触があった。

「アッシュ。こんなところで何してるの？」

ガゼルの声だった。背中に銃を突きつけている。この女こそ、何故ここにいるのだ。私は思考を巡らせたが、どうやらバルド・ゲール・アランの件が片付いたので、ここにいるらしかった。私は努めて冷静にガゼルのほうを向こうとすると

「動かないで。あなたには拘束命令が出てるわ」

と甲高い声で叫んだ。私は背中にガゼルを感じながら言葉を選んだ。

「ガゼル。君は騙されているんだ。君の組織は法外の貴族を倒すための組織なんかじゃない。戦争を起こそうとする権力者の集まりなんだ」

少し空気が和んだ。ガゼルが笑ったらしい。声は聞こえないが感覚でそうと気づいた。

「馬鹿ね。そんなことをとうに知っているわよ。いい？今度の戦争で勝ってこそ、平和な世界がやってくるのよ」

「全て知っていて、手を貸していたというわけか。ガゼル！！」
「どうやらあなたとはもう違う道を歩み始めているみたいね。殺すなとはいわれているけど、ここで殺すべきかしらね。最初みたときからあなたは我々にとって重大な脅威になると感じていたわ」
ガゼルは銃の引き金を引こうと力をこめた瞬間！鳥が大声をあげて飛び立った。一瞬、ひるんだガゼルに、私は振り向くと銃を奪おうとガゼルの手を掴んだ。銃口は天空に向いている。二人はしばし睨み合った。争っている様子を見て、見物人が集まりだしていた。
「おい。何してる。警察に通報するぞ」
近くの住民がざわざわと声を出す。その中の一人の力自慢の若者が銃を奪い取る。
ガゼルは軽く、咳払いのような声を喉の奥で出すと、息をきらして私を睨んだ。
「とにかく、あなたのことは組織に伝えておくわ。それと、あなたの叔父さんだけどね。死んだわよ」
腹が立った私はガゼルに掴みかかろうとしたが、若者に静止される。ガゼルは鋭い目つきのまま立ち去った。
「あんたアッシュかい？」
ふいに群集の中に見知った顔があった。隣に住むおばさんだ。
「おばさん。家族は無事ですか？」
おばさんは言いにくそうに顎に手をあてて答えた。
「ガルザニさんは亡くなったのよ。何か事件に巻き込まれているのね？カレラとサニチェエートは行方不明になってるわ。昨晩ここで撃ち合いがあったのよ。警察に通報しても来たのが一時間後なのよ。まったく近頃の警察は！」
カレラおばさんとサニチェエートはどこにいったのだろう。再びバルト・ゲール・アランに接触する必要があった。

三章バルド・ゲール・アラン＜15＞

私に残された唯一の手がかりは、この黄金色の機械だった。これは一体どこで作られたものだろう？ふと後ろの平らな部分を見ると何やら文字が刻んである。傷のようにも見えて後から鋭い刃物によって刻まれた文字らしかった。

『マカチュ遺跡』

とそこには記されていた。マカチュ遺跡といえば、アーリア帝国の古代アーリア人の住んでいた発祥の地とされる遺跡だ。広大な城跡と深いホリによって作られた遺跡群だ。バルガルガルアス城と城下町が保存され、今も訪れる観光客は多いと聞いている。

ホテルの一室で考えていると猛烈な眠気が襲ってきた。よし、明日マカチュ遺跡に行ってみよう。思考が切れると私は眠りに落ちた。

次の朝、大陸横断鉄道で東のマカチュへ向かった。人がとても多かった。人々の話を聞いてみると皇帝の即位式がここで行われるのが習わしになっているようだ。もしかするとバルド・ゲール・アランは皇帝の命を狙ってやってくるかもしれない。私は明日の昼に即位式が行われると聞いて、それまで町を歩いてみることにした。すると警官に呼び止められた。

「あなた。アッシュ・クロフォードさんですか？」

「はい。そうですが」

答えると警官はちょっとついてきてほしいと言った。二人組の警官だった。

警察署につくと、暗い部屋に通された。中には淡い茶色の服を着た少し曲がった鼻の男が立っていた。

「おうおう。アッシュくんだね。まあかけたまえ」

私は何の用で呼ばれたか見当がつかなかった。

「君にはガルザニ・クロフォードの殺害容疑がかかっている」

なんだって。私がガルザニ叔父さんを殺した?何馬鹿なことを。しまった。これは奴らの計略だったのだ。警察にまで奴らの力が及んでいたのか。

「身に覚えはありません」

私は潔白を主張した。

「しかし、君。逮捕状がでているよ?」

肉食獣の目で私を見つめる男。

「知りません」

「困ったね。取りあえず、君はここから出られないよ」

私は鉄の棒で遮られた部屋に入れられた。中には薄暗い電灯がついているだけだった。明日までに出なければならないというのになんてことだ。私は唇を噛んだ。

三章バルド・ゲール・アラン＜１６＞

閉じ込められた部屋で過ごす夜は憂鬱だった。サニチェエートは今どうしているだろう。そして、父は今どこにいるのだろう?今も父を恨む気持ちは変わらない。何故家族の幸せを第一に考えてくれなかったのか。アーリア帝国に歯向かわなければ、こんなに人が死ぬことはなかったかもしれない。もっとも、世界戦争が起こればどうなるかはわからないのだが。私は戦争がどういうものか知らない世代だった。戦争がどういうものか想像がつかなかった。ただ、暗いとても殺伐としたイメージだけがあった。

夜行性の鳥の鳴き声がする。どうしたらここから出られるだろうか。私は薄明かりに照らされた部屋の中で自分の力の限り考えつくした。その時、あの声が聞こえてきた。灰色の男だ。そうか、黄金色の機械を警官に取られてしまったのだから、当然といえば当然だった。脳の中にこびりついた苔のようにそれは違和感をともなってやってきたのだ。

（（アッシュ。私は君を評価している。今ならまだ間に合う。我々と共に法外の貴族を倒そう。君があいつらから何を聞いたか知らないが、それらは全て虚言だ。目を覚ますんだ））

『灰色の男か。もうお前たちの味方も法外の貴族の味方もしない。家族と静かに暮らしたいだけだ』

私は自ら踏み入れたこの世界に都合よく別れを告げる心持ちだった。だが、最初に復讐を決めた時から決して引き返せないところまで来ていたのだ。初めてそれを知って、ガルザニ叔父の言葉の本当の意味を知った。古代の格言がある。「戦いに一度足を踏み入れたなら決して引き返すな。引き返した時、後ろから撃たれる」まさにこの通りの状況になっていたのだ。灰色の男が私の離脱を、逃げを許すはずがなかった。

（（アッシュ。それはできない相談だよ。そして、君の家族の身柄

は我々の元にない。法外の貴族の仕業だ。やつらから家族を取り戻すために、我々と共に戦おう）」

ふいにそこで、脳に響く通信が途絶えた。一体どうしたことだろうと考えたが、灰色の男に何か起こったか、もしくは再び電波妨害装置を持った人間が近くにいるかだ。

「入れ！！」

警官の怒声がする。隣の部屋に誰かが入れられたらしい。再び警官が去って辺りは静寂に包まれる。とそこに鉄格子の隙間から鍵らしきものを持った手が隣の部屋から伸びているではないか。

「早く！！この鍵を使って逃げてください」

どうやら女の声らしかった。声の主のことはさておき、このチャンスに私はすぐさま反応し鍵をひっつかむと急いで鉄格子の鍵を開けると、外に出た。女の顔を見ようとしたが薄暗くてよく見えない。私は全ての部屋の鍵を開けると、一斉に囚人たちは警察署を出ようと駈け出した。私と女もあとに続く。警官は少なく、既に囚人たちに縛られていた。

私と女は悠々と外に出た。しかし、この女何者だろうか。

三章バルド・ゲール・アラン＜17＞

しばらくして私たちは立ち止まり電灯できらびやかに照らされたホテルに外を覆う闇から逃れるように入った。どちらからというわけでもない。いつ死ぬかともわからないこの身にあっての情事はとても楽しいものだった。私の経験人数は決して多くはない。2，3の言い寄ってきた女性と束の間の恋を楽しんだことはある。性行為自体が楽しいものであると今日まで思わなかった。それ程女性のテクニックはずば抜けていたのか、それとも私が心の底から女を愛してしまったのか。私は自分を客観的に見つめることができないでいた。明るい部屋でみる女の容姿はまるでラテン系の女優アンナ・クルニセナに似ていた。私はその女優のスキャンダラスな一面は好きになれなかったが、容姿だけは好ましく思っていた。ただ一つ女優と女の違う所は腹の傷だった。彼女は大きな傷跡が腹にざっくりとできていたのだ。私は何も聞かなかった。彼女も何も言わなかった。星は夜に燦々と輝き、やがて、消えていく。彼女もやがて消えて行くのだろうか。そんな感傷が私を襲った。

「君の名前は？」と私がベッドの中で聞くと「レンナ」とだけ軽く答えた。情事の間の会話はそれだけだった。二人は激しく朝まで求めあった。

私の中で女に対する信頼も不信感もなかった。ただ、味方だと思っていた。だから助けてくれたのだと。

朝二人はホテルを出る。料金は女が払った。私は何も持っていなかったからだが、軽く屈辱を感じた。これから私は彼女に連れられてどこに行くのだろう？ふと、そんな疑問に心を突き動かされた私はたまらず彼女に聞いてみたが、レンナはまるで言葉がわからない稚児のように柔らかに微笑むだけだった。

朝早くの遺跡の周りには早くも観光客が姿を現していた。昨日の脱走劇が嘘のように警察の姿はなかった。通りを3回曲がって狭い

道に入ると、観光客に決してみせない。マカチュの町に住む人々の貧しい暮らしが見えてきた。子供が井戸に水を汲みに来ている。どうやら学校には行っていないらしい。レンナは私が子供たちを哀をこめて見るのに気づいたらしい。まるで、人形のように押し黙っていた彼女は強い語気で私に言った。

「ここの人々は進んで今もこの暮らしを続けているの。文明は彼らにとって毒なのよ。もっとも最近では若い子供たちは都会に行きたがるみたいだけども……。だから憐れむのは間違いよ」

「わからないよ。こんな生活の何が楽しいんだろう」

「あなたにはわからないかもしれないわね」

彼女は今度は私に子供を見るような視線を向けた。たしかに文明の科学の力を信じてきた私にとって、彼らの行為は実に時代錯誤なものだったし、彼らの無力さはよくわかった。

「あなたのお父さんは尊敬しているけれども、あなたは力の信奉者のようね」

レンナは悲しそうに私を見た。そして、その時目的地に着いたらしかった。ドアを開けて彼女が中に入るように促す。

家の中にはバルド・ゲール・アランが私を待っていた。顔は変わらないが、服装はこの土地の人々に似た服を着こなしていた。

「ようこそアッシュくん」

三章バルド・ゲール・アラン＜１８＞

バルド・ゲール・アランは相変わらず紳士的な男だった。私に椅子を進めるとレンナに軽く目で合図した。レンナは少し戸惑いを見せたが、バルドの指示に従って部屋を出た。

「彼女はなかなか優秀でしょう？」

レンナが去るとバルドは世間話のようにきりだした。

「ああ。助かったよ」

これほど何もできない自分をもはや叱咤する気も失せていたので、素直に認めると急に悲しみが胸を駆け抜けた。そして、もはや戦うことを諦めた男の成れの果てが自分だと感じた。

「私はもう戦えない。家族と静かに暮らしたいんだ」

バルドは目を真ん丸くして驚きの表情をすると少し考えこんだ。

「アッシュくん。君の復讐心はそのまま、アーリア帝国に向かないかね？」

「向かない。当時の皇帝も死んでいるし、もうこれ以上自分のできることはないと思い始めている」

「確かに君は何もできないかもしれない。ヘマもやらかす。段取りも悪い。今や君はアーリア帝国のお尋ね者です。だが、何事も向こう見ずにやり遂げる力には感服していたのですがね。見込み違いだったようですね。残念です。とりあえず、革命結社からとりつけられた発信機は近々手術で頭から取り去りましょう。我々の本拠地にあなたを案内しますよ。彼らのことを我々は“法内の悪魔”と呼んでいます。どうやら法外の革命結社は我々の見込みどおり法内の悪魔の実働部隊のようです。彼らも我々に対抗するためになりふりかまってられなくなったのでしょう。新たな名称を考えなければなりませんね。皇帝以外は表だって彼らの組織にどんな人物がいるのかはみえていません。我々は諜報機関ではありませんからね。そこもガルド・イニエーブが探っていたはずなのですが、死んでしまった。

あなたを責めているのではありません。我々もあなただと気づいたのはグライアから連絡をもらってからでしたから」

バルドは一気にここまで言ってから、間を置いた。以前から聞きたかった事を聞こうと私は重い口を開いた。

「グライアは何故死んだんだ?」

バルドは後ろを向いて私に背中をみせた。彼の背中は思ったより小さくみえた。

「何故?ええ。疑問でしょうね。私も疑問です。彼女がこの戦いに疲れたのか、それとも若さの代償として持った病が苦しかったのか、私にはわかりません。ただ一つ言えるのはグライアはランムルヒをあなたに託したということです」

「どういう意味なんだ。以前、法外の革命結社の女からも言われた」

「それは、あなたが考えて答えを出すしかないのです。ランムルヒは無事ですよ。たすけだすことができました。あなたの家族と一緒にいます。残念ながらガルザニさんはたすけだせませんでしたが」

少し暗い顔つきをしたバルドは、気をとりなおして、これから皇帝を襲撃する準備があると言って別の部屋に移った。私は明日、法外の貴族の本拠地に行くことになると言い残して。

三章バルド・ゲール・アラン＜19＞

彼らの皇帝暗殺が失敗したのは必然であった。唯一進んだ科学の力によって、いつでも、暗殺という手段をとれるという脅しももはや通用しなくなったのだ。時代は動いていた。それとともに私の心も揺れるようになった。レンナは暗殺失敗の夜、豪快に酒を飲んで私の部屋にやってきた。酒臭い彼女を私は受け入れはしたが、この女性に人生を支配される気はまったくなかった。つまり、この日で私と彼女の二日間の蜜月は終わるはずだったのだ。しかし、そうはならなかった。バルド・ゲール・アランは「レンナに本拠地に連れていってもらう」と言ったからだ。バルド・ゲール・アランは一人で皇帝暗殺の計画を新たに練るつもりらしかった。「一人で大丈夫なのか？」と聞くとバルドは肩を叩いて「心配するな。君は何も考えずに束の間の余生を楽しみたまえ」と朗らかに語った。

レンナはマカチュの伝統的な服装らしいアカルアという虹色のドレスを着ていた。聞くところによるとマカチュの王族の物らしい。彼女が何故警察に執拗に追われていないのかも、王族だからだと私は気づいた。バルドは彼女が古代アーリアの王族の血を引いているといった。マカチュの父であるカニシュカが戴冠式の時に皇帝に冠を授ける役目を担っていたようだ。レンナはマカチュでは少々の乱暴は私には許されるのよ、とだけ話した。バルドは私たちが隠れ家を去る間際まで熱心に如何に今回の戦いが重要か論じていた。

レンナと共に出発した私は世間話を彼女とした。学生生活のこと、小さい頃の思い出、ただし未来のことはお互いに意識的に避けていた。私は語るべき未来がもし、戦争があった場合、そしてアーリア帝国が勝利した場合暗いものになると感じ、悲しくなった。カレラおばさんはともかくサニチェエートやランムルヒを一生外の世界を知らないで小さな辺境の地で隠れるように過ごさせるのはやりきれなかった。そして、彼女たちが不遇な生活を是とするかも私にとっ

て心配のタネだった。つまりは全ては私の絵空事なのではないかと考え始めたのだ。もし、彼女たちが戦いたいといえば？いや、ありえない。私は必死にその考えを打ち消した。

鉄道からマカチュ空港で１００人用の中型の飛行機に乗った。向かう先は予想通りゲルマンだった。レンナは私のパスポートの偽造されたものを空港の職員にみせていた。

いざゲルマンへ。再び異国の地を踏むことになった私は家族との再会を楽しみにしながらも、得体の知れない不安に押し潰されそうであった。レンナは機内で私を心配して、そっと手を握ってくれた。情けなさとどうしようもなさに私はただ脅えているだけだった。

三章バルド・ゲール・アラン＜２０＞

ゲルマンのベアトリーチェ空港は以前と少しも変わっていなかった。私は前と同じ景色に安心した。そして、ようやく一息つけるなと思った。だが、レンナは相変わらず厳しい顔だ。私はゲルマンを味方の国と思っていたがそうではないらしい。レンナは穏健派が今は政権を握っているからいいが、そうでなければ我々の立場はとても危ういものになると語った。

ゲルマン国営鉄道の駅に着くとレンナは切符を買った。国際公用語であるジャスール語はゲルマンの国の第一外国語であることも手伝ってレンナはやり取りに困っている様子はなかった。蝿がレンナの肩に止まったのに気づいたので、レンナの肩を軽く叩くと蝿は去っていた。レンナはこちらを振り向いた。「虫がいたから払っただけさ」と言うと、明るくにっこりと微笑んだ。

ゲルマンの鉄道はホームが低く列車に乗るには登らなければならなかった。明るい朱色の車両にはゲルマン神話の神々が描かれているとレンナが教えてくれた。

ゲルマンで初めてあったガゼルのことを思い出した。彼女は世界がアーリア帝国によって統一されれば何もかも良くなると本気で思っているのだろうか。そして、ジョベルジアは元気だろうか。身近にいるときはどうしようもなく苛々させられた彼の言動も今となっては寂しさを増した。

「あなたの手術は本部とは別のところで行われるわ」

気の毒そうに私の頭を見つめるレンナは中に入った電子チップを取り出したい欲求に抵抗しているようなそぶりをみせた。私は視線を逸すと、窓の外を眺めた。広がる田園風景はこの国がとても豊かな国であることを理解させたが、同時に医療分野での技術はどうなのだろうと不安になったので、レンナに聞いてみた。

「あなたの手術は私たちの組織のドクターと呼ばれる機械によって

行われるわ。心配しないで」
「機械？」
思わず聞き返すと拳を握りしめた。不安感だけが増していく。
「それとあなたの体の検査も同時に行われるわ。何か気づいたことはない？」
「気づいたことか。それなら自分の体の傷が治るスピードがとても早くなっている」
「そう。それもみてもらいましょう。そっちは科学者の手によってね」
「機械でなくてほっとするよ」
私が言うと、レンナは口に手をあてて笑った。
「バーデン～。バーデン～」
「さあ。着いたわ。降りるわよ」
レンナは立ち上がった。私も立ち上がると、列車を降りた。

三章バルド・ゲール・アラン＜２１＞

バーデン自治区にやってきた。ここは法外の貴族のためにゲルマンの国が貸した土地だという。赤い主色に黄色の線が入ったタクシーに乗ると運転手はやけに愛想が良かった。ドアの開け閉めもやってくれるし空港で買った家族への少しばかりのお土産も手際よくトランクに詰めていった。車がエンジン音を立てて走りだすと

「あなたこの車タクシーだと思ってるでしょ？」

とレンナが悪戯っぽい顔で声をかけてきた。「その通りじゃないか」と答えると、下品にも舌をチッチッチと鳴らし「違うのよね。それが」と言った。じゃあなんなんだとばかりに相手に言葉の意図を理解できないでいると、「彼も私たちの仲間よ」と言った。

すると運転手の男が待ってましたとばかりに喋りだす。

「そういうことだよ。青年。ここはイエローランドを脱出した科学者たちと賛同した住民たちの新しい土地だ」

一国の中に完全に別の国を作っているようなものらしかった。

「ここには荒地以外何もなかったのよ。それを私たちが二〇年余りでそこそこの町以上のものを作ったんだから、すごいでしょう？」

「そういうことだ。青年。なんといったかな。そう。アッシュだ。アッシュ。参加する住民は世界中からやってくる。もちろん我々がスカウトして連れてきたりしているのだ。中には世間のままの噂を信じてやってきた凶悪な犯罪者もいるがな。アーリア帝国の一〇〇〇年囚のシャルレ・ガージマスは有名だよな」

レンナの助けを借りながら運転士は楽しそうに話した。

病院に着いた。運転士は荷物は新しい住居になるところに置いておくといったので手ぶらで中に入った。レンナも案内のためについてきた。

数人の医者や看護師にさっそく体を調べられた。皮膚を少し傷つけて、傷の治りの早いのを確認すると何か得体の知れない注射を腕

に射った。すると私の意識は途切れていく。レンナが手を握って
「大丈夫よ。安心して、休むのよ」
と励ました。体が眠気に耐えられず診察台に倒れた。

目が覚めると、すっかり事が済んでいた。レンナに「おめでとう」と言われ、何か異常がないか確かめるように観察された。脳の中の異物はなくなったために頭が軽く感じられた。医師のバルザスがやってきて、説明を始めた。説明は二〇分程続いたが、よくわからなかった。とにかく、一刻も早く家族に会いたかったせいもあるのかもしれない。そして、病院の暗い廊下をレンナと並んで歩き外に出た。

「あなたの新しい家までは歩いていけるわ。いきましょう」
歩きだす彼女の後を追ってついていくと、走ってくる子供の姿がみえた。
「アッシュー!!」
ランムルヒだ!!気づいた瞬間、彼女が飛びついてきた。バランスを崩しながらも受け止める。遠くではサニチェエートとカレラおばさんの姿がみえた。
ああ。家族の元に帰ってきたんだ。安堵感が体に満ちた。

三章バルド・ゲール・アラン＜22＞

それからの一週間は最高だった。映画館、喫茶店、遊園地ありとあらゆる娯楽を楽しんだ。もちろん家族と一緒だ。そして、ガルザニ叔父の盛大な葬儀を行った。ランムルヒも参加してくれたのは喜ばしいことだった。レンナとサニチェエートはすぐに親友になった。ランムルヒはレンナに最初は反抗していたが、だんだんと仲良くなって、ついにレンナの中に美徳を見出したらしかった。晴れ晴れとした気持ちだったが、ただ一つ気になることがあった。父のことだ。

父はゲルマンにはいないと聞かされていた。なんとか会おうと試みたが、レンナをとおして断られた。だが、たしかに父は生きているらしい。そして町の人々みんなに好かれているらしかった。町にひとたび買い物に行けば、歩いている人々は足を止めて珍しそうに見て、話しかけてクリム・ダーデンスルトの息子とわかると握手を求めてくるのだった。

一週間が経った。ついに恐れていたことが起きた。そして、町は陰気な空気に包まれた。戦争が始まったのだ。アーリア帝国がどちらの同盟にも属さない第三国同盟諸国を攻撃したことから始まり、ゲルマンのアーリア帝国への宣戦布告。アーリア帝国の宣戦布告が続いた。二つの大国はついに、衝突を開始した。歴史の必然か、はたまた人為的故意によるものなのか。判断はつかない。ただ、胸の中で自分が安穏に暮らしていることが恥ずかしく思える気持ちがあった。

ゲルマンは戦時下だった。そして、バーデンの町も例外ではない。戦線ははるか海上もしくは第三国に未だにとどまっていたが、まったく余談を許さない戦況だった。そして、日々の戦況は日に日に悪化していった。レンナはある日「ついさっきゲルマンに我々が持っている全技術を提供することを決めたわ」と告げた。法外の貴族の伝説の終わりであった。超人的人間が少数な時代は終わったのだ。

皇帝暗殺に失敗してバーデン自治区に帰ってきていたバルド・ゲール・アランに誘われて高台で夕日を見ていた。
「アッシュくん。我々も困り果てています。人が人である時代は終わろうとしているからです。まさに人間が用いてきた科学の力によってです」
バルドは悲しそうに言った。頬からは涙の線がすーっと引いた。
「どうか、この苦しみを味わう人間が自分だけでいいと信じてやってきました。しかし叶わなかった。無念です」
バルドにどんな超人的力が備わっているかは知らなかったが、バルドは“苦しみ”という言葉を使った。疑念の顔つきをすると悲しそうに頭をふった。
「物事には代償があります。グライアが死んだように、人間の体を急激に弄ぶことを神はお許しにならなかったのです。そして、私は人間として大事な力を失いました」
「大事な力？」
聞き返すと、彼は力なく「肉親には決して私の姿が見えないのです」と言った。
と、そこに遅いのを心配したランムルヒがやってきた。
「アッシュ。一人で何してるの？」
「ランムルヒ。お前にはこの人が見えないのかい？」
「何のこと？アッシュったら何いってるの？馬鹿みたい」
どうやら本当のようだった。ランムルヒにはバルドの姿が見えないのだ。そして、声さえ届いていないらしい。バルドはそっとランムルヒを見ていた。もう泣いてはいなかった。

三章バルド・ゲール・アラン＜２３＞

バルドとの再会から数日が経った。バーデン自治区を出歩く人々は日々減っていった。ゲルマンの穏健派内閣が倒れ、戦時内閣が新たに組織されたことを耳にした。バーデン自治区は解体されて、研究所が作られるとレンナは散歩の時に話した。

「もうすぐ私たちはここにいられなくなるわ。どこか行くあてはあるの？アッシュ？私もそろそろ休暇はおしまい仕事に戻ることになるわ」

ついにこの日が来てしまった。短い幸福だった。さて、どうするべきか？

「組織は世話をしてくれないのか？」

聞いてみると、レンナは笑った。

「甘えないで、組織ができるのはここまでよ。組織はゲルマンの科学部隊の一機関に組み入れられるわ。ゲルマンのどこでも住める手配はしてあるわ。ただし、戦況はアーリア帝国が優勢よ。ゲルマンもどうなることやら」

私たち家族とランムルヒはゲルマンの首都アルベリンにやってきた。組織から渡された手切れ金のようなもので住居を借りると住みついた。しかし、時はアーリア帝国からの人間には厳しい時だった。法外の貴族の組織もその力を失い、私たちは苦しい日々を送った。

そして2年の月日が過ぎた。カレラおばさんは病気のため亡くなり、サニチェエートとランムルヒとの生活が始まった。そして、いよいよ私にも徴兵の時がやってきた。科学技術部兵器人間製造部というところから呼び出しがきた。久しぶりに会ったレンナはやつれて見えた。私はバーデン市となったかつての自治区にやってきた。

「アッシュ。あなたには平和に生活してほしかったわ。でも、これも命令なのよ。あなたのお父さんからのね。それというのもちょっ

としたわけがあるのよ。あなたでなければならないわけが。わかってくれるわね」

レンナは申し訳なさそうに言葉を選ぶ。

父に必要とされることは戸惑いがあった。しかし、選ぶ道はなかった。手術台に寝かされ改造を受けた。これは前線に配備される兵器になることを意味していた。

シャルレ・ガージマス＜1＞

起き上がると体が重かった。レンナが満足そうに見ている。体は至るところが機械化されていて、機械でない部分を探すのが難しかった。足を触ると、その金属の冷たさにぞっとした。レンナは私の数少ない生身の部分である手に口づけをしてから言った。

「あなたは未来を予測する力を与えられています。未来を見通すことができるのは、あなたとあなたのお父さんの二人だけです。それは、この未来予測器官があなたのお父さんに適用することを目指して作られたからです。そして、その代償は生身の体を失うことでした。その他にも代償はあるかもしれません。しかし、あなたの父親から聞いたのはそれだけです。これから、あなたは私と戦場へ行ってもらいます。そこで、未来を見通して欲しいのです」

未来予測だと??そんなことが可能なのか?そしてその器官が私に備わっているというのは信じられなかった。ただ、そのことを考えた時に脳がゴトリと音を立てて動いた気がした。口は滑らかに動くようだった。ここも生身だった。私はレンナに尋ねた。

「戦況はどうなんだ?未来を予測して、勝てるのか?」

「あなたのお父さん、クリム・ダーデンスルトは今全世界にアンテナを張って情報を脳に入れながらゲルマンの首都で予測してるわ。そのおかげもあって、ゲルマン同盟は互角に戦えているわ」

病院を出ると、軍用のヘリコプターが通りに止まっていた。サニチェエートやランムルヒの姿もあった。二人は変わり果てた姿の私を見て、気味悪そうに見ていた。心配そうにといったほうが正しいのかもしれないが、今の私にそれを見分ける余裕はなかった。

ヘリコプターは出発し、ゲルマンの首都アルベリンの空港に降り立った。そこから東に1万キロの戦場ジャポンへと私は向かうことになった。

機械の体はほとんど睡眠を欲しなかった。常に興奮状態で覚醒し

ているようだった。レンナは機内で、私に戦場の状況を聞かせている。

機内でその他にも意外な人物と出会ったシャルレ・ガージマスである。

「この人がサニチェエートとカレラさんを助けだしてくれたのよ」

ざらざらした肌質にきめ細やかな軍服を着て、勲章をぶら下げている男は控えめに一礼すると手をさしだした。握り返すと、口元にわずかな微笑もみせないで、そのまま手を引っ込めた。これが、アーリア帝国で懲役４０００年の判決を受けた人間か。よくよく観察してみると普通の人間にしかみえない。だが、そこにはおそるべき力が潜んでいることが、雰囲気から察することができた。顔の割には高い声でガージマスは話しだした。

「クリムの若い頃にそっくりだ。やはり親子だな。私は純粋な生物兵器だ。もし、君の未来予測によって、敗戦が濃厚とわかれば体の中で調合したバクテリアをばらまく。そして、敵軍を殲滅する」

何故彼がここにいるのかはわかった。だが、ジャポンというのは島国ではないのか？人も住んでいるのではないか？もし、殲滅作戦にかかればどうなるのだ。それに対する答えはガージマスは持たなかった。ただ、厳しい顔つきで首を振った。

シャルレ・ガージマス＜2＞

ジャポンに着いた私たちは飛行機のタラップから降り立ち滑走路のコンクリートに足をつけた。しかし、足に今までのような感触はない。鼻はまだ効くらしく、どこからか何かが焦げるような匂いがする。「うっ」と声がする。生身の人間には臭いは強烈らしく、レンナは気分が悪そうにハンカチを口元付近にあてている。シャルレ・ガージマスも悪臭に顔をしかめている。「何の臭いだ?」そう呟く彼の声が聞こえた。

ゲルマン同盟軍の指揮官が行進するように律儀に歩いてやってきた。イソムラというらしい。周りの者からイソムラ隊長と言われている。初めて会った私たちにイソムラはいきなりマシンガンを撃つ。言葉の銃弾は私たちに降り注ぐ。

「いやー。よくおいでになられました。戦況は悪いのですよ。いや、実に悪いのです。これが……。つい昨日もかなりの人数が死にましてな。今火葬をしているのですよ。まったく、人間というのは焼くと、これほど悪臭なのですな。まさに、在世の罪を空気中に放つがごとくですな。はっはっは。あなた方がゲルマンから送られてきた最新兵器の改造人間というわけですな。実に頼もしい。それにしても向こうの技術力は凄まじいですな。勝てる気がしませんよ。もっともあなたたちがいればそれは可能になるのでしょうがね。相手の兵士を拷問にかけて調べてみたのですが、皆目使い方に関する記憶を忘れているみたいでしてな。つい数時間前まで使って、我々の仲間を皆殺しにしていたやつがですよ?信じられますかな?」

最初、この男は気が触れているのかと思った。しかし、こういう人間らしかった。拷問は国際条約で禁止されていることを伝えると。「ほう。それは知りませんでしたな」と明らかに嘘をつく。果たしてゲルマン同盟は本当に私たちが命を賭けて勝利に導くに値するものなのだろうか?シャルレ・ガージマスが私の肩に手を置くと、イ

ソムラに本部まで連れていくように短く簡潔に述べた。
本部は大きな銀色の屋根が特徴的な高い建物だった。最も高いといっても3階までしかなかったのだが。ただ、他には何も高いものが見当たらない地域だったので、余計に感じたのだろう。こんな高い場所が攻撃を受けないということは我が軍は制空権を握っているのだろう。しかし、イソムラの答えは意外なものだった。
「なあに。ここは青十字の国際救援部隊がいるところと敵には伝わってますよ。奴らも無茶はせんでしょう。それに、3階にはそれらしき、人間の死体を置いてありますので、何かあれば情報戦に役立つでしょう。アーリア帝国で内乱でもおこるといいですがね。はっはっは。さあ、行きましょう。本部は地下です」
地下にエレベーターで降りるとそこには様々な最新機器が備えられた場所らしく多くの人々が忙しそうに動き回っていた。
「あ！！隊長。３４２部隊全滅です」
「なにー。あのくずども。こんなわずかな時間ももちこたえられんのか。まったく。困ったもんですな」
こちらに苦笑いをなげかけるイソムラを私は無視した。怒りがわいたからだ。仲間が死んだというのになんという言い方だ。彼は相手がユーモアのわからない、つまらない男と思ったのだろう。きわめて事務的な態度になり、私に戦況報告書を渡した。

シャルレ・ガージマス＜3＞

戦況報告書を読んだ私にはどうすればいいかわからなかった。シャルレ・ガージマスは寝れば夢となって現れるとアドバイスしてくれた。その晩私は地下の本部の一室で、この戦場の運命を決める未来予知を行った。

ぼんやりとした明かりが見える。しかし、明かりは遠のいていく。ふいにイソムラの死体が現れる。その死骸を鳥がついばんでいる。十字架がかけられ、イソムラだったものは吊るされていく。あたりには緑があった景色が、今は何もない。飛行機よりも高く。それでいて、雲に遮られずに大地を見ることができた。島全体はやってきた時に見た美しい緑ではなく、地面の露出した黄土色をしていた。シャルレ・ガージマスがいつの間にか、そばに立っている。上空にいるはずなのに確かに横いいる。そして私に言う。「仕方がない。こうまでしなければ敵の戦力を削げない」レンナは私の内に秘めた情欲を表していると感じられた。危険だ。誰かが叫んだ。あの女はやがて身の破滅を招く。そんなセリフを誰かが言った。

そして目が覚めた。夢は夢でも私の脳裏にはっきりと刻まれていたので、あとはイソムラたちに話すだけだった。ただし、具体的なことは避けて、ただ「ゲルマン同盟はジャポンで負けた」と言った。

イソムラは「しかたありませんな」と言って、ゲルマンの首都アルベリンから届いた命令書を良く読み、なるほどと頷いてから私たちに向きなおった。

「輸送部隊がやってくるそうです。ただし、制空権は保証できないとありますな。一刻も早く脱出しなければなりませんな。それでは失礼しますよ」

と言って脱出の準備を始めた。そして、ついに、シャルレ・ガージマスは自らの毒をばらまいた。彼は一人後からヘリコプターに乗ってジャポンの近隣の国カムにやってくるはずだった。レンナは震えていた。「恐ろしいことよ。シャルレ・ガージマスを使うなんて」と声が漏れた。

翌朝、ガージマスはカムにやってきた。カムはアルバニ教の聖地でもある。中立地帯だった

シャルレ・ガージマス＜4＞

カムからゲルマンに戻った私たちは自軍が劣勢であることを知らされた。もはや戦争を終わらせるには降伏が最良の道だと私には思えた。ゲルマン国軍本部、通称オーディンゲートに足を踏み入れると、建物の内部では血気盛んに兵士たちが作業をこなしていた。

「東方戦況はどうなっている！！」

「西部方面部隊は撤退できたか？」

怒号が飛び交う中、私とシャルレ・ガージマス、そしてレンナはエレベーターに乗って上へ上へと進んだ。

同盟軍最高位将軍ジルメルの部屋には彼ともう一人の人間がいた。軍服を着たその顔に見覚えがあるような気もしたが、はっきりと告げられるまでは父だとは気づかなかった。

クリム・ダーデンスルトは冷たい目でこちらに一瞥をくれると「よく来たな」と言った。私はジルメル将軍の期待していたような感動の再会を演出できなかった。父にどのように接すればいいかわからなかったからだ。しかし、聞きたいことは山ほどあった。

「何故母を見捨てたのです」

思わず口から激しい言葉が飛び出した。クリムは一瞬硬直したように固まると厳しい顔つきでこちらを向いた。

「アッシュ。個人的な話は控えろ。将軍の前だぞ」

将軍は場に流れた険悪な空気を引き取るように私と父の間に入ると、私に席を勧めた。

「アッシュくん。お父さんとつもる話しもあるだろう。しかし、今は戦争の見込みについて話しをしているところだ。何しろアッシュくんがジャポンで見たとおり戦況は厳しい。未だに我が軍は旧式の装備で戦っているからなのもあるが、まったく君のお父さんたちの組織を活かしきれていないのだよ。何しろ大規模な人体改造をするにはまったく人手がたりないのだ。何人かの優秀なエリートは既に

改造してあるが、どうしても未来予測システムは特定の遺伝子を持つものでないと無理らしいのだよ。副作用の効果が大きくてね。初めて聞く顔をしているね。そう。未来予測システムは同時に精神の破壊ももたらすのだよ。もし、君たち親子のもつＧＤＺ遺伝子がなければ精神は墓場行きってわけだよ」

この言葉をクリム・ダーデンスルトがひきとって続けた。

「未来予測システムは戦術を考える上で有利にはなるが、どうしても決定打になりえない。私はさらに未来予測システムを進化させた未来改変システムを考えている」

私は父たちの夢というか妄執に腹が立った。こうしている間にも人は死んでいるのだ。まるでその苦しみを理解しない男たちに怒りが湧いてきた。兵士たちを人形もしくは人体実験の被験体と思っているようだった。精神の中に憎しみが再び突き上げてきた。それは内蔵から発して、血液を通り、脳関門を通過し脳に至った。

「降伏してはいかがですか？」

私の言葉は二人に怯えをもたらした。

「何をいってるんだね。アッシュくん。最後まで我々は立派に戦うよ。勝つ可能性がわずかでもね」

「アッシュ。なあに、今によくなるさ。心配せずに働いてくれ」

シャルレ・ガージマスは壁際によりかかって、立っていたが突然言った。

「反乱軍のことはどうなった？」

父はギクリとした。

「知っていたのか。ガージマス」

「戦争が始まった今、昔の仲間だったものは皆あなたのやり方には不満だったものな」

「お前もそうなのか？ガージマス」

「俺はあんたについていくさ。拾ってもらった恩もあるしな」

ジルメルは「そうそう」と言って私たちに反乱軍の鎮圧をお願いしたいといってきた。改造人間、この軍では超人というらしかった

が、その超人たちの部隊と合流してゲルマンの中で反乱を起こした人々を鎮圧してほしいと言われた。その地とは旧バーデン自治区だった。サニチェエート、ランムルヒ。私は二人を心配した。巻き込まれていなければいいが……。

シャルレ・ガージマス＜5＞

その晩夢を見た。深層心理はバーデン地区に飛んでいたのだろう。サニチェエートが出てきた。何事が私に必死に訴えかけているが声は届かない。ランムルヒの顔がみえる、先日会ったときよりも成長してみえた。だが、顔の目の部分は暗い深黒に覆われて、感情を伺い知ることはできなかった。

良く寝つけなかったせいか日が高くなってから目覚めた私は本部で他のゲルマンの超人に紹介された。皆、どこか人間の表情を失ったように、鉄仮面の顔をしていた。部屋の右側の窓の側にいたのはビクトワール・デノバという若い将校だった。どういう改造を受けたかは知らないが鼻が少し曲がった碧眼で、全身を覆うコートを優雅に着こなしていた。もう一人は紳士帽をかぶった奇妙な風体をした女だった。赤い髪は染めたものらしかった。そして、手には本を持っていた。何を持っているのかと尋ねると、どうやらイエズス教のものらしかった。いつでも暇な時に読めるように、持っているのだそうだ。

イエズス教は世界人口の6割を占める世界宗教であって、キリラム教と世界を2分する宗教だった。

その二人は自分の能力を明かさなかった。私も何もいわなかったが、彼らにとって私もしくは私の父は有名人らしかった。握手をかわすと、投入される部隊と人員の配置を相談した。彼らにとって何の思い入れもない町でも私にとっては違う。なんとか最小限度に被害を食い止めて、反乱軍を鎮圧したい。シャルレ・ガージマスは私にそっと囁いた。

「ガルド・イニエーブが反乱軍のリーダーらしい」

あの！イニエーブが敵に？？何故彼は裏切ったのだろう。私の気持ちは暗く沈んだ。なんとか話し合いの道は残されていないのか…

シャルレ・ガージマス＜6＞

一週間後私は自らの未来予測システムが安全だと判断しただけの人員を引き連れてバーデンに向かった。その数なんと一万。これほどの人数をさくのは本部も難しかったらしく、私たちは一週間も待たされた。ゲルマンの銃製造技術者マルグレーテが作ったＭＧ３８７を持った兵士たちとともに私たちは列車で運ばれていく。この道を一民間人として通ったことがイメージとなって、私をまとった。今もレンナは私の側にいるのは変わらないが、もはやあの時のような穏やかな目ではない。私たちはもはや軍に監視され同時に使われる存在だった。

「アッシュ。バーデン地区に行ってどうするつもり？」

レンナが盗聴器の存在を心配しながらも私にこう尋ねた。私は慎重に辺りを見回し、誰もいないことを確認した。

「バルド・ゲール・アランを説得する」

レンナは絶望的な空想を私が見ていると思ったのだろう。嘲るように笑った。彼女のこの笑いは私の緊張した神経をいらつかせ、ついに爆発させた。

「何が、可笑しい！！」

私のほとんど機械で埋め尽くされた腕はレンナに向かってしなった。しまったと思ったが、気づいたのはレンナが数メートルふっ飛ばされた後であった。

傷ついたレンナは何も言わずによたよたと隣の車両に移っていった。介抱しようとした私に「触らないで」と言い捨てて。

数分後、紳士帽をかぶった時代錯誤な赤髪の女が次に入ってきた。

「アッシュ・クロフォード。味方に手をかけるとは何事ぞ」

古めかしい言葉を使うこの女の名前はなんだったろうと思い出そうとしていると、向こうから名乗ってきた。

「奇妙ね。私を忘れるなんて、あなたの目の前で死んだ女というの

に」
私の目の前で??私は混乱した。まさか……。嫌な予感が私を過去へ連れ戻していった。
「グルミア・ファラデーか」
かつて偽りの恋愛をして捨てた女が何故ここに?彼女は私の目の前でガソリンをかぶり、火をつけ焼け死んだはずだ。
「そうよ。ふふふ。あなたはあの時から暴力的なところだけはちっとも変わってないわね」
「何を言っている。彼女に手をあげたのは今日が初めてた」
「ふん。どうだか」
コートを着たビクトワール・デノバが入ってきた。私たちをジロリと見ると、機械的に言葉を発した。
「作戦会議だ。来てくれ」
私たち二人はにらみ合いながらも後ろの車両に歩いていった。

シャルレ・ガージマス＜7＞

作戦は単純明快だった。バーデン地区の本部と疑われる旧自治区議事堂を攻めて、相手の科学設備を麻痺させるのだ。そして全地区の制圧を行なう。

中央ではバーデン自治区を作ることを許した穏健派が窮地に立たされているらしい。まもなく強硬派の内閣が作られると噂されている。旧法外の貴族を母体とする我々は一転して窮地に立たされる可能性も高い。そろそろ、この戦争から見切りをつけるべきがきたのだ。それには家族を救いださなければならない。バルドはうまく交渉に応じてくれるだろうか。作戦の総指揮を取る超人でもある、ビクトワール・デノバは私に1時間だけの交渉を許した。ただし、相手に対する如何なる譲歩もしないからそのつもりで交渉にあたってくれといわれた。

バーデン自治区駅についた私たちを町の静寂が出迎えた。町はまるで、廃墟のように静かだった。列車から降りるのも危険だったが、私は交渉用に黄色い旗を持って町を歩いた。ところどころ街中は人の気配がしたが、何も起こらなかった。ビクトワール・デノバは交渉がうまくいくように青いお守りをくれた。そのお守りがやけに重く感じられる。

バルド・ゲール・アランは議事堂前で私を出迎えた。

「やあ。アッシュさん。お元気そうで何より」

「一体どういうことだ。説明してくれ。何故戦う必要がある」

「それはゲルマン政府の現首脳である者たちが、我々にここからの立ち退きを命じたからです。ここは死んでいった者の魂が帰る場所です。墓だって無数にあるのです。イエローランドで許されなかった墓が。そして何よりも許せなかったのが、あなたの父上がそれを黙認したことです。お父さんにはお会いになられましたか？」

ゲルマン国軍本部で見た父の様子を思い出し、吐き気がこみあげ

てきた。不快そうに顔を歪めると、バルドは察したらしく、首を横に振った。
「もはや彼には事態に対処する力がないとみました。わたしが今では法外の貴族のリーダーです」
「バルドおごったか」
突然、話していた部屋に声が響く。父、クルム・ダーデンスルトの声だ。私たちは辺りを見回すが姿はない。
「アッシュくん。通信機のようなものをもっているのかね？」
「いや、もっていない」
私が言葉を言い終えないうちにバルドの姿は見えなくなった。だが、次の瞬間。争うような音が聞こえ、バルド・ゲール・アランとクリム・ダーデンスルトの顔がぼんやりと浮かびあがってきた。クリムの手には心臓が握られている。バルドの胸には大きな穴が開いている。
「裏切り者の始末は終わった」
父はそう言うと、何かのボタンを押した。一斉に戦闘が始まる音がした。銃声や悲鳴が駅の方から聞こえる。
「私を利用したのか」
搾り出すように私は言うのがやっとだった。恐怖で足が震えていた。
「瞬間移動装置の実験結果は良好なようだな。お前もよくやった」
父はそう言って、また姿を消した。

シャルレ・ガージマス＜8＞

サニチェート。ランムルヒ。どこにいるんだ。戦場をあてもなく動きまわる、私に容赦なく銃弾が注ぐ。機械の体に当たると音をたてて、弾かれるが生身の部分はそうはいかない。痛みとともに、鮮血があふれる。痛みを感じるよりも、探すべきものがあった。足は幸い動いた。戦場で徐々に駆逐されていく、バーデン地区の住人たち。

倒れた市民が「助けてくれ」とうめき声をあげて、手をあげる。だが、私はその手を握れない。血に染まったこの手は、この両手はまだ見つからない二人を抱きしめるためのものだからだ。

気が触れた男を見るような目で横を通りすぎていく兵士たち。あたり一面血の海だった。そこに一人、倒れた死体を前に泣いている少女がいた。ランムルヒだ。

まさか、と思った。まさか倒れている人間が、彼女なわけがないと思いたかった。しかし、現実は無情だった。その死体は紛れも無くサニチェエートだった。機械化された目からは涙は出なかった。ただ、油のようなものが目から流れでた。ランムルヒは私に気づいて、すがるように泣いた。私は呆然と辺りを見て、安全なことを確認するとそっとランムルヒの背中に片手を回した。もう一方の手は既に動かなくなっていた。

深く沈む泉の中に意識はあった。泉で釣り竿を手に糸を垂れる私に獲物がかかったことを知らせるように糸が引かれた。しかし、そこには何もなかった。ただ、餌もなかった。

何もかも失った悲しみだった。揺れる風景があたり一面を黄色に染めた。しかし、まだ釣竿は残されている。残された人間と共に生きていかなければならない。

私の身にはあぶれんばかりの生気が宿った。私によって、父も母も失ったランムルヒはこの先も私を兄のように慕ってくれるのだろ

うか。この醜い機械の体を愛してくれるだろうか。だが、そこに答えはない。未来に答えはないのだ。私は今ランムルヒを生かしたいと思っている。そして、何よりも彼女に平和な時代をみせてやりたかった。

ランムルヒは泣き止んだ。私は彼女を安全な場所に運んだ。ビクトワール・デノバは傷だらけの私を見ると、すぐに手当を部下に命じた。そして、ランムルヒを引き離そうとした。抵抗したが、無駄だった。彼女は市民側の生き残りだからだ。しかし、父がどこからともなく現れて、一言デノバに言うと、デノバは渋々ランムルヒを渡した。絶望から救われた私は己の無力さに泣いた。また涙はでなかった。黄色く濁った液体が私の頬を伝った。シャルレ・ガージマスがやってきて、私の肩を叩いた。悼むように。だが、私には何の慰めにもならなかった。

シャルレ・ガージマス<9>

戦争はまだ続く。私はしばらく、首都アルベリンで休養をとることになった。傷の具合は全治一ヶ月だった。その間に様々なことが起こった。まず、ゲルマンの政府が崩壊した。が、新しく政権を握ったのは強硬派ではなかった。軍によるクーデターである。この政変は最も心配された他の同盟国の支持も受けた。戦局を立て直す必要があったからだ。新政権のトップにはジルメル将軍、いや今ではジルメル首相となった男がついた。

アーリア帝国の最新の科学兵器を前に劣勢を強いられていた、政権は生物学的な兵器に活路を見出そうと画策したらしい。次々と新聞の紙面に夢の新兵器の噂が踊った。

だいたいにおいて私は軍との距離をとりつつ、軍属にいるといった状態だった。用意された部屋や使用人も軍が用意してくれたものだ。私は父の存在について、考えをめぐらせた。

私に対するこのような厚遇は父の配慮によるものに違いない。一方で、私は父のやり方に反感を持っていた。一体、父と法外の貴族はどんな関係があるのだろう?百戦錬磨のバルド・ゲール・アランを一手の元に葬り去ってしまう父はいったい何者?そうか!!私は閃いた。もう一人の畏怖されるものイポニチェ・ゴルディーザの存在を忘れていたのだ。父とゴルディーザは同一人物なのだろうか?つまり、クリム・ダーデンスルトとイポニチェ・ゴルディーザは同じ物体。物体?もし、彼らが別々の人間だった場合イポニチェ・ゴルディーザはどこで何をしているのだろう?そう人は物体だ。しかし、それはただの物体とは事柄を異にする。レンナが前に言っていたことを思い出した。イポニチェ・ゴルディーザは物体でさえない、と。

レンナはたまに顔を見せて戦況を話してくれた。私はこの前の非礼を詫びたが、レンナは笑ってゆるしてくれた。自分の非は認めな

かったが。
彼女はアーリア帝国にたまにスパイに入り、情報を得ているらしかった。アーリア帝国の戦意などはきわめて低いと伝えてくれた。だが、彼女は恐らく、それでもゲルマンが押されている事実にジリジリと焦りを感じているらしかった。
「もう。何もかも嫌になるわ。全てをなくしてしまいたい」
彼女は疲れた顔で言葉を吐き出した。
ランムルヒはサニチェエートの形見を身につけていた。彼女は美しい娘に成長していたが、心は荒みきっていた。学校にはアルベリンに来てから数日後に通い始めたが、様々な事件を起こし問題児となっていた。彼女にはゲルマンの人間に対する思いやりといったものを見せることはなかった。何か気に入らないことがあると容赦なく、人を殴りバルド譲りの計略で、人を陥れた。そして、家では私に切なげな笑顔を見せるのだった。
「アッシュ。私は疫病神よ。あなたも私といると今に死んでしまうわ」

シャルレ・ガージマス＜10＞

ランムルヒは彼女なりに思いつめているらしかった。バルド・ゲール・アランについては話すべきか迷ったが今も話してはいない。毎日の日課である庭の散歩には必ずついてきてくれたが、決して体の一部である金属には触れることはなかった。一抹の寂しさを感じたが、これは決して彼女が私を嫌っているわけではないとわかった。それがせめてもの救いだった。

ある日、彼女の担任と称する女性がやってきた。フフィテ・ムルジクという名前の三〇代位の女性だった。尖った鼻の持ち主で、よくランムルヒからは『鳥』というあだ名で聞いていた人だと私はとっさに理解した。ランムルヒの非行について何か言いに来たのだろうか？親のような、兄のような気持ちで対応に出た。金属の部分は服で隠して普通の人間っぽく振舞った。ランムルヒは関係上私の親類ということになっていた。

「お嬢さんは実に良い適性を示しておられるのです。学校というのは名ばかりで新型兵器の搭乗者を選抜するための学校なのです。お嬢さんにはその新型兵器に搭乗していただきたいのです。これは私たち軍の意向でもあります。同時に政府のトップの望みでもあります」

「ジルメルか。子供たちまで戦わせる気か。ゲルマンの未来はどうなる」

「もちろん全ての子供というわけにはいきません。つまり、一部の選抜されたものだけです。お嬢さんは敵を攻撃する時のためらいがありません。これはもともと人間が持っている同族を攻撃しない本能なのですがね。さらに、新型兵器は脳波を使用するのですが、相性もいい。実は言うとあなたに彼女を説得してほしいのです。彼女はここを離れるのを渋っています。我々の勝利のために、どうかお願いします」

「だが、ランムルヒには自殺した親族がいる。彼女の心はまだまだ不安定だ。とても戦力になるとは思えない」

「たしかに、そうです。しかし、あなたが一緒にいればどうでしょう？」

「私も一緒にランムルヒに付いて行けと？」

「そうです。あなたの未来予測も強大な力があってこそ役に立つはずです」

私はしばし考えた。どうせ傷が癒えれば戦場には連れていけない。だが、彼女の戦場行きが決定事項であれば一緒に過ごせるのは何よりの幸せではないだろうか。隙を見て逃げ出すこともできるのだ。今こそ、昔の計画を果たす時がきたのかもしれない。戦争の飛び火しない辺境でのゆっくりとした生活だ。

私はその晩ランムルヒを説得した。次の日、彼女は新型兵器アドレナリンの搭乗者に決まった。

シャルレ・ガージマス＜１１＞

次の日、私たちは新しく新設された部隊に合流するためにゲルマン第二の都市レンブルグに向かった。ランムルヒはこの日珍しく饒舌だった。

「アッシュ。私こんな年でアッシュと一緒に戦えるなんて思ってもみなかったわ。きっと、この戦争を勝利に導いてみせるわ。フフィテ先生は私に国中の人たちが期待してるって言ったわ。がんばらなくちゃ」

自らの使命を此処に得たりとばかりに話すランムルヒの様子を注意深く観察すると、彼女の中には恐怖がみえた。覆い隠すように振舞ってはいるが、一度は誰でも戦場に出る者は通る道とはいえ、わずか１０代中頃の少女にとって戦争という未知の事物に対する恐怖は動揺を与えるに違いなかった。肩に手をあてて私は彼女に言い聞かせる。

「大丈夫だ。新兵器は既に搭乗実験も終わっている。危険はない。もし、あるとすれば、ランムルヒ。君のことが心配だ」

「私は大丈夫よ?アッシュだって未来を見通す力があるんでしょう?私の危機には駆けつけてくれるでしょう?きっと私たちの部隊はこの戦争で決定的な英雄的仕事を成し遂げるに違いないわ」

「戦争はそんなに甘いものではない」

彼女は恐怖を正面から受け止めようとしていないのは明らかだった。恐怖が何かをきっかけに暴発しなければいいが。私は不安になった。というのも昨日の夢で、彼女は大空に翔んでいたからだ。新兵器がどんなものであれ、彼女の気持ちは浮わついていることが読み取れた。

レンブルグに着くと数名の兵士に護送されて軍の基地へ向かった。レンブルグは海に面した港湾都市でもある。すでに戦艦が新兵器を搭載し、洋上に浮かんでいるのが見えた。ランムルヒははしゃいだ。

「アッシュ。あんな大きな船に乗るのね！！楽しみだわ。わくわくしちゃう」

不安が頭をよぎる。いきなり、実戦か……。しかも、船に置くことで、逃亡を防止するか……。用意周到だな。私の気持ちは既にこの国になかった。あとはランムルヒをいつ説得するかだ。本当の説得は遙かに大変に思えた。なるべく早く。彼女の中の使命感がこれ以上大きくならないために。

シャルレ・ガージマス＜12＞

小さなボートに乗せられて巨大な戦艦を見つめる私の後ろでランムルヒは目を輝かせて洋上の船を見ていた。タラップが降ろされ、船の上から見下ろす人々の影が見えた。

船上の人となった私たち二人に数名の搭乗員が紹介された。

艦長のアレクサンドル・ストロー。軍服を一寸の狂いもなく着こなして、白く薄い手袋をはめた長い顔の男は、冷ややかな目で、しかし笑顔を浮かべて私たちを歓迎した。

副艦長のミシェル・ブラウニー。女性でありながら、かなり高位の階級を持つ歴戦の強者だ。なんでも、同行してきた兵士によると、狐のミシェルの異名があるらしい。しかし、彼女はその名前を呼ばれると兵士を睨んだので、兵士はすくみ上がってしまった。深い彫りで眉毛は薄く開きかけの桟橋のような角度で目の上に二つついていた。

そして、もう一人は私にとってやっかいな人物だった。グルミア・ファラデー。かつて、私と一夜の恋をし、捨てた女だが異常な偏執狂で私の周りをうろついたあげく、焼身自殺を計った女だ。まさか超人となった彼女と再び会うことになろうとは……。軍の上層部は私たちの過去を知っているかどうか確かではなかったが、危険な兆候を感じた。

グルミアは焼けた肌を隠すように長袖、長ズボンを履いていた。紹介が終わると無関心そうに歩き去っていった。

一方私たちの案内を引き受けたのは副艦長のミシェル・ブラウニーだった。私たちがのってきた右舷から船の地下にあたる部分の船室に私たちを案内した。狭かったが一人一部屋がとなりどうしで割り当てられていた。ランムルヒの船室は端っこだったが、もう一方の船室には誰が入るのだろう？と考えた。聞いてみると、グルミアらしい……。グルミアを超人たる所以にしているその能力を早いこ

と探らなければとんでもないことになる。
獅子身中の虫だな。まさしく私たちはゲルマン軍の中の虫であった。しかも、ともすればゲルマン軍を混乱させかねない牙を持つ虫だ。
ミシェル・ブラウニーは軍人らしく命令に忠実に、そして親切に私たちに船のことを説明してくれると、お待ちかねといわんばかりに、格納庫に向かった。
そこにはシートをかけられた巨大な兵器があった。どんな形をしているのかはまだわからなかった。
「さっそく乗ってみましょうか?」
ブラウニーは何気なく言うと、ランムルヒがわくわくした表情で「いいでしょ?」と目で私に語りかけてくる。私はそれを察して、「乗ってみたらどうだ?」と声をかけた。
「うん!!!」
元気のいい返事だ。大切なのはこの機体の性能を知ることだ。頼むぞランムルヒ。
技師らしい男から説明を受けるランムルヒを前に私はミシェル・ブラウニーとこの艦における私たちの役割への期待を耳にタコができるほど聞かされた。
ふいにすさまじい激音が耳に入る。機体の動力が作動したらしい。
「おーい。シートを外せ~!!」
作業員の声が聞こえる。シートが外された私が見た兵器の姿は丸い円盤の姿をしていた。

シャルレ・ガージマス＜１３＞

始動実験は終わり、ランムルヒは興奮した顔で駆け寄ってきた。
「アッシュ。見てくれた。あんな大きな機体が浮いたわよ」
たしかに、数メートルあれだけの重量の物が浮いたのだ。正確な重量はわからなかったが、特殊な合金で作られたらしいそれは質量が大きいにせよ小さいにせよ、あれだけ巨大なものが浮いたのは特筆すべきことだった。私は浮遊原理を知りたかったが、ミシェル・ブラウニーが知っているはずはなかった。ただ、適正者の脳が地球という一つの物体と組み合わさることで、独特の浮遊能力が出るらしかった。
「科学者の試算によると、時速３０００ｋｍまで持ちこたえられるはずです」
「体にかかる重力は半端ではないな。大丈夫なのか？」
タオルで髪を拭いているランムルヒを横目で見ながらミシェルに小声で問う。ミシェルはさあ？と言った調子で肩をすくめてみせた。やはり、軍人である。心配だったが、何も勝算のない兵器を最前線に投入するほど馬鹿ではあるまいと信じることにした。そして、実質あの兵器がなければ我々の脱出はどのみち不可能に近いのだから。
船は目的地へ向かって、全速力で航行した。しかし、目的地まではそれでも一週間はかかった。その間。何度も試乗実験を行いながら、徐々にランムルヒは操作性を増していった。そして、それとともに技術スタッフと話しこむ姿が多く見られるようになった。彼女を戦争の犠牲者にさせないためにといいながら、戦争から離脱するにも彼女に頼らなければならない自分に嫌気がしたが、それもまた一つの道だと思い定めた。
いよいよ、敵部隊にいつ遭遇してもおかしくない海域に入ってきた。私たちは一路アーリア帝国の海岸線を目指してきたのだから、いずれは戦線にぶつかることはわかっていた。そして、ランムルヒ

も船から離れて単独飛行を可能にするまでに進歩した。技術者と喜ぶ彼女を遠くから見ながら私は脱出の準備が整ったことを感じた。

次の日、ランムルヒの部屋をノックした。休憩時間なのでいるはずなのは調べてあった。彼女は驚いた顔をしたが、すぐに快く迎え入れてくれた。

「どうしたの？アッシュ？」

「君に話しがあるんだランムルヒ。私はつくづく戦争というものが嫌になった。あの機体を使って一緒に逃げよう。戦争のない世界へ行くんだ」

しかし、ランムルヒの答えは「ＮＯ」だった。

「いつでも逃げれるんだから焦ることはないんじゃない？私は実戦を早く味わいたくてうずうずしてるの。もし、負けが確実になったならいる意味はないからその時は脱出しましょう」

彼女に完全に主導権を握られてしまった。私一人では逃げ出せないことを、ランムルヒを私が見捨てられないことを見透かしての行動だった。私は止むなく部屋を出た。

グルミアが私の部屋の前を歩いているところだった。聞かれたか？不意に不安が襲った。

彼女はゆっくり会釈をすると、自分の部屋に入っていった。大丈夫だったのか？自らに問いかけたがわからなかった。彼女の超人としての能力は依然として謎であった。だが、私には未来予測能力がある。怖いものはないはずだった。

この夜夢を見た。

シャルレ・ガージマス＜１４＞

グルミアは私を信じられない力で圧迫している。が、手は見えない。ただ感じるだけだ。首のところに強烈な圧迫痕が残る。これはグルミアの力か?私は夢の中で自問自答した。それと共に大きな恐竜が私の背後からものすごいスピードでやってきた。しかも、あれはティラノサウルスだ。肉食恐竜の巨大な姿を前にグルミアは姿を消した。そして、私はＴ－ＲＥＸにひとのみにされると、暗闇のトンネルを通って、落ちていった。ガゼルとジョベルジアが恐竜の胃の中で待っていた。

「アッシュ。よくきたな。これから俺たちはいつでも一緒だぜ」

「ジョベルジア。もちろんだとも」

現実では言わないだろうセリフをポンポンと私の口から出す。

ガゼルはルービックキューブを持ちながら、必死にといているらしく、私を無視したままだ。友情が成立したジョベルジアとの間に世界の亀裂が走った。半分の世界が奈落の底に落ちていく。ガゼルは私の方にいて、カチャカチャと手を動かしている。

「ジョベルジアはどこへいったんだ?」

私は彼女に聞いた。しかし、答えはなかった。ガゼルの姿がレンナに変わり、彼女は私に踊ろうと手を出した。とにかく手を差し出して、踊ろうといっているように感じたのだ。

半分が抜け落ちた世界で私とレンナはワルツを踊った。

朝目が覚めると、既に戦闘は開始していた。艦上に出ると敵の戦闘機が爆弾を落とそうと近づいてくる。それを艦砲射撃で撃退している。ランムルヒはどこだ?私は目で探す。

巨大な円盤が凄まじい光を放ちながら、空をかけめぐっている。近寄った戦闘機はふらふらと落ちていく。円盤から光線が放たれ、海の上に巨大な波の山を作った。そして、２，３撃後、ランムルヒ

の乗った機械は敵の戦艦に命中した。大きな爆発が起こり、私たちは勝利した。

出迎える軍人たちにランムルヒは笑顔で手を振って応えている。ふと私と目があったような気がした。

それからというもの洋上での戦闘は連戦連勝だった。暗号名、ETという機械が世界の戦況をがらりと変えたのだ。もはや、軍人たちにとってランムルヒはなくてはならぬ存在だった。そして、彼女はもう私を必要としていなかった。春が終わろうとしていた。暑い夏がやってくるはずなのに、私の心は震えていた。

シャルレ・ガージマス＜15＞

アーリア帝国の首都サンタアルベニアを急襲する計画が持ち上がった。しかし、サンタアルベニアは海から遠い。まずは港湾軍事都市サンフランを叩くべきだと軍の首脳は決定したらしい。我々は連戦連勝だったが、他の地域では明らかにゲルマン同盟軍は押されていた。さらに悪いニュース（私にとっては悪いも良いももはやないのだが）が入ってきた。ゲルマンに次ぐ国力を持つ、ロマリアが降伏したのだ。ゲルマンのあるエウロペ大陸に敵の大きな足がかりができることになった。アルベリン空襲が実施される時期もそう遠くないだろう。作戦会議が艦内の会議室で行われた。

出席者は艦長のアレクサンドル・ストロー、副艦長のミシェル・ブラウニーそしてグルミア・ファラデーに私とランムルヒを加えたメンバーだった。

始めにミシェル・ブラウニーから説明があった。

「敵の戦力は今まで比べ物にならないくらい結集しています。それも、そのはずアーリア帝国の本土なのですから。この艦の重力変換装置、そしてランムルヒのＥＴによって我が艦は連戦連勝を重ねてきました。しかし、敵も我々の対策をしてきています。既に重力変換に耐えうる機体が開発されているらしく、一機が艦上に到達しました。砲撃によって事無きを得ましたが……」

ストロー艦長は冷静にランムルヒに告げる。

「もし、この艦が撃沈したときは赤いボタンを押しなさい」

ランムルヒは恐る恐る艦長に聞く。

「どうなるの？」

艦長の眼が冷徹に輝いた。

「それは知る必要はない」

艦長の有無を言わせぬ態度にランムルヒも引き下がった。

「いよいよ、正念場ね」

グルミア・ファラデーはポツリとそう呟き、会議室を出ていった。

次の日作戦名フニンが実行された。私とランムルヒは廊下であった。

「アッシュ。必ず生きて帰りましょう」

そういうと彼女は走って、ＥＴのある格納庫に向かった。

昨日見た夢はこの艦が沈むことを示していた。夢と起こった出来事の相関を調べるとおよそ間違いない。私は逃げる気が今になって失せた。一人では何もできないのだ。

戦いの始まった音がした。自分の部屋で私は日記を書いていたが、艦に爆弾が直撃したらしい。警報が鳴った。「船が沈むぞー」大きな声が聞こえる。

私は甲板に出ると救命ボートに乗った。見ると、グルミア・ファラデーが泳いでやってきた。私は手を差し出すと彼女は手を掴んだ。

２時間後戦闘は終わり、私たちは敵軍に捕まった。

シャルレ・ガージマス＜16＞

「やあ。アッシュくん」

赤のシュナイルは再び私の前に姿を現した。堂々と勝ち誇っている。

「君が私たちを裏切るのは少々予想外だった。君も馬鹿なことをしたもんだね。君には大事な娘がいるね？その子はこちらで保護しているよ。ランムルヒというらしいね。大戦は終わった。アーリア連合の勝利だ。これで、皇帝の悲願も達成され世界はますます発展していくだろう。それで、逃げた残りの法外の貴族のことなんだがね。ランムルヒの命と引き換えにということでどうだろうか？君は世界の勝利者となった我々の一員として働けるのだよ。感謝してほしいね。裏切り者からずいぶんな昇格だ。どうするね？戦うか失うか。道は一つだ。そうそう明日は処刑がバチカチ広場で行われるよ。見ていきたまえ。君の大事な人も見られるかもしれないよ」

赤のシュナイルは暗くうつむく私を見て満足そうに言った。そして「明後日まで待とう」と宣言した。懐かしい顔もあった。ジョベルジアとガゼルだ。そして、もう一人長身の男がいる。彼はヴィクトル・ユゴーと名乗った。かなりの切れ者らしく、ひと通り私たちが如何に善戦したかを称え、さらに比較して自分の国の素晴らしさをアピールした。巧みな比喩表現、誇張どれをとっても一流の演説家のものであった。

その晩不思議にも夢を見なかった。

次の日処刑台に立つ人間をぼんやりと見ていると、レンナがいた。そうか。彼女も殺されるのか。何の感情もわかなかった。それが何より恐ろしかった。裏切り者には死をそれが彼らの哲学だった。

シャルレ・ガージマス＜17＞

朝目覚めると、ランムルヒからの手紙が置いてあった。

アッシュ　お元気ですか？こちらは元気にやっています。私は毎日実験棟で体を様々に調べられています。脳波変換装置の仕組みについて研究しているようです。母は死に、父は初めからいません。せっかくできた家族の絆もあなたを残して失ってしまいました。どうか、あなただけは生きて私を一人にしないでください。

ランムルヒ・シンシア

悲しいことだ。亡くなった母親の姓を名乗り、自らが見えない父親に会ったとも知らされずに、ここまで来た。ふと、他の法外の貴族たちの行方、そして父の行方が気になった。シャルレ・ガージマスはどこにいったのだろう？彼は今や全世界から追われる身だ。新聞によるとゲルマンにも親アーリア帝国の政府ができるらしい。

わずかに残された血縁という呪縛に私は父を探したいと思った。せめて、一度腹をわって語りたいと思った。彼らがどう思おうと、私はそうしよう。アーリア帝国がランムルヒのことを調べるためにはしばらくは何があっても殺さないと思っていた。だが、世界を支配したアーリア帝国はもはや敵はいない。しかし、連合内のパワーバランスの問題もあり、力をまだまだ必要としているに違いない。

赤のシュナイルが二人を連れてやってきた。

「もう一度チャンスを君に与えたい。どうだい？やってくれるかい？未来の読めるあの男を掴まえられるのは君しかいない。君はあの男の完成品だからね」

完成品？私が？未来予測ではなく、未来改変を達成していたとい

うのか?ということはこの結果は私が望んだ結果?戦争に負けることも?たしかに、そう考えれば様々なことも腑に落ちる。私は今や、偶然の神に手を差し伸べられた一人の人間になったのだ。偶然性の入りこむとき、私は無敵だった。私が父を見つけたいと思えば見つかる確率は高い。何故なら世界は多くの偶然性の入りこむ余地があるのだから。

私とジョベルジア、ガゼルは再び旅に出ることになった。

シャルレ・ガージマス＜１８＞

シャルレ・ガージマスは最早戦後にとって危険な人物になった。彼のデータは既にゲルマン軍部から、アーリア帝国側に渡っていた。体から発する毒については一種の細菌らしかったが、毒が使われた形跡を見ると、毒の元となるバクテリアは完全に同一なものはなかった。つまり、変異しているのである。どうやら、ガージマスの体の中で常に変異を起こしているらしいのだ。しかし、その反面伝染力は弱かった。そして、それは彼が望んだ時以外に空気中にばら撒かれることはないようだった。しかし、何が起こるかわからない。アーリア皇帝の身辺は常に警備兵によって固められ、守られていたが、それでもアーリア帝国は二人を恐れていた。テロの危険性を声高に叫んで、市民に注意を促した。最早、どこにも法外の貴族の逃げ場はなかった。

私たちはあてもなく世界を旅していた。そして彼らを追っていた。

ガゼルは私に言う。

「あなたに残された時間も少ないわ。ランムルヒは調べつくされて不要とわかれば処分されるわ、その前に二人を捕まえて成果を示すことね。自分は役に立つ、とね」

「ガゼル。君は何故まだここにいるんだ?もう世界はアーリア帝国の物だろう?」

「アッシュ。それがそうではないの。我々はもっと大きな敵と戦わなければならないのよ」

「どういうことだ?」

私は怪訝な顔をして聞き返した。ガゼルは長い髪を後ろからかきあげながら、ため息をついた。

「つい、先日地球に未確認飛行物体が飛んでいるのが確認されたわ。それはゲルマンの物でもない私達の物でもない。不思議な形状をし

たものだった。まるで、ねじ巻きのようなね。ほら、これがその写真よ」

ガゼルは私に、一枚の空の写真を渡した。そこには、黒い太陽の光に反射している物体が写っていた。

「これは。一体？」

「異星人よ。これは極秘情報だけども、我々とは異なる銀河からかなりの科学力を持った異星人が接触を図ってきたのよ」

「なんだって！！異星人？馬鹿げているよ」

「信じないのは自由。でも、我々人間に残された時間はあまりない。我々は未来予測システムを完成させなければならないわ。個人レベルでなく。人類レベルでね」

「私のデータはとらないのか？ランムルヒのように」

「すでに解析はゲルマン側が終えていてデータは十分にあるわ。安心しなさい」

ガゼルと私の会話の間ジョベルジアは何も言わなかった。彼は以前のように活発な人間ではなくなっていた。どこかぼんやりもしている。

夕刻、旅先で一人の男と合流した。ヴィクトル・ユゴーだ。彼はシャルレ・ガージマスの居場所を掴んだ、と得意そうにやってきた。

シャルレ・ガージマス＜19＞

かつてのゲルマン同盟の中の一国であるイラチェリアに特殊な軍用の飛行機で旅だった。戦争は終わったとはいえ、この国の人々はまだ戦っていたからだ。和平反対派は森林に逃げこみ、徹底抗戦を叫んだ。一方、政府側は和平を合意したのだ。シャルレ・ガージマスの保菌の一種がイラチェリア政府軍の命を多数奪ったという。至急、戦闘部隊の派兵が決まった。私たちはそれに同行して、イラチェリアに入った。

空中から見るその国は緑に覆われた、とても美しい国だった。珍獣デルミニアの住むイラチェリアにはユゴーは少なからず縁があるらしかった。

「若い頃デルミニアに会いにこの国に寄ったものですよ。それも5回も。しかし、結局見ることは叶わなかった。知ってますか？アッシュさん。デルミニアは動物園にいるものと野生の物ではモノが違いますよ」

「どう違うんです？」

私は機上で面倒そうに聞き返すと、敏感に相手の気のないのを感じ取りながらも、話を続けるユゴーだった。

「まず目の色ですね。狩りをするとき、奴らは目の色で獲物の大小、そして数を仲間に知らせるんですね。そして目から怪光線を出すというわけです。著名なデルミニア学者のラングレー氏の論文を読みましてね。実に見るのが楽しみだ。もっとも私が一番心配しているのが、あのガージマスの非人道的能力が、デルミニアにも及ぶことですね。そのような重大な事態に陥ることを避けるためにも私たちが来たのです。上からの指令は聞いてますか？」

私は“聞いてない”というジェスチャーをして首を振った。

「ん？あなたは聞いてないと仰りたいのですか？実は私の生まれ育った故郷の文化は違いましてね。首を振ると“イエス”首肯くと“

ノー”なのですよ。さあ、今度は言葉ではっきり言ってください。ノンオアーウイ?」

彼の自文化に対する過剰なまでの意識に少しうんざりしながらも私は「聞いていない」と答えた。

「なるほど。我々の第一の任務をお教えしましょう。ズバリ、シャルレ・ガージマスの捕獲です。おや?捕獲という言い方が気に触った?もはや、アレは人ではありませんよ。危険な猛獣です。調べつくしたあかつきには私が脳天に一撃くらわしてやりますよ。ハハハ」

私はガージマスとは知らない仲ではないので不快そうに顔をしかめるとガゼルが助け舟を出す。

「で?捕らえることができなかった場合は?」

ユゴーはガゼルをマドモワゼルと大層な敬称をつけて話しだす。彼の興味は私から彼女に移ったようだ。

「その場合は、もちろん私の出番ですね。あなた方の力は戦闘向きではありませんからね。あっ。お二人の力はよく存じてませんでしたね。カーネギー研究所にて新しい訓練を受けられたとか。ふっふっふ。期待しておりますよ。さて、アッシュさん昨日何か夢を見ましたか?」

「見ていない」と答えると私は席を立とうとした。だが、動けない。体がまったく動かせないのだ。ユゴーは不気味に笑うと、コーヒーを口に運びながら言った。

「私の話はまだ終わってませんよ」

彼の目は当初の印象よりずっと鋭かった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8021s/

アッシュ戦記

2011年12月13日11時05分発行